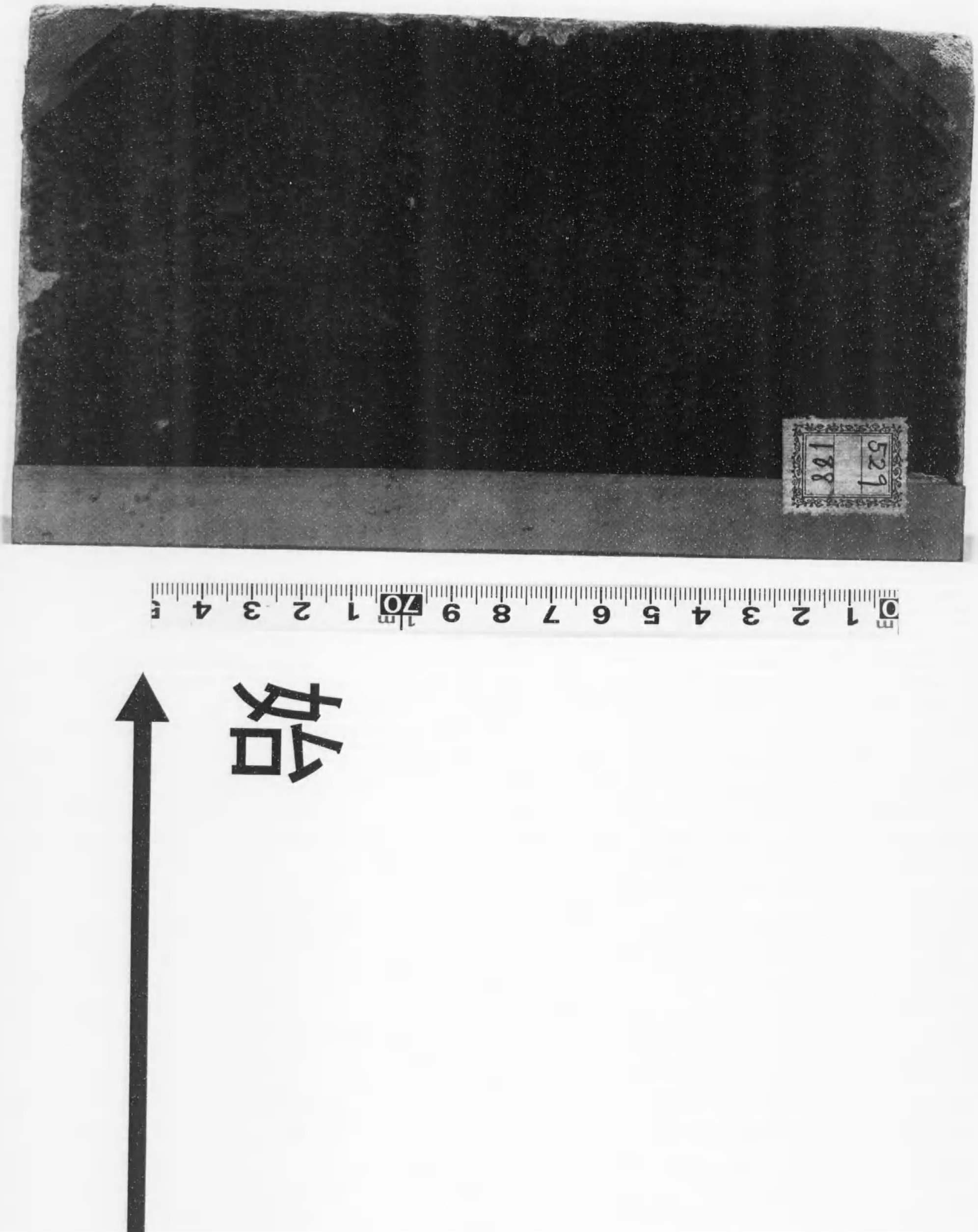
529
188
40

田山花袋著

十日朝

金星堂版

大正
14. 1. 13
内交

129-188

# 源義朝

田山花袋

鞍馬から愛宕にかけての山の雪が、キラ〳〵と夕日に輝きわたつたのも、それもほんの一時で、いつの間にか薄墨色の夕暮の帳が京の町の隅々までをも残りなく蔽ひ包んでしまつた。

五六十年前までは、町は火の消えたやうにさびしく、女車の通るのも稀に、破れた築土を修繕するものもなく、ところに由つては、捨てられた垂死の病者の犬や狐の餌食になるのをすら顧みるものもなかつたほどであつたが、十年ほど前から次第に新らしい家屋が建ち始めて、今では、左京の方は板葺檜皮葺の家屋の並んでゐないところはないやうになつた。否、大宮通りを五條の河原あたりまで行く間は、夜になつても、灯が家々の板蔀の間から洩れて、酒を賣つてゐる家では、醉つた男の濁聲に雑つて女の何か言つて戯れてゐる氣勢がしたりなどした。かと思ふと、馬に乘つた一人の侍が、供の男に松明を持たせて靜かに歩ませて行くものなどをも見懸けた。

『これからは、賑やかになるばかりぢや。何んと言つても、少納言入道どのはえらい。内裏が出來たのも皆この人の骨折ぢや。』

京ではこんなことを言はぬものはなかつた。昨年内裏が出來た時には、かうしたすぐれた立派な建物が何うして短かい月日の中に出來上つたかと誰も彼も眼を睜つた。

京の人達は長い間萬乘の君がかしこくも里内裏にのみ日を送らせ給ふのを見て來た。また、院と云はれる方々も、時には高松殿に、鳥羽殿に、鳥羽田中殿に離れてのみ住はせられてゐたのを見て來た。昔、大内裏のあつたところには、築土は壊れ、土手は崩れ、あたりは一面の草原になつて、秋は鶉が來て鳴くやうな勿體ない光景になつてゐたのを見て來た。現に、保元の亂の時には、折角少しばかり都らしくなつて來たのに、再び槻野原になりはしないかと、曉かけて白河殿の夜討の火の煙の大宮通の方へと靡いて來るのを何れほど恐ろしい心を抱いて眺めたか知れなかつた。京の町の人達は何よりも一番先に火を恐れた。應天門の燒けた時のことなどは今でも古老の物語の材料になつてゐた。

ところが心配したほどのこともなく、却てその時から少納言入道の勢力が強くなつて、田舍の受領達もその吩咐を拒むことが出來ず、僅に一二年の中にその大内裏は立派に完成したばかりではなく、つゞいて、院の御所も東三條の六角堂の向うに大きく築き起され、少納言入道の邸も姉小路西洞院に立派に構へ起されたのを京の人達は見た。否、流行か何ぞのやうに、新しい建物が



次第にそれからそれへと出來て行つた。大工の斧や鋸の音が到るところに聞えて、新しく創られた木屑が風につれて何處までも何處までも飛んで行つた。

『さうぢやな、あの時分からぢやな。あの白河の院が鳥羽の院と一緒にあの花見を遊ばされた頃からぢや、京がかういふ風に段々賑かになつて行つたのは？　それにしてもあの花見は見事なものぢやつた？　四十人の女房が思ひ思ひに裝をこらして、紫やら、紅やら、蘇芳やら、葡萄染の裳やら、その美しさは何とも言はれぢやつた。』その時の光景を見た年老いた京の女達は、そのことがまだ昨日でゞもあつたかのやうに、かうなつかしさうにその娘や孫娘達に話した。

『何と言つても延久の政ぢや……。あの時から世の中はよくなつて來た。京の町に泥棒の横行するやうなことのなくなつたのもあれからぢや……』白髮の翁はこんなことを言つて、何彼と自分の幼かつた時のことを話した。その以前には、京の町は、夜はとても枕を高うして眠ることが出來なかつた。羅生門には徒黨を組んだ盜賊が武器を隱して置いて、闇夜に乘じて、隊を組んで、財や馬や武器を澤山持つてゐる邸を襲つた。しかも檢非違使もそれを何うすることも出來なかつたので、各自に武器を用意して、それを拒がなければならなかつた。その結果として、何處の邸でも大きな獰猛な犬が何疋となく飼つて置かれた。『さういふ風だつたでな、夜になると、京の

町はもうひつそりとして、人通りもない。女子供ばかりではない、男でも犬に取巻かれるのが恐ろしうて、滅多に出て行かうといふものもなかつたぢや。それから思ふと、今は好い世の中になつた。全く變つた。もう盗賊などの騒ぎもない。』かう云つた翁の頭には、かれの經て來た長い間の京の町のさまや、院政の難有さや、次第に風俗が華奢に贅澤になつて來たさまなどが浮び上つて來た。宮中の女房達が打衣、表着、裳、唐衣などに皆な金を延べて紋を置いたさまだの、染色では滿足出來ずに、錦に玉を貫いたさまだのが歴々と眼に映つて來た。

翁の話の中には、いろ〳〵なことが出て來た。堀河の院の横笛に堪能であらせられたことだの、鳥羽の院の華美を好まれて此上なく風流であらせられたことだの、城南の離宮に立派な高殿をつくられて寵姫美福門院と倶に睦まじく住はせられたことだの、蹴毬に巧な成通朝臣がその藝にかけては寢食をも忘れるほどであつたことだの、それからそれへと盡きずに出て來た。保元の亂の本當の原因のことを話し出した時には、始めはそんな樣子もなかつたが、急に手を口に當て、飛んでもないことを言ひ出したといふやうに翁は言葉を留めた。

『何う？』

その周圍を取卷いた子供や孫達は益々それを聞きたがつた。



『そんなことは滅多に言へんことぢやによつてな？』

『でも……』

爲方なしに、翁はこそ〳〵と小聲で、非常にわるいことでも話すやうに早口に二言三語言つた。しかもそれだけでもその三年前の保元の亂の本當の原因は子供や孫達に飲み込めないことはなかつた。

『鳥羽の院のお崩れになるが早いか、讃岐の院が謀叛をお起しになつたのはそれでわかつた。』

『それぢや、それぢや……』

翁の話では、讃岐の院は實は白河の院の御胤で、御母の待賢門院が鳥羽の院の后の宮になられてからも、その昔の過ちを改められなかつたばかりに、そのためにかの亂れは萠し出して來たといふのであつた。『それぢやで、讃岐の院は白河の院のお立てになつたやうなものぢやで、院がおかくれになると、すぐ位を近衛の院にお讓りにならなければならなくなつた。その鬱憤と不平が積り積つて、それであの亂が起つた！』何事もその裏面にはさうした物語があるものだといふやうに翁は靜かに笑つて見せた。

その翁の家からは、半ば雪に包まれた北山の下に、舟岡の山が錆びた綠色をして長く遠く靡き

わたつてゐるのが一目にそれと見渡されたが、そこには山の半腹に並んでゐる松が見え、草藪の中に枯薄の穂の白く光つてゐる野が見え、それからその縁に沿つて、白ちやけた一條の路が、愛宕おろしの吹く時にはさぞ埃が立つであらうと思はれる路が、眞直になつたり折れ曲つたりしてずつと此方へと續いて來てゐるのが見えた。この路は船岡の山の麓につゞいてゐる疎らな瀟洒な家屋――女房達の圍つてあるところから、新しい内裏の築土の横を掠めて、右には北野の杜を、左には井上内親王や早良親王や、橘逸勢などの怨靈を祠つた御靈社の小さな祠を眼にしつゝ、次第に右京の町の方へと入つて行つてゐるのであるが、そこには栗毛の馬に平文の鞍を置いて跨つた武士が、鎧櫃を荷つた調度掛を從へて通つて行くのもあれば、紺の水干に揉烏帽子をつけた男の寒さうに懐手して通つて行くのもあつた。かと思ふと、米俵を二俵づゝ積んだ馬を曳いて『はい、はい』とその動かぬのを叱りながら、此方へ此方へとやつて來る下衆などをも見かけた。時には、翁は『ほ、頭の殿が通らるゝ……』などゝ言つて、供を伴れて向うを騎馬で走つて來る立派な武士を孫達に指さして示した。

しかし翁は親しく左馬頭義朝を知つてゐるのでも何でもなかつた。翁の身分では、源氏の大將、保元の亂の殊勲者、ことに大内を守護し奉る武士の統領に目のあたり近づき得べき何等の縁故を



持つてはゐなかつた。唯、翁は義朝の出入する門の近くに勤める場所を持つてゐたのと、保元の亂後、義朝の噂が善惡共に非常に高く、毀るものもあれば同情するものもあり、またあるものはその事情の如何を問はず、自分の家來に親や同胞を斬らせたのは大惡だと言つたりするものもあつたりしたのと、翁の住んでゐる家屋の庭の小山が、丁度その船岡への路に當つてゐて、朝に、夕に、時には二日おき三日おきに、或は騎馬、或は牛車、或は供を伴れての徒歩といふ形で、そこを通つて行くのを見かけるので、それで、次第にさういふ風に遠くから指さしたり何かするやうに馴れて來たのであつた。

何故に義朝がそこをさう頻繁に通るかといふことについても、翁はかなりに深くその事情を知つてゐた。その船岡の一郭には、義朝のためにいかにしても忘れられない常磐が圍はれて住んでゐるのであつた。翁は伊通の大臣が中宮の雜仕のために美人を求めて、千人の中から百人選び、百人の中から十人選び、またその十人の中から常磐を一人選んだといふ話をも、またその常磐が絶世の美人で、漆のやうに黑い髪はそのたけよりも長く、肌は雪のやうに艶やかに、それを自分のものにするについても義朝がいかに世間の噂に上つたかといふことも、また、清盛と仲たがひになつたのも、表面はその一族の勢力の爭ひに基ゐしてゐるけれども、そのかげには、矢張その

常磐がゐるといふことをも、他所ながら翁は詳しく知つてゐたのである。否、常磐が宮中から出て三條あたりの知人のもとに世話になつてゐる時にも、翁は二三度ならずその被衣姿を見たことがあつたのであつた。『頭の殿があれほど熱心になられたのも無理はない。いや保元にも院方にまゐらずに、帝方にまゐられたのも、常磐が勸めたといふが、それも無理はない。何事も女子ぢや、女子ぢや。』かう獨語ちながら、翁は頭を振つた。

源氏と平家との仲違ひも、京の町では度々人の噂に上つた。何か起りはしないかと思はれたことも一度や二度ではなかつた。現にその翁なども、常にそれを危んでゐたひとりであつたが、中でも一番さうした氣分の切迫したのは、保元の亂の終つた二日目あたりのことであつた。その時は誰れも皆荷擔して立つた。既に戰爭が三條河原あたりで始まつて、平家方が風上に火を放つたといふ飛報すら何處からともなく傳はつて來たほどであつた。『あの時は、これはもうとても免れないところだと思つた……。京はまた燒野原ぢや。』かう思つて一散に東寺の方まで遁げて行つたことを翁は繰返した。

しかも今になつて見れば、『あの時、思切つて戰爭をした方が源氏のためには好かつたかも知れない？』こんなことを言ふものがあるほど、それほど今では源氏は平家に壓されて來てゐた。平



家の勢ひは隆々として六波羅に伺候するものも日に日に數多くなつて行くのに引かへて、源氏の堀河六條の館は、わるく陰欝に、殿上人や上達部の訪らつて來るものも稀に、時には火の消えたやうになつてゐることなども尠くはなかつた。その頃の世間の噂では、少納言入道に對する義朝の憤慨は大したもので、いつかはその鬱憤を晴らさずには置かないと言つてゐるといふ事であつた。それは他ではなかつた。義朝がその子を自分の婿にしたいといふことを申込んだ時には、わが子は儒者の系統だから、何も知らぬ侍には遣はし難いと言つて斷つて置きながら、平家から申し出た時には、一も二もなくそれを承引して、その子の是憲に清盛の娘にめあはせたといふことは、義朝の憤慨を大きくせずには置かなかつた。否、保元以來の事の眞相は、時を經るにつれて次第に世間にもわかつて行つた。今では、義朝は父とその同胞とを斬つたのは平家の策術に陷づて自分で自分の手や足を拐ぎ取つたのと同じだとひどく後悔してゐるといふ評判がぱつと立つた。

『頭の殿ももう少し智慧がなうては、とても、あの大貳どの〻狸めにはかなはんな。』蔀を下した室の中で、結び燈臺を前に折敷や高杯などを並べながら、顏を赤く酒に醉つてゐる院の侍は、こんなことを言つてあは〻と大きく笑ひ興じた。

『それにしても、大貳どのが熊野詣でとは？』
向うにゐる黒鞘の太刀をその傍に引附けて置いた肥つた侍はかう何か意味ありげに言つた。
『何故か？』
『何故もないが、この節季近くに、内裏守護の役目を持ちながら、はるばる熊野詣とは氣が知れぬ……。』
『氣が知れぬも何もあるものではない。太平の御代だ……。風すら枝も鳴らさぬ太平の御代だ。何が起るものか、何が起るものか。そんなことを心配するよりも、酒だ、酒だ！』かう言つてその院の侍は肥つた侍に盃を渡して、それに波々と酒をついだ。
『それで、今日は幾日目になる？』
黒鞘の太刀の侍は容易にその話をやめなかつた。
『わるう氣にするではないか。あれは四日に立つて行かれたのぢや。』かう言つて院の侍は考へて、『今日で六日目ぢや。』
『もう、さうなるかな。早う歸つて來てくれゝば好い。……何うも不安だ。何故か不安だ。そんなことがないのはわかり切つてはゐるが、人の心にも魔が乘り移るといふことがあるでな……。



ひよんなことがないとは限らぬ。』
『ま、酒を飲め！』
院の侍はまた銚子を持ち添へるやうにした。
その時、黒鞘の太刀の侍は、盃に波々と銚子を受けながら、屋根の角や、鬼瓦や、門の棟を掠めて通つて行く風の氣勢に耳を傾けた。
『あゝ、風が立つた――』
『さうぢやな……今夜は寒いな……。通りは出で歩けまい……』かう院の侍は言つたが、さつきからつかえてゐる尿が今は堪へ切れなくなつたといふやうに、すくつと立上つて、そのまゝ蔀つたひに厠の方へと出て行つた。
暫らくして戻つて來たが、『戸外は好い月ぢや……。何とも言はれん。丁度向うの家の屋根に落ちかゝつてゐるでな。その寒い光が風に吹き散らされるやうにチラ〳〵してゐる。今日は九日ぢやな。これからは、夜歩きも月があるで面白いな。』
『でも、かう寒うてはな。』
『寒いくらゐは何でもあるまい。江口までも毎夜通うといふ程の剛の者ではないか。』

『あはゝ。』と二人は大きく聲を立てゝ笑つた。

京の町には、その時、かうした光景が幾つもあつたであらう。酒の滿ちた銚子をそれからそれへと更めて行つたものもあつたらう。帳臺の中まで行器や高杯を持ち込んで、恣まゝな歡樂に耽つてゐるものもあつたらう。捨てられた女が、男のやつて來るのを、空しく戸口に出て待つてゐるものもあつたらう。また、藤壺の蔀の中には笛や、琴や、琵琶や、尺八などを合せて、屋上に月の落ち懸つてゐるのも、風のすさまじく吹きすさんでゐるのも、何もかも知らずにゐるものもあつたらう。しかし、しんとした京の町は、內部にさうしたいろ〳〵な平和と歡樂とを包みながら、さながら死者の面にでも向つたかのやうに、靜かに蒼白く時を刻みつゝあるのであつた。法成寺の鐘の聲は、陰に籠つて、斜に塔に落ちかゝつて行く半弦の月にそのまゝ反響して行くかのやうに聞えた。

をり〳〵夜警の坊人の棒の音が、靜かな音を立てゝ町の中を通つて行つた。

しかし、その蒼白い銀のやうな月の光も、さう長く町の上に漂つてはゐなかつた。次第に低くなつて行くにつれて、家々の影は大きく長く、ところに由つては、屋根の上に、または鬼瓦の上に僅にその光を留めてゐるばかりになつて行つたが、それから、半時とも經たない中に、さうした光はいつともなしにあたりから消えて京の町は、大路と言はず小路と言はず、すべて全く、ぬば玉の闇の深い影の中へと包まれて了つた。あとは一層しんとなつた、犬の吠ゆる聲ばかりがあたりに響きわたつて高く聞えた。

それからまた尠くとも半時は經つた。やがて法成寺の鐘が子の刻を打ち出した。ゴオンといふ響が、ひとつは近く、ひとつは遠く、時にはすさまじく吹荒んでゐる風の響にまぎれて、その下に夜深く起きてゐる人達も、容易に正しくそれを數へることが出來ないほどであつたが、だしぬけにけたゝましい物音が四邊にすさまじく聞え出して來た。馬の蹄の遠くから走つて來る音が、物の具の摩れ合ふ氣勢が、鎧や腹卷の鳴り渡る響が、人馬が混り合つて一散に驅けて行く物音が——。京の町の人達は、一度寢た床の中から皆な慌てゝ飛び起きた。戸を明けた。蔀を上げた。

『火事だ！　火事だ！』と叫ぶ金切聲が、すぐその間近にきこえた。

## 二

『何處だ？　何處だ？』續いてさういふ聲がした。人はばた〳〵と通つて行つた。最早その時には、一度ぬば玉の闇になつた京の町は、燃え出した火の照りかへしに明るくなつて、低く高く起伏してゐる屋根の連續が黑く浮き出すやうになつて見えてゐた。

『夜討だ――』

何處かで大きな聲が帛を裂くやうに夜の空氣を破つてきこえた。

馬の蹄の音と、物の具の觸れ合ふ音とがまた一しきり向うの通りを通つて行つた。遠くで寺の鐘が聞え出したと思ふと、今度は法成寺の大鐘がゴオンゴオンと鳴り始めた。

『たうとうやつゝけた！　東三條殿ぢや。右衛門督ぢや……』

まだそれほど混雜してゐない、ところどころに蔀を上げた、ぶるぶる戰えながら五六人の人の立つてゐる三條烏丸の通りを、かうけたゝましく叫びながら、一人の侍が呼吸を切つて走つて行つた。



馬の蹄の音に雜つて、矢叫びの音が手に取るやうに聞えたと思ふと、今度はわッと喚き叫ぶ人達の聲が物凄くそれに續いた。一番先きに燃え出したのは、殿舍の傍の雜色のゐるところらしく、御門の破風つくりのそり反つた屋根が、捲きあがる赤い焰の中に黑くくつきりと浮き出すやうになつて見えてゐたが、それも瞬く間で、もく〳〵と渦き上る烟の中へと埋められて行くのであつた。宵からの風は、今は少しく吹き止んだやうな樣子であつたが、それでも黑い、鼠色をした、またはわるく白ちやけた、蕈點の螢火とも言ひたい火の子を雜ぜた幅の濶い大きな焰は、怪鳥が思ひきりその翼をひろゆでもしたかのやうに、京の町の上遙かにすさまじくひろく靡きわたつた。否、そればかりではなかつた、其處にも此處にも、火が擧げられて、矢叫びの音と太刀を合せる氣勢と死に向つて喚き叫ぶ聲とが、さうした火の焰の中に絶え入るやうに聞えた。正面の御門にもいつか火が移つたらしく、大きく高く燃え上る焰は、遠くの町の通りからも見えるやうになつた。その時だつた。だしぬけに騎馬の武士が數十騎、群集を押分け押わけ此方へと出て來た。

ひとつの車が中に圍まれて靜かに動いた。それは言ふまでもなく上皇とその妹の上正門院とであつた。陪乘には伏見源中納言師仲卿が束帶でそれに從つた。左馬頭も右衛門督も皆騎馬でその前後を圍んだ。

あたりは晝のやうに明るかつた。すべてはつきりと手に取るやうに見えた。思ひもかけぬ深夜の事件に恐れおのゝかれて、袖に顏を蔽はせられたまゝの上西門院も、繕はぬ夜のおん姿のまゝに心持慌てさせられて外を向せられてゐる上皇も、さも得意らしく、これからの天下は自分のものだ、少納言入道もなにもあつたものではない、大臣大將も心のまゝだと言はぬばかりに誇らしげに馬に乘つてゐる信賴も、何も彼も……。御車はそれと見て兩側に道をわけた群集の中を靜かに音もなく通つて行つた。(大事になつた！　言はぬことではない。熊野詣などに大貳が行くのはさればこそ危ないと思つた！)そこにゐてそれを見たものは口にこそ出して言ふものはなかつけれども、誰とてさう思はないものはなかつた。あとには一層すさまじく叫喚の聲がして、火の手はそこからも此處からも揚つた。

しかも三條殿を守護してゐた侍の中には、義に勇み名を惜むものが澤山にあつたと見えて、すさまじく燃えあがる焰の中にも太刀や物の具を合せる音が、はつきりと手に取るやうに聞えた。中でもこゝを先途と戰つたのは、左兵衛尉大江家仲と、右衞門尉平康忠であつた。『院の侍の名を惜めや……。敵に逢つて一人でも遁げたといふものがあつては、院の侍の名折れだぞ！』かれ等はかう叫んで兵共を指揮した。



しかし、院がいち早く御幸になつて了つたといふことが、敵の手に渡つて了つたといふことが、さうした院の侍達の心持を沮喪させずには置かなかつた。それに火の焰がそれからそれへとひろがつて行つた。誰も何うすることも出來なかつた。そこに一人、彼處に一人といふやうに踏留まつて奮戰しては討死した。ことに、公卿、殿上人、局の女房達の焰にまたは双に逃げ惑ふさまは修羅の巷と言つて好いのか、焦熱地獄と言つて好いか、何と言つて好いかわからなかつた。女房達は長い髪を亂したまゝ、唐衣の裾を引いて、慌てゝ火の焰のない方へと遁げて行つたが、三方の門が固く外から閉ざされてあるので、何うすることも出來ずに、後庭にあつた井戸の底へと重なり合つて、下なるは水に溺れ、中なるは俱に押れ、上は火に燒けて死ぬるといふやうな悲慘の光景を呈した。

否、慘めさはそれに留まらなかつた。焰の中からも、矢は頻りに飛んで來て、逃げおくれた雜仕達の胸を射たばかりでなく、それ等の中には、憎い信西の一族のものもあらう、虎の威を借りて平生恣に振舞つてゐたものもあらう、思ひ知れ！　とばかりに、あとからあとへと追驅けて斬り伏せたので、其處にも此處にも屍が縱横に横たはつて、中には美しい上﨟の折重なつて死んでゐるのなどをも到るところに見懸けた。しかし、それも長い間ではなかつた。焰は遠慮なく

柱から柱へ都から都へと燃え移つた。長い黒髪も、白い美しい肌も、夜の衣の艶めかしい姿も、何も彼も皆な一時に灰燼になつて了つた。

京の町の人達は、この三條殿が未だ全く焼け切らない中に、再び姉小路西洞院の方面に當つて凄まじく火の手の颺るのを眼にした。これを見たかれ等は、火に焼けるといふこと以上に、栄えたもの〻悲劇に觸れた。なぜといふのに、そこには栄華にまかせて新らしく築き起された少納言入道信西の立派な殿舎があつたからであつた。今こそかれ等は今夜の火災の何を意味してゐるかをはつきりと知ることが出來た。この騒ぎでは無論少納言入道は無事で居らるゝ筈はない。あの上皇の乳母で、權力をさ〳〵宮中を壓した紀の二位も、安穏としては居られないに相違ない。かう思ふと、一時新しい世のやうに言はれたあの内裏の新築も、相撲の復興も、詩歌管絃の御遊も、綾綺殿で舞姫が長い袖をひるがへした内宴の盛事も、すべてこの一炬の中に亡びて了つたやうに京の町の人達には思はれた。で三條殿の方の火は寅の刻になつてやゝ下火になつたが、新に起つた西洞院の焔は、あたりに小さな家屋が多かつたので、容易に消えず、曉近くまで、すさまじい烟を六條河原の方へと靡かしてゐた。



## 三

その夜を境にして京の町の空氣はすさまじく不穏なものになつて了つた。誰も何うなるものかと思はないものはなかつた。それに灰燼に歸した家屋も決して尠いとは言へなかつた。西洞院一帶の地は半ば焼野原と化して了つた。

昨日までは歡娛遊宴して、太平の世を樂んでゐたのに、上も下もよく一致して、貴きを敬ひ賤しきを憐れんでゐたのに、甲冑をつけたり弓箭を帶したりするものはなかつたのに、さういふものがたま〳〵あつたにしても、遠慮勝に、街頭を歩いて行つてゐたのに——否、これほどの善政は十數年以來決してなかつたばかりでなく、人の心も靜かに落附いて、宮中でも詩歌管絃乃至は舞踊などに、これ日を送つてゐるほどであつたのに、忽ちにして馬の蹄の音や、鎧、物の具の觸れ合ふ氣勢や、胡籙を負ひ烏帽子がけをした侍の慌たゞしい往來や、それすら已に人の心を騒がせるのに十分であるのに、焼跡の灰燼と共に夥しく捲き起された埃に包まれて、京ばかりではなく、白河あたりまでも、兵共が充滿するやうな光景となつた。

あくる日も晴れた好い天氣であつた。大比叡も、愛宕も心持低く空を劃つて、山間遠く流れ出して來てゐる加茂川の水も、錆鐵色に染め出されて、一條の布でも引きのばしたかのやうに、くつきりとあたりに際立つて見わたされてゐた。五條橋の上を騎馬の武士が五騎も六騎も事ありげに急いで通つて行くのなども見えた。

京の町の人達の耳には、それからそれへと種々な噂が入つて來てゐた。上皇が大内の一本御書所に押籠められて、それを佐渡式部大輔重成と周防判官季實とが嚴重に守護してゐるといふこと、昨夜討取つた家仲、康忠の首を鉾の尖に貫いて待賢門にさし上げたといふこと、少納言入道は何處に行つたかかげも姿も見せないといふこと、紀の二位は死んだか生きたかわからないといふこと、その子息の俊憲も貞憲も皆官を解かれて縛めの憂目を見たといふこと、何うして六波羅はさういふ風に鳴りを靜めてゐるかといふこと、臆したのかといふこと、清盛、重盛はゐないにしても、賴盛は何うしたのかといふこと、そんな噂が半ば信ぜられ半ば疑はれるといふ風で、到るところへと傳はつて行つた。六波羅からは逸早く清盛の許に急使が出されたなどとも言ひ傳へられた。

『しかし今日で七日目だ……。何んなに急いで行つたところで、とても紀の國の入口では追附



けまい……。困つたことぢや。』こんなことを多くの人達は言つたが、しかも中には、源氏最屓の人達もないではなかつた。『これで、頭の殿も保元以來の鬱憤を晴らされたと申して好い。平家はもう駄目だ。これで燒きが廻つた。熊野詣でなどとのんきに出かけて行つた罰だ。源氏だつて、さうばかにしたものではない。頭の殿は何と言つても古今に名だたる武將ぢや。』さういふ人達はこんなことをさも得意さうに言つた。

庇を並べた京の町では、何處でも蔀を上げてゐるやうな家はなかつた。いつもならば、壺裝束をした物詣での婦人だの、被衣を着て市女笠をかぶつた女だの、鐘を鳴して戸毎に托鉢して歩いて行つてゐる僧だの、綾藺笠に狩衣を着て袴の上から行縢を被つてゐる狩獵姿の男などが引きりなしに通つて行つてゐるのが常であるのに、いろ〳〵な噂に恐れをなして、家の奥深く引込んでゐるものが多いのか、街頭には兵共が幅をして歩いてゐる他、童兒の竹馬を引いてゐるのをすら餘り多くは見懸けなかつた。

また二日三日經つた。比叡の頂きに雲が懸つて、天氣が變るかなどゝ思はれたが、また薄日がさして、西の空がその晴れた領分を爭うやうに長く線を成して碧落を見せてゐたりなどした。惡源太の義平が上洛した時には、清盛を安部野に迎へ擊つために、直にも出發するやうな噂が立

つたが、それも勝に驕つた信頼に留められて――何うせするなら立派な堂々とした軍をしやう、今上も上皇も自分の方についてゐられるのだから、何もそのやうに慌てることはない。攻めて來れば攻めて來い、攻めて來る方が朝敵となるのだからといふ議論に留められて、そのまゝやめになつてしまつたといふことであつた。否、それにつゞいて、手近な六波羅でも襲つて、今の中に清盛や重盛の歸つて來る宿所を一掃して置いたらといふ説も出たが、これも捗々しい進行を見ずに、唯今上の遷御とか、自分達の紋目とか、少納言入道の行方についての捜索とか、その息子達の處分とか、さういふことにのみ追はれて、唯混雜に混雜を重ねてばかりゐるといふことであつた。否大内裏の周圍に行つて見たものゝ話では、何處の門も嚴重に武士で固められて、夜は煌々と篝のやうに篝火を燒て、蟻一匹もその中から通れ出て來ることは難かしいくらゐであるといふことであつた。ことに、右衞門督は、手盛の大臣大將となつてから、傍の見る目も片腹痛いぐらゐに恣に振舞つて、その時以來、自分の家へは元よりもどらず、清涼殿の朝餉の間を自分の居間として、藤壺、梅壺の宮女などを常にそこに侍らせ、腰を打たせたり、肩を揉ませたり、酒を酌み交したりして、既に全く天下を自分の掌の中に收めたものゝやうに振舞つてゐるといふことなども、それからそれへと傳はつて行つた。ことに其四日目には、源氏がいよ〳〵六波羅を攻めに



懸るといふ噂が、町の隅から隅迄ひろがつて行つたので、騎馬の侍が七騎八騎並んで通つて行つても、皆な驚いて立上つたり、戰々競々として家の中を出たり入つたりしてゐた。それは一番無事なのは、蔀を下して家屋の中に縮こまつてゐるのが好かつたかも知れなかつたけれども、さうかと言つて、さう引籠つてばかりもゐられなかつた。戰爭が始まれば、いつまた火が起らないとも限らなかつた。それにしても女や子供は何うしたらよいだらうか、戰爭の始まらない中に何處か安全な處へ遁れさせたら好いか。今でも遲くはなつてゐはしないか。もしや遁れさせる途中で却て雜兵どもに辱めを受けるやうなことはありはしないか。それよりはむしろ家の中に小さくなつて隱れてゐる方が好くはないか。こんな風に京の町の人達が不安でゐたり立つたりしてゐる中にも絶えず噂が――どれが本當だかうそだかわからないやうな噂が傳はつて來て、やれ戰爭があると、いふのはうそであつたとか、騎馬の通つて行つたのはあれは檢非違使の嚴重な取締であつたとか、六波羅は十分に防禦の手立をしてゐるから流石の源氏の力でも急には何することも出來まいとかいや義朝が鎌田の正家と一緒に多勢の騎馬に圍まれて、三條通りを通つて行つたのを現に見たものがあるから、あれは唯事ではあるまい、源氏だつて唯ほんやりと手を束ねてゐるわけのものではあるまいとか――さういふ澤山の噂の中に不意に生死のほどもわからなかつた少納言

入道のことが傳はつて來た。
『本當かな？　それは？』始めてそれを聞いた雜色が言つた。
『誰がいつはりを言ふものか。入道どの〻在所を敎へた舍人を知つてゐるといふ男から聞いたのだからな……』
『何といふ舍人かな？』
『成澤といふ男ぢやさうな。それが入道どの〻最後の馬を引いてのこ〳〵歸るところを、出雲の前司に見出されたのぢや。それでいろ〳〵なことがわかつたのぢや……』
『ほう！』雜色は驚くやうにして、『それで、何處だな？　それは？』
『木幡山ださうな。』
『いや、入道殿のかくれてゐたところは？』
『あ、それか？　わしはまた成澤のつかまつたところかと思つた。それは何でも宇治の田原の奥ださうだ……』
『田原の奥？　聞いたこともないところぢやな。南都の方へ行く路かな？』
『何でも宇治からずつと入つたところぢやさうな。何と言ひをつたかな。大道寺？　さうだ、



田原の奥の大道寺と言ひをつた。そこに行つて、もう、とても生きては居られないと言うて、穴を掘つて、その中に竹の節を通して、呼吸の出來るやうにして、生き埋めになりをつたといふ話だ——』
『入道殿が？』
『さうだ。』
『知慧のあるものは違うたもんだな……。そして竹の節だけ土の上に出して置けば、呼吸はつけるしな、人にはわからぬしな、二日や三日はさうして隱れて居られるといふものだ……』
『いや、しかしさうぢやない。入道殿は覺悟して、其生埋めの穴の中に入らしたといふ話だ。とてもろう助からう命ではないが、呼吸のある中に自ら死ぬのは佛の道ぢやない言うてな。それでさういふ風に生埋めにして、呼吸のある中は一心に佛の御名を唱へて御座つたさうだ。』
『兎に角知慧者ぢやな。運が好ければ、それで、命助からぬとも限らぬでなア。』
『入道殿にそんな卑怯なお心があつたとは思へぬな？』
『さうかも知れん……。またさうでないかも知れん……。わしの言つた通りかも知れん。しかし、そんなことはまあ何うでも好いとして、それで、その穴を出雲の前司の手のものが掘り出し

たといふのか。』

『さうだ。』

『たしか、まだ呼吸があつて、眼が動いてゐたといふのか？』

『さうだ。』

『それで首を取られたんだな。氣の毒なことだな……』それを傍で聞いてゐたものも、それと知つては、流石にさう言はずにはゐられなかつた。それと同時に、誰の頭にも、一の寵臣で、上皇の乳母の紀の二位の夫で、百年このかた誰も手をつけることの出來なかつた大内裏を修繕したり、相撲や舞踊を宮中に復興させたりした入道の姿がはつきり思ひ出されて來てゐた。また入道が平家の縁に引かれて源氏を疎外したり、保元の亂の時にも異論があつたにも拘らず義朝にその父爲義の首を斬らせたりした時のことなどが思ひ出されて來てゐた。誰も皆人間の榮華の憑むことの出來ないのを嗟歎せずにはゐられなかつた。その時、向うから二三人の雜色が走つて來た。

『河原を此方へ來るさうだ……』

『何が？』

『入道殿の首が！』



で、そこでかたまつて話をしてゐた人達は、雜色と言はず町の人と言はず、皆な急いで大宮通りを三條の磧の方へと走つて行つた。

それは丁度申の刻を少し下つた頃で、長岡の向うの山に落ち懸つた日影が、潤々とした河原に長くさし渡つて、冬の午後の空氣が半ば金色に鼠色に濃やかにしつとりとしてひろげられてゐる中に、腹卷をして胡籙を負つた武士や、烏帽子がけに弓を携へた侍や、指貫の上に行縢を穿いた從者や、馬や、その馬の手綱を取つた雜兵などが、一團をなして黑く浮び出して動いて來てゐるのが繪でも展げたやうにはつきりと見えた。しかもまだあたりにそれほど多く知られてはゐないと見えて、そこに集まつて出て來てゐる人達もさう大して大勢といふほどではなかつた。

その一團は何方かと言へば靜かに動いた。馬に乘つてゐる武士も一二人はあるやうに見えたが、しかも並足よりももつと遲いくらゐで、河原に沿つた路を此方へ此方へと動いて來た。かれ等は宇治の山の中の田原の在から此處までやつて來るのに殆ど一日を費した。かれ等は到るところでその兩側に群集をあつめつゝやつて來た。宇治の橋をわたる時には、そこに出てゐた見物人をかきのけるやうにして辛うじてやつて來た。そしてその兩側の見物人の中に、珠數を手にして稱名



を唱へてゐるものもあれば、そのすさまじい光景に吃驚して、慌てゝ子供を胸に抱えて家の內に驅け込む女などもあつた。誰も皆な目を睜らないものはなかつた。ある田の畔道では、こつちへ出やうとしてそれを見附けて、裏心したものゝやうに、またはさうしたものを見たその眼を疑ふといふやうに、じつと長い間立盡してゐるひとりの農夫などもあつた。

木幡に來た時には、それは丁度午の刻を少し下つた頃であつたが、そこで馬に糧をやるために、または守護の侍達や雜兵共がその持つてゐる糒を湯につけるために、暫しそこで休んでゐたが——

——その時には、太刀の切先に貫かれた首が、一時そこに斜になつて置かれてあつたが、否、さういふ風になつてゐるのを見て、黑い烏帽子に腹卷をしたその一團の長とも見える武士が、鞭を擧げて聲高く叱つたので、向うの方に行つて矢張糒を湯につけてゐた空脛の一人の雜兵が慌てゝ急いで走つて來て、その斜になり懸けた首をそのまゝ元のやうに眞直に持つた。

それは京の方に行く路と志賀の方に行く路と兩方にわかれるところになつてゐて、馬を借りたり晝飯をつかつたりするのに丁度好いところなので、その角にある一軒の大きな茶屋には、いつも壺裝束をした女だの、狩衣を着た男だの、白い塵埃に塗れた行縢をつけた旅姿の男などが大勢休んでゐるのであつた。眞中の大きな釜からは、湯氣がもや〳〵と高く揚つてゐた。そこでも皆な

な眼を睜つた。何うしたのかと思つた。女などは、さうした恐ろしい光景を眼にするに堪へないといふやうに後を向いて了つたりした。しかもそれがあの權力の盛であつた少納言入道の首だなどとは始めは誰も知つてゐるものもなかつたが・向うからついて來た人達に耳打されて、皆は更に驚いて其方を見た。そこには半ば白髪で後頭部の禿げてゐるその大きな首が、わるく青褪めた色を晴れた畫過ぎの空氣の中にくつきりと浮び上るやうに見せてゐた。

一行はそこから左を取つて、林に添つたり、田圃についたりした路を次第に京の方へと向つて來た。愛宕も鞍馬もやがてはつきりと見え出して來て、細かい山の襞毎にいぶした銀のやうに白く線を成して雪の光つてゐるのを誰も眼にした。

首を貫いた太刀は、雜兵四人で代る〴〵持つことになつてゐたけれども、それでもかなりに重いと見えて、二三町乃至四五町で一人の手から他の一人の雜兵の手へと渡されて行つた。その度毎に一行は暫し立止つた。そして首はその度毎に頷きでもするかのやうにがくりと動いた。

稲荷の社の前を通つた時には、夕日が斜めにあたりを照して、その首をつきさした太刀からかけて、あとにつゞいた馬上の武士達の物の具にキラ〳〵と美しく輝いた。兩側の家々からは、それと聞きつけた人達が靠きずに大勢走つて出て來た。禰宜の服を着けて黒い冠をかぶつた人達も



不思議さうにしてそれを見送つてゐた。こんもりとした杉森の中には、稲荷の赤い華表がそれとくつきり覗かれて見えてゐた。

それにしても、かうして京に歸つて來やうとは、首自身も決して豫想しては居なかつたであらう！　またかういふ風に兩側の人達に見送られて京の風物に接しやうとは夢にも思つてゐなかつたらう！　否、十日前までは、廿日前までは、一月前までは？『これもさうなるわけがあるぢやな……。保元の時に、斬らでも好い人を大勢斬つたその報いぢやな。』中には感慨無量と言つたやうにさうつぶやきつゝ見送つてゐるものなどもあつた。

かれ等はやがて加茂川の岸に出て、淺いところを徒渉して、そのまゝ濶々とした河原の方へと行つた。取敢へず出雲前司光保の神樂岡の宿所に向つて歩を進めてゐるのであつたが、それには川を渡らずに、六波羅を眞直に北に向ふ方が近路であつたのであるけれども、もしや途中で平家のものに奪はれはしまいか、折角寶物のやうにして守護して來たその恩賞の首をそのまゝ平家に奪ひ去られるやうなことはありはしないか。尠くとも、これを右衛門督に見せるまでは、注意の上にも注意を加へなければならなかつた。京に入つてからは、一層嚴重にかれ等はそれを保護した。

京の町の人達は、夕日の影の微かに殘つてゐる町の通りに、または薄暮のうすら寒い空氣の中にその太刀の切先に貫かれた首を見て、何とも言はれない心持に打たれた。かれ等は何と言つて好いかわからないやうな氣がした。かういふことが平氣で京の市中に行はれてゐるといふことはそれは世が終りになつたためではないかといふやうにすら考へられた。

『本當だ、本當だ……。まがふ方ない入道どの首だ。えらいことをしをつたな——まさかにそんなことはあるまいと思つたのに……』

本物かにせ物かを見あらはさうとするやうに、わざ〳〵見物人の中から身を挺してその行列に近寄つて行つた揉烏帽子の一人の下衆は、その首の近くまで行つて、危うく雜兵に捉へられやうとして急いで引返して來ながらこんなことを大聲で言つた。

大宮通りの賑やかなところを通つて、築土などの見え出して來た白河の方への路を右に折れて行つた時には、まだ暗くなつたといふほどではなかつたけれども、それでは薄暮の色は銀色をした被衣のやうにあたりに迫つて、高く捧げた先頭の首も、それとはつきりとはわからないばかりか、前に横はつた如意嶽も比叡も空に黑く輪廓を描いて連つて立つてゐるばかりの光景となつた。

光保の神樂岡の宿所の前には、侍やら雜兵やら下衆やらが、大勢集まつて混雜してゐるのが此



方から見えた。牛車などもいくつか來てゐた。中には逸早く此方へ走つて近寄つて來るものなどもあつた。『やれ！　來たぞ！　來たぞ！』かう叫んでゐるものなどもあつた。

『ほ、右衛門督どのが來てゐるのかや。ほ、それはえらいことだ……。もはやさつきから來てゐられるのか？。』

列の中からずつと先に出て行つて、家の前で馬から飛び下りた光保は、弓を從者にわたしながら、かう言つてそこに知らせに來てゐる侍に言つた。

『いや、今おつきになつたばかりで御座います。まだ、車の中にゐられます。つい、今、それと聞いて、急いでお出かけになられたといふことです。』

『お一人か？』

『いや、惟方の卿も俱にお出でになりました。』

『ほ、惟方の卿も……』

いくらかは慌てたといふやうに、またはさうとは思ひ設けなかつたといふやうに、光保はそのまゝ薄暮の空氣の中に黑く輪廓を描いて置かれてある大きな牛車の方へと歩いて行つた。その中からはやがて冠をつけて束帶の裝束をした信賴と烏帽子姿の惟方とがその優形の白い顏をあらは

した。

田原の山中の生埋めの穴の中から掘り出されて、斬らさて、持ち出されたその入道の首は、野山や、街道や、町や、林に添つた往還や、野川の橋の上や、宿驛の埃塵の中や、霜解けのぬかるみ道や、兩方から竹村に蔽はれた田舍の村落や、讀經のきこえる小さな寺の垣の傍や、夕日に彩られて赤く見えてゐる川に添つたところや、塔の高く見え出して來た町の入口や、築土の白ちやけて長くつゞいてゐる邸の多い通りや、群集が集まつてめづらしさうに指さしてゐる大通りなどを一日懸つて、やつとその行くべきところに行き着いたといふやうに、そこに、その薄暮の空氣の中の牛車の二人の前に一間と距離を置かずにぴたりと持つて行かれた。と、信頼も惟方も首實檢をするためにわざ〳〵出かけて來たのではあつたけれども、しかもそれと見ては流石に無氣味に思はずにはゐられないといふやうに、かれ等は意氣地なく戰慄した。しかも薄暮の空氣は幸にそれをあたりの侍達から見らるゝことを救つた。

『松明！　早く松明を！』

光保の下侍はかう言つて大きな聲で怒鳴つた。すぐ松明は持つて來られた。もはやあたりは全く夜になつてゐた。初めは十分に火がつかなかつたがためにいくらか薄暗かつた松明も、次第



に盛んに燃え出して來て、やがてあたりはくつきりと晝のやうに明るくなつた。肥つて愛嬌のある表情をした少納言入道の首は、キラ〳〵と光つた太刀と共に二人の眼の前に浮き上るやうにあらはれた。

『頭の殿！　頭の殿！』かうした囁きが波を打つやうに群集の中から起つた。兩側の見物人は皆眼を睜るやうにして其方を見た。

牛車が五つも六つも續いて通つてゐる中に、一際すぐれて大きな立派な牛車が、内裏に仕へてゐるもの丶服裝をした雜色と牛飼の童とに附添はれつ丶、靜かにその前を動いて行つた。兩方の簾が全く揭げられてあつたので、冠をつけた束帶姿が信賴で、綏を冠の兩側につけて闕腋に大口を穿いたのが義朝だといふことが、一目見たゞけで誰にもわかつた。

『頭の殿！　右衛門督！』

かうまた誰かゞ叫んだ。

その牛車はさういふ風に群集に注目されるのを恐れるといふやうに、または出來るならば成たけこつそりそれを見たいといふやうに、多く集まつてゐる女車や毛絲車の方へとまぎれ込むやうにして靜かに動いて行つたが、しかも群集の眼は容易にそれを見捨てやうとはしなかつた。それも



理であつた。九日の夜に東三條殿を燒いてからは、何と言つても、信賴と義朝とは、世間での大立者であらねばならなかつたから――それは或は唯ほんの一時で、清盛でも歸つて來て、六波羅と競ひ合ふやうな形になつたなら、何うなつて了ふかわからなかつたけれども、また或はその勢力も忽ち雲烟のやうに消えてなくなつて了ふかも知れなかつたけれども、兎に角、今では、今上と上皇とを右左に挾んで、百官に號令してゐる唯一の勢力であらねばならなかつたから――群集はあとからあとへとついて行つた。

それにしても、何といふ賑かさであつたらう。また何といふ騷がしさであつたらう。京の町の人達は、女と童達とを除いて、すべて皆そこに出て來たかと思はれるほどそれほどあたりは混雜してゐた。最早洛中では、少納言入道が生埋めの穴から掘出されて、斬られて、その首が今日大路を渡されるといふことを知らないものはなかつた。從つて誰も彼も皆なそれを見物しやうと思つて競つて出て來た。中には一里も先の鳥羽あたりから朝早く藁沓がけで出かけて來るものもないではなかつた。檢非違使の下についてゐる侍達や役人達が聲を嗄らすやうにして制しても容易にそれをきかうともしないほどの混雜があたりに滿ちた。

昨日と同じやうに太刀の切先に貫かれた少納言入道信西の首は、神樂岡から加茂川を渡つて、

大宮通りを三條磧へ行き、それから引返して右の獄の正面の門に懸けられることになつてゐたが、その三條大宮通りの角を昨日と同じやうな守護の下に靜かに此方へとやつて來た時には、流石の群集も鳴りを靜めて、誰かがしつと叱つたやうな嚴かな沈默の中に落ちた。

信賴と義朝との乘つてゐる牛車は、わざと目に立たないやうに、路の向うの車の多く集まつてゐるところへと寄せられてあつたが、そこに、その前にその首の動いて行つた時には、流石に群衆も心を動かさずにはゐられないやうに見えた。『頭の殿！　右衛門督！』と叫ぶ聲は起らなかつたけれども、それよりも更に一層眞面目な嚴かな氣分があたりに滿ちた。敵と敵と相對した形！一方は死んでも眼をむきたいやうな、一方はまた理由なしにその首の威力に壓されたやうな張り詰めた場面を群集はそこに發見した。

誰いふとなく不思議な噂が群集の中に傳はつた。

『そんなことがあるものか。』

『だつて、見てゐたものがさう言ふのだから確ぢや。入道殿の眼がぐるりと動いて、がつくりと首が點頭いて通つて行つたといふからな……。死んでも魂魄はあるものだな！』

『おろかな！　そんなことがあつてたまるものか？』



『だつて、現にこの身も見てゐた。たしかに點頭いた！』揉烏帽子に水干の袖を括つた五十先の翁が傍から言つた。『さうぢ、やあの右衛門督と頭の殿のすぐ前のところに行つた時ぢや……。たしかに點頭いた。それにあの時の空模樣も唯事ではない。急に、夜にでもなるやうに暗うなつた。唯事ではない！』

『さうだな、さういへばさうだな。あの時の天氣は變だつたな。急に暗うなつたな？』始めはそれと信じなかつた指貫を穿いた直垂姿の男も後にはさう言つて、その時のさまを思ひ返すやうにした。本當にあの時はあやしかつた。不思議だつた。忽ちに空は暗く暗くなつた。急に夜になるのではないかと思つた。しかも、そのあやしげな天氣も長くは續いてゐなかつた。忽ちにして黑雲は散じて元のやうな晴天となつた。

『本當だな。さう言へば、不思議なことだな？　あの時だけだからな？』

『何うせ碌なことはありはせぬぞよ。ぢきあの入道殿が仇を復すに違ひがないぞよ。朝敵でも何でもないのに……いや勅諚とでもあれば、それも止むを得ないといふこともあるが、何でもなしに、唯あの右衛門督の指圖ひとつで、大路を渡された上にまた首をかけられるといふ法は遠い昔にも聞いたためしがない！』水干の翁はさもそのあさましさを深く慨嘆するといふやうにし

て頭を振りつゝ言つた。

『本當ぢやな――』

『おん身の言ふ通りぢやな――』

『しかし、かうなつた入道殿にも落度はある。聰明な人ぢやに由つて、もう少し何うにかならぬこともなかつたらうに、あの惡左府どのゝ死骸を南都の般若野の五三昧から堀り出したり何かしたことなども好くないことぢやな。』

『さうだ……。皆なその身に報つて來たのだ、怖ろしいことだ――』

こんなことを言ひながら、さういふ人達はぞろ〳〵とそのあとについて行つた。町の通りでも半蔀を下して、商賣をしてゐるものなども餘り多くは見かけなかつた。

その日の午少し廻つた頃には、長い間大路をわたされたその首も、始めてその落附きどころを得たといふやうに、西の獄の正面の門の破風造りになつてゐるところの角に、そのまゝ簡單に懸けられてあるのを人々は見出した。しかもそれはあまりに高きに過ぎた上に門が大きいので、注意しないと、わけなく見落して了ひさうに見えた。否、誰でもそこに來たものは、仰ぎ上げるやうにしてそれを見なければならなかつた。『これは首の骨が痛いぢやな！』中にはこんなこと言を



つて見てゐるものもないではなかつた。

近くで見た時には、さうでもなかつたけれども、いやにわるく青褪めて佗しい色をしてゐたけれども、此處から見上げると、その首は大きく肥えて、何處となく笑ひを含んでゐるかのやうにまたはさうしたいろ〳〵な辱かしめや、評判や、噂や、この世の中のあさましさの上に一段高く立上つてじつと此方を見下してゐるかのやうに思はれた。そしてそれを見るための人達が門の前に往つたり來たりして、悲しんだり嘆いたり罵つたりする氣勢が間斷なしに其處にも此處にも聞えた。申の刻の下りになつた頃には、夕日が赤くそれを照した。

## 六

急使を得た清盛が紀の國切目の宿から六波羅へと引返して來たのは、少納言入道の首が西獄の正門に懸けられたその日の酉の刻であつたが、その噂は何處からともなく傳はつて來て、內裏では尠なからず動搖した。信賴のゐる清涼殿の朝餉の間に義朝が入つて行つて、久しい間そこから出て來なかつたりした。義平は義平で、自分の謀計の用ゐられなかつたことを憤慨して、『あの時二百騎でも三百騎でもこの身につけて呉れやうものなら、今頃は無事にあの清盛を六波羅に歸らせはしなかつたものを……』と言つて、口惜しがつて足摺りした。しかし今となつては、最早何うすることも出來なかつた。

義朝は大勇な、落附いた、何處までも部下を信賴させるに足るやうな大將らしい態度を示して、さうした心持は決して面には現はさなかつたけれども、しかも自分の乘り出した船が絶對安全であるとは思つてゐなかつた。その行く先には非常にあぶない暗礁があると共に、その周圍にも、ともすれば船を覆がへさずには置かないやうな恐ろしい渦を卷いた荒波の打寄せて來てゐるのを



十分に知つてゐた。かれは朝餉の間を此方へと出て來かがら、深い深い思ひに沈まずにはゐられなかつた。

しかしこれは今に始まつたことではなかつた。かうして事を起した以前にあつても、一生の浮沈に關するといふやうな、源氏といふ一族のためにも何うしてもさうしなければならないといふやうな深い深い思ひに耽つた事は何遍かあつた。かれはかれの周圍を取卷いた氣分の中に決して落附いて生きてはゐなかつたことを繰返した。また保元以來、齒を喰しばるやうにしてその屈辱を堪へ忍んで來たことを繰返した。

かれの眼の前には舟岡山の麓にある常磐の家と、此方から長い築土に添つて、遠く向うに折れ曲つて行つてゐる塵埃の多い白ちやけた路とが不意にあらはれ出して來た。かれは何遍その決心を抱いてそこを通つたか知れなかつた。また何遍常磐を思ひ捨てたか知れなかつた。さうだ、それを捨てる氣になれば……何んなことでも出來る。命でも捨てることが出來る……。かうかれは何遍決心したことだらう？　しかもその美しい、何も知らない、黑い長い髮のために、何遍かれはその決心を捨てたらうか？　また忍ぶことの出來ない屈辱と壓迫とを堪へ忍んだらう？

義朝はつゞいてこの事件の起つた後に常磐に逢つた時のことを思ひ起した。常磐は女心に非常

に心配して、わく〳〵と興奮してゐたが、かれは何の彼のと慰めて、さてそのあとで、『そんなにおろかなこの身と思ふか。平家など恐れてゐるこの身ではない。今に立派なきさいの宮のやうにさせてやる』などゝ言つたことを思ひ起した。また常磐は常磐で、後にはかれのいふことを力にして、今度の事件の勝利に終ることを神佛に一心に祈つてゐると言つてゐたことを、またそれは源氏の一族のためばかりではなく、信頼やその與黨のためばかりではなく、自己のため常磐のためにも、是非とも今度は平家に打勝たなければならないといふ決心をしたことをもかれは思ひ起した。『さうだ……。今更そんなことを考へてゐる時ではない。』かうかれは殿階を下りながら心の中に叫んだ。

義朝の眼にはつゞいてかれが、信頼の家から初めて出て來た時のことが歴々と浮んだ。悦びのしるしだと言つて、いか物作りの太刀一腰を信頼自身が取出して彼に渡した。かれはそれを難有く請取つて表へ出た。そこには、白く黑の立派な馬が一匹、鏡鞍を置いたまゝ引き立てゝあつた。あたりはもはや暗かつた。あとからついて出て來た信頼は、『おい！　誰ぞゐないか？　松明を持て來い！』と聲高く呼んだ。一人の下衆がやがて出て來た。松明が持て來られた。二人はその引出物の馬をあちこちと見た。『これは好い。近頃の馬ぢや。毛色も好いが、脚の具合も申分がない。



これなら、何んな合戰でも出來る……。何と云つても、合戰には馬が一番大事で御座るでな……』こんなことを言つて、後には義朝自身松明を取つて、馬の尻の方まで細かに檢べて見たことが、そこだけ切り取りでもしたかのやうにはつきりと浮んで見えた。そしてそれから後は――後は運命がすさまじく渦を卷いてやつて來た。それは全く夢か何かのやうであつた。それは自身が手を下してやつたことには相違なかつたけれども、しかもかれ自身といふよりも、誰かその傍に立つてゐるものがあつて、それがかれの手を取つてそれをやらせたといふ方が適當であるやうな氣がした。あの夜の三條殿のすさまじい火事、火事の中の叫喚、上皇の掠奪、つゞいて天下でも取つたやうな手盛の敍目、朝餉の間に女官達を引き寄せて人目も憚らないやうな恣まゝな信頼の態度、少納言入道の首實檢、かれ等の前を通る時に俄にかき曇つた空の不思議――さうした光景が一つ一つあざやかにそのすさまじい運命の渦の中に細かに織込まれて見えて來た。そしてその向うにある暗い、つき詰めた、一生の浮沈に面したといふやうな心持が、ひしとかれの心を塞ぐやうにした。

『今になつて、そんなことを考へたつてしやうがない！　なあに、案ずるには及ばぬ……』かう義朝は自分で自分を勵ますやうに言つたが、氣が附くと、かれは既にさつき建禮門の前に待たせ

て置いた牛車に乗つて、談天門を出て、堀河通りを眞直に南へ南へと下つて行つてゐるのであつた。ふとかれは夜の闇の中に明るい光線の斜めに漲つてひろがつて來るのを眼にした。それは十七日の月が今しも山の端にその半面をあらはし出したのであつた。

かれはあの夜が九日であつたことを、月が落ちてから勢揃ひをして三條殿に向つて行つたことを、それからもう八九日も經つて月は滿ちてそしてかけ始めて行つてゐるのに、かれ等は何一つ仕出來したことをしてゐないといふことを頭に繰返した。

六條堀河のかれの宿所では、まだ篝がその庭上に燃えてゐて、松明を持つた下侍達が、頻りにそこらを行つたり來たりしてゐたが、義朝の乘つた牛車が入つて來たのを見ると、平山だの、齋藤だの、金子だの〻手の者がぞろ〳〵とそこに出て來て迎へた。

『鎌田はまだゐるか……。さうか、奥にゐるか？』かう言つて義朝は胡籙と弓とをそこに置いて、半履の音高くそのま〻奥へと入つて行つた。

袖を括つた直垂に指貫を穿いた鎌田はやがて奥から慌たゞしげに出て來た。義朝とは同年である上に、保元以來絶えず一緒にゐて、氣心を互に知り合つてゐるので、主從とは言ひながら、何處か友達らしい調子が二人の間にあつた。佩刀を傍に置いたま〻無雜作に義朝が坐ると、鎌田も



それに對して坐りながら、

『何うで御座つた？』

『別に、これと言ふ話もないが、油斷をしては居られぬ？』

『右衛門督どのは何と言つて居られましたか？』

『さあ、別に變つたこともない。しかし、あれにも困つた。合戰のことなんかすこしもわからんでな……。唯此方に押附けて置けば好いと思つてゐるでな。』

義朝と比べては、鎌田は一二寸脊が低く、何方かと言へば小柄の方だつたが、顏は淺黑く、何處かきり〻として、流石は義朝の相手になつて、源氏一族を率ひて行くだけの資格があると誰にも思はせるに十分だつた。かれは義朝の顏を見ながら、『それで、今夜は寄せて來るおそれはありはしませぬかな？』

『それは何ともわからぬ！』かう義朝は言つて鎌田の方を見て、『だから、この身もすぐ內裏に歸るつもりだが……』

『手筈は？』

『それは手ぬかりはない筈ぢやが』

『油斷して內裏が守れないやうなことは？』
「そんなことはあるまい。ゆめあるまい。それは大丈夫ぢや。式部もゐれば、光保も季貞もゐる。それに六波羅では今戻つたといふばかりぢや。そんな早業が出來るものか。』
『でも、今夜は油斷がなりませぬな？　源太どのは？』
『待賢門の陣にをる……』
『それなら先づいくらか安心しても好いかも知れませぬ……』鎌田はほつとしたといふ風で、
『それにしても、源太どの〻計畫を用ゐれば好かつた。清盛が京に伴れて入つて來た人數もさう大勢ではなかつたといふことだつた――』
『まあ、それも好かつたかも知れぬが、今になつては、そんなことを言つてゐる場合ではない。それよりも兵庫頭は何うした？』
かう言つて義朝は膝を進めた。
『何うもあれには困つた？　返事が御座らぬ！』
『返事がない？　それは困つた。實はそれが心配ぢやで、もうかうなつては、いつ合戰を始めねばならぬかわからぬで、それを聞きたいと思うて、それで、出られぬ身をちよつと拔けて來た



が――』
義朝はかう言つて深く考へるやうにして、『兵庫頭は何か思つてゐることでもあるかな？』
『別に、さういふことも御座るまいが、あれは一體二心だ。保元の時でもわかる……』
義朝は暫し沈默を續けてゐたが、急に、『鎌田！　もう一度御身が行つて來て呉れぬか？』
『さあ……』
鎌田はかう云つたまゝじつと考へ込んだが、暫らくして、
『兵庫頭のもとには、この身よりも平山か齋藤の方が好いのだが、その方が本音を吐くと思ふが……』
『しかし、御身でなければいけぬ。齋藤や平山は、合戰の方は委かせることは出來るが、さう言ふ使は安心してはやらせられぬ……。腹立たせて了うては何の役にも立たぬわけぢやで……。鎌田もう一度賴政を見て來て呉れ――』義朝はじつと鎌田の眼を見詰めるやうにした。
『よろしい。もう一度見て參りませう？』鎌田も義朝の顏を見て、『しかし、あの人には多きを望むことはとてもむづかしいと思ひますな……。何うも二心がある……。あの人を相手にして旨く行くわけがない。』

『それはさうぢやが、御身の言ふ通りだが、あれを敵としてはならぬ。味方にはなり得ぬまでも、敵にだけはしたくないものだ……』

と、鎌田は冷かに笑つて、

『殿にも似合はない言葉……、あんな二股武士を相手になさるからわるい。あゝいふものは、初めから別にしてお置きになるが好い。そこに行くと、源太どのは元氣な若大將だ。兵庫頭の宿所を今から行つて攻めつぶして了へ！　と此間も言うて居られた――』

『源太などに何がわかるものか？』

義朝は輕く笑つて見せた。

『まあ、兎に角に行つて見て參るには參りませう……。隨分機嫌も取つて見ませう……。あんな二心武士でも、源氏は源氏だ。味方にせぬのはうそだ……』

かう皮肉に言ひながら鎌田は立上つた。

『それから御身は、その足ですぐ陣の方へ行つて呉れ……。此身もすぐあとから參るで……？』

義朝は後からかう言ひ足して、鎌田の點頭いて向うに行くのを見送つたが、何だか急に氣が氣でなくなつたといふやうに夥しく心の動搖して來るのを感じた。さつき朝餉の間のだらしのない



淫蕩な空氣の中から出て來た時には、『何んの……平家にそんな力があるものか。今夜夜討などが出來るものか？　よし、また夜討されたにしたところで、ちやんとその手筈はしてある！　何も恐るゝことはない。』かう思つて出て來たが、唯頼政のことが非常に氣に懸つたので、それだけを鎌田に傳へて頼まうと思つて出て來たが、今になつて見ると、さうして落附いてゐることは出來ないやうな氣がした。頼政のことよりも今度は陣のことが氣になつた。源氏で固めてゐるところは、それは好いとしても、信頼の手にあるものゝ規律のないことが――現に、建禮門から永福門あたりにかけて、侍や下侍達が勝手に振舞つてゐるのを昨日も自身眉を蹙めて見て來てゐるので、一層それが氣に懸つた。成程あゝしたところを平家に覘はれたら、あの方面は一たまりもなく崩されて行つて了うだらうと思はれた。そしてそれと同時に、信頼が小袖に大口を着、冠に巾子紙を入れて、丸で天子か何かのやうに振舞つてゐるさまと、局づきの大勢の宮女に取卷かれて夥しく酒に醉ひ痴れてゐるさまとが、はつきりとかれの眼に映つて見えた。つゞいて日夜不安に慄はれてゐる常磐のさまがまたちらりとその頭の中を掠めて通つた。艱難が迫つて來た。愈々一生の浮沈が迫つて來た。かうかれは思はずにはゐられなかつた。いつもならば、かれは裏の對屋にゐる今年十四になる江口腹の姫のところへ行つて、そこで暫しは遊んだり何かして行くのが

常であつたが、今日はそのまゝ平山と齋藤とを呼んで、それにもすぐ陣に來るやうに命じて、急いで中門のところに待たせてある牛車へと乘つた。

しかし心配したほどのこともなかつた。京の町はしんとして、寒く銀のやうな月の光に照されてゐるばかりだつた。それでもをり〳〵は馬に乘つて走らせて行く侍なども見懸けたが、また路を避けて蝙蝠のやうにぴたりと片側の築土に身をくつゝけて了うやうなあやしい影をも二三見懸けたが、しかし大したこともなしに、かれは再びその身を篝火の焚かれてある賑かな明るい待賢門の陣の中に見出した。



## 七

正面と西と北とには、そこを守るべく命ぜられた侍達が、嚴重に大門を閉ぢ、小門だけを明けて、そこから出入してゐるので、篝火の數も少く、雜兵共の集まつて來てゐるものもさう澤山ではなかつたけれども、內裏の殿舍から東に面しては——陽明、待賢、郁芳の三門の大宮通りにつゞいて行つてゐるあたりには、そこにもこゝにも篝火が焚かれて、交代で門を護つてゐる侍や雜兵共の絕えず往つたり來たりしてゐるさまが、一種何とも言はれない混雜した光景をあたりに呈してゐた。それは言つて見れば、今まで殿上人や上達部に支配されてゐた靜かな典雅な空氣がすつかり東國の荒武者の土足に汚されたやうなもので、左近衞府、左兵衞府、內外豎記あたりからかけて、建禮門、承明門の廣場の中までも到るところに侍や雜兵共が充滿した。

ことにその廣場の眞中に焚かれた大きな篝火は、左近の櫻、右近の橘を始めとして、正面の紫宸殿、左右の宜陽殿、校書殿をはつきりとそこに照し出して見せた。ことに今夜はいつ夜討がかけられるかも知れないと言ふので、其處等を往來する侍や下侍達は、皆鎧に身を固め、烏帽子

がけをし、胡籙を負ひ、弓を携へてゐるので、その物の具は月の光と篝火とに煌々と映つた。馬の高く嘶く聲が間斷なしにあたりにきこえて來た。

宜陽殿の前にも一つの小さな篝火があつて、そのあたりにも多くの松明が絶えず往つたり來たりしてゐたが、殿舍の中のところどころには、大きな結び燈臺がともつてゐて、大將分とも思はれる武士達が代る代る其處から出て來た。義朝は待賢門の陣を見廻つてから、郁芳門と美福門との間を固めてゐる越後中將成親の許に行つて、そこで暫く夜討についての話をしてゐたが、そんな樣子は何處にも見えず、京の中に無數に出してある雜兵共からも、さうした注進は少しもなく、むしろ六波羅も宵の中こそ少しは篝火も多く大勢人の集つて來た氣配もしたが、今ではひつそりとして、いつもよりも却つてさびしいくらゐであるといふので、それでいくらか安心して、『六波羅でも困つてをるのぢや。夜討をしたいにも、それをすれば、主上に弓を彎く形になるので、滅多にはそれも出來ず……』こんなことを笑つて成親と話し合ひながら、そこを出て徐かに此方へとやつて來た。

宜陽殿では、入口の段階を上つて右に少し行つたところに、源氏の重立つた人達が團居を揃いて座を占めてゐたが、大將が入つて來るのを見ると、皆な立上つてそれを迎へた。



『鎌田はまだ來ぬか。』

『まだ見えられませぬ。』波多次郎義通が言つた。

義朝はしかしそれを深く聞かうとはしなかつた。そのまゝその團居の上座へと行つて坐つた。弓や胡籙を齋藤の手の者が受取つて、それを室の向うの方へと立てゝ置いた。

そこに向うから入つて來たのは、朽葉色の水干に烏帽子をつけて、兩刀を鞋と帶した若い美しい誰が見ても宮中に出入する侍としか見えない中宮大夫進朝長であつた。

『父上――』

かう朝長が呼んだ。

義朝は平山や齋藤と話してゐた顏を其方へと向けた。

『何處に行つてゐた？』

水干などを着けてゐるのをぢろりと見て義朝は訊いた。

『藤壺――』

『何も變つたことはないか。上御一人は？』

『黑戸御所にいらせられます……』

『守護は？』
『季實と光保とが致してをられます。』
義朝はちよつと考へるやうにして默つてゐたが、『きさいの宮も別にお變りはあるまいな？』
『お變りは御座りませぬ。』
これだけで、今度はその前からやつてゐた軍評定の方へと話は移つて行つた。向うから夜討をかけられるのを待たずに、今夜にも此方から六波羅を攻めては何うか。先んずれば人を制す。後悔しても及ばない。既に一度源太どの〻計略を用ゐなかつた〻めに無事に清盛を六波羅に入れた悔がある。その悔を二度するのは愚かである。他の手のものは何うでも宜しい、源氏だけで押寄せて行かう。平山や齋藤の口から、さういふ評定が頻りに出るのを朝長は聞いた。義朝もそれと同じないではなかつたが、しかも進んでそれを實行しやうとするほど熱してもゐないらしかつた。義朝に取つては、それよりも內裏が心配になるらしかつた。信賴がしつかりしてゐて、その威力が殿上人や上達部を十分に壓することが出來れば、無論かれは此方から出て行つたであらうけれども、あの醉ひ痴れた信賴にはとても安心して內裏を任せて置くことは出來ないらしかつた。今こそ公卿達は難を恐れて信賴に從つてゐるやうに振舞つてはゐるけれども、一度何事かゞ



起れば、忽ち敵になつて了ふのはわかりきつてゐた。從つて、いかに武士達の評定が勇ましくとも、大將の身としては盲目にそれに從つてばかりはゐられなかつた。
朝長は初めは忠實にそれに耳を假してゐたけれども、暫らく經つた後にはかれの心は全く今出て來た藤壺の方へと飛んで行つて了つてゐた。かれは眼の前に中宮の美しい姿を見た。唐衣に裳を長く曳いて靜かに歩を運ばせられて行つてゐるさまを見た。大勢の上﨟女房達が朝長の入つて行くのをつかまへて、それ源氏の若大將が來たと言つて、皆なその周圍に集まつて來たのを見た。其處には柔らかな、のどかな、一歩外に出れば鎧兜のあの慌たゞしいすさまじい光景が展開されてゐるなどとは夢にも思はれないやうな、繪卷に似たやうな空氣が一面に漲りわたつてゐるのを見た。朝長はその母親がある上達部の娘で、早くから宮中に奉仕してゐたために、そのために武家の子息でありながら、幼い頃からよくそこに來て皆なに可愛がられてゐたことをはつきりと記憶してゐた。母親はかれが九歲の時に死んだので、それははつきりとは覺えてはゐないが、髮の長い、色の白い、何方かと言へば小づくりな綺麗な人であつたやうであつた。その母親はよくかれを伴れて其處にやつて來た。恐らくかれは極めて幼い頃から、そこの上﨟や女房達に抱かれたり負はれたりしたに相違なかつた。此間も、突然逢つた老女が、『おや！　これがあの子！　あ

の柏の生んだ男の兒！』かう言つてさもなつかしさうに此方をじつと見たことを思ひ起した。

藤壺の多い女房達は、皆な朝長をなつかしい者にしてゐたが、中でも、玉藻といふ若い雜仕は、ことに深く思ひを懸けて、人のゐないところでは、後からこつそり顏を覗き込んだり、いろ〳〵なものを持つて來てかれにわたしたり、つまらぬ話をいつまでも引張つて、一刻も長くその傍にゐるやうに仕向けたりした。後には、多くの女房達の目に觸れてわるく笑はれたり何かするので、それを氣にし出して、つとめてその傍に行かぬやうにしてゐたけれども、それでもその深い情は染々と朝長の胸に染みた。

さつきも、中宮の御用をすませて、胡籙に弓を持つたまゝ、徐かに此方へと下りて來たが、築土の傍まで來ると、かれの出て來るのを長い間待受けてゐたといふやうに、ひよつくりそこに玉藻の顏があらはれ出した。

その顏はしたゝかに泣きぬれてゐるやうに見えた。

『何う？』

『夜討があるツて、それはまことですか？』

女はわく〳〵してゐた。



『案じない……』

『今夜にも平家が來て、この內裏を燒討にして了ふといふでは御座らぬか？』

『誰が言うた？』

『誰といふこともないけれども、專らさういふ風聞やで、皆な逃げにやならんいうてゐる。』

かう言つたが、玉藻はすぐあとをついで、

『それはこの身は何うなつてもかまわぬが、御身が——御身が、合戰に出て、もしや過ちでもありはせぬかと、それが心配で、心配で……』

『案じない……』

『案じないいうても、合戰には何しても出ずには居られまい——』

『それは——？』

『それが心配で、心配で、何うぞして合戰には出ずにすむやうにと北野にも平野にもお參りしてゐたのに——。大貳が歸つて來ずに、途中で何うかなつて了つて、このまゝ源氏の世になれば好いと思うてゐたのに——。何うしても合戰へは出ずにはゐられまい？』

『それは——』

かう言つて朝長はちよつと躊躇したが、『何アに、それは心配には及ばぬ。合戰に出ても、平家はひとたまりもなう敗れて了ふにきまつてゐる……。源氏にはつよい人達がゐるぢやで。鎌田だの、齋藤だの、平山だの、大伯父の義隆どのだの、兄の源太どのだの……。だから、そんなことを案じずに……。それよりも誰ぞ來はせぬか？』何か物音がしたやうなので、あたりを見廻したが、そこには何の影もなかつた。月は既に清涼殿の鬼瓦の上にその銀盤のやうな冴えた光をあらはしたが、幸にあたりは築土の陰になつてゐるので、向うを通つて行くものにも、そこにかれ等が並んで抱き合ふやうにして立つてゐるとは知られなかつた。

月の光の到らぬ隈の中にも、女の泣きぬれた顔が、それとはつきり輪廓を取つたやうになつて浮び上つて見えてゐたが、やがて女は懐から小さな紙に包んだものを取出して、默つてそれを朝長の手に渡した。

何か言はうとしたが、込み上げて來る悲哀に女は滿足にそれを言葉にあらはす事が出來なかつた。

『何うしたの？』

『あの、これは！』女は男に促されて、やつとその歔欷を押へたといふやうに、『これは、昨日



も今日も北野に詣でゝ、そこで押戴いて來た災害避けの守り札、これを不斷に肌へにつけて持つてゐて下されや――』

『忝ない』かう言つて朝長はそれを受取つた。

『何んな合戰の中でも、玉藻のあることを忘れて下さるな……。そして無理をせずに……。成るだけ危ないところには近寄らずに――』

『案ずるには及ばぬ。上御一人が此方へ御出になつてゐるのだから、いかに平家でも、それに弓を彎くわけには參らぬ。すぐどうにかなつて了ふにきまつてゐる。一度か二度の合戰で平家は負けて了ふにきまつてゐる。安心してゐる方が好い。』

今度は女は何も言はなかつた。はかない慰めでも、かう言はれゝば、いくらか心丈夫になつて行くらしかつた。女は朝長の方へぴつたりと體を寄せて、そのなつかしい顔を見上げた。手と手とが觸れ合つた。

暫らく經つた。

向うの壁にくつきりと映つてゐた黑い影は、次第に上へ上へとあがつて行つて、月はかれ等のゐる築土の中にまでも段々とその光をひろげて來た。今ではそこに立つてゐる朝長の烏帽子と顔

の半面とが、その銀のやうな光の中に浮び上つて見えるやうになつた。

不意に長い渡殿を通つて、人の此方へと出て來る氣勢がした。それも一人や二人でなしに、大勢の氣勢が。

『それでは御無事で？』

『餘り案じずに――』

手を堅く握つて、これだけ早口に言ひ交はすにすら、二人は一方ならぬ慌ただしさを感じつゝ、女は右へ、弘徽殿の裏の築土の方へ、朝長は清涼殿の大きな建物の黑く月光を劃つてゐる影の方へと別れて行つたが、しかも五六歩此方へとやつて來た時には、それは別にそれほど氣を置かなくても好いものであるといふ事が朝長にはわかつた。それは舍人と雜色とが五六人して何か櫃のやうなものを奥から運び出して來てゐるのであつた……。

朝長はふと自分の前に父の義朝や武士達が猶ほ頻りに軍評定に頭を惱ましてゐるのを眼にした。かれは急にその美しい幻影からさめた。かれははつとした。今の時に際してそんなことを考へてゐる身の痴けさを一度は深く恥ぢた。しかもその悲しげな歔欷と甘い私語と涙に泣きぬれた白い顏とは、何うしてもかれの體から離れて行かうとはしなかつた。夜討をするとか、せぬとか



もう少し信賴を何うかしなければいけないとか、それには內裏の守護を源氏の手で嚴重にするやうにしなければいけないとか、さういふ難かしい評定の言葉のつゞいて出て來る中を、そのやさしい聲だの、白い顏だの、長い黑髮だの、紙に包んだ災害避けの守札だの、互に抱き合つた體の暖かさだのが、錦を貫いた美しい珠玉でもあるかのやうに縫つて行つた。否、それは朝長ばかりではなかつた。父の義朝の頭の中にも、をり〳〵常磐のことや、朝餉の間の女房達のことや、淫蕩なあたりの空氣や、更に遠く美濃に置いてある女のことなどがをり〳〵通つて行くのであつた。

そこにひよつくり鎌田が顏を出した。

義朝はすぐ訊いた。

『何うした！』

『まあ、何うやら彼うやら納得させて來るには來ました――。しかし、あれは油斷はならない。源氏の族たることは存じてをる！　平家に加勢するやうなことはない、それはないと言うてゐたが、何うも信ぜられぬ！』鎌田はかう言つて、張詰めた顏をして、佩刀を取つて傍に置いて、どかりとそこに座を占めた。

の半面とが、その銀のやうな光の中に浮び上つて見えるやうになつた。

不意に長い渡殿を通つて、人の此方へと出て來る氣勢がした。それも一人や二人でなしに、大勢の氣勢が。

『それでは御無事で？』

『餘り案じずに――』

手を堅く握つて、これだけ早口に言ひ交はすにすら、二人は一方ならぬ慌ただしさを感じつゝ、女は右へ、弘徽殿の裏の築土の方へ、朝長は清涼殿の大きな建物の黑く月光を劃つてゐる影の方へと別れて行つたが、しかも五六歩此方へとやつて來た時には、それは別にそれほど氣を置かなくても好いものであるといふ事が朝長にはわかつた。それは舍人と雜色とが五六人して何か櫃のやうなものを奥から運び出して來てゐるのであつた……。

朝長はふと自分の前に父の義朝や武士達が猶ほ頻りに軍評定に頭を惱ましてゐるのを眼にした。かれは急にその美しい幻影からさめた。かれははつとした。今の時に際してそんなことを考へてゐる身の痴けさを一度は深く恥ぢた。しかもその悲しげな歔欷と甘い私語と涙に泣きぬれた白い顏とは、何うしてもかれの體から離れて行かうとはしなかつた。夜討をするとか、せぬとか



もう少し信頼を何うかしなければいけないとか、それには内裏の守護を源氏の手で嚴重にするやうにしなければいけないとか、さういふ難かしい評定の言葉のつゞいて出て來る中を、そのやさしい聲だの、白い顏だの、長い黑髪だの、紙に包んだ災害避けの守札だの、互に抱き合つた體の暖かさだのが、錦を貫いた美しい珠玉でもあるかのやうに縫つて行つた。否、それは朝長ばかりではなかつた。父の義朝の頭の中にも、をり〳〵常磐のことや、朝餉の間の女房達のことや、淫蕩なあたりの空氣や、更に遠く美濃に置いてある女のことなどがをり〳〵通つて行くのであつた。

そこにひよつくり鎌田が顏を出した。

義朝はすぐ訊いた。

『何うした！』

『まあ、何うやら彼うやら納得させて來るには來ました――。しかし、あれは油斷はならない。源氏の族たることは存じてをる！　平家に加勢するやうなことはない、それはないと言うてゐたが、何うも信ぜられぬ！』鎌田はかう言つて、張詰めた顏をして、佩刀を取つて傍に置いて、どかりとそこに座を占めた。

やれ六波羅から寄せる、やれ内裏から寄せると言つて、兩方とも冑の緒を緩めず騒いでゐる中にも、日は日と經つて、年の瀬は次第に押詰つて行つた。いつもならば、年の暮の營みに町も賑はひ、注連縄や松なども取揃へられるのであつたけれども、今年はそれどころではなく、いつ合戰が始まるか知れぬといふので、京の町では落附いて店を開けてゐるものなどもなく、女子供達は萬一の危難を恐れて、皆な安全な郊外の方へと逸早く落ち延びさせられるといふ光景であつた。騎馬の侍達は右往左往に馳せ違ひ、源平兩家の軍兵は京白河に充滿して、いろ〳〵な噂はそれからそれへと傳はつて行つた。何うなることかわからなかつた。

その噂の中には、内裏であつたことなども何處からともなく洩れて聞えた。別當惟方の兄に當る左衛門督光頼が、あざやかな束帶で、蒔繪の大刀をおとなしやかに佩き、肌に腹卷着せた雜色を一人伴れて、前高らかに逐はせながら、紫宸殿から殿上へと入つて行つて、威張つて坐つてゐる右衛門督信頼の上座に、われは左衛門督なれば、こゝに坐るに不思議は御座らぬと言つて、



衣紋を繕ひ、笏を取直して坐つたことや、その氣色に押れて、流石の信頼もそれには何うすることも出來なかつたといふことや、それから光頼は殿上の小蔀の前まで行つて、見參の板高らかに踏み鳴し、荒海の障子の北、萩戸のあたりに弟の惟方のゐたのを招き寄せて、いろ〳〵意見めいたことを言つたといふことなども誰言ふとなくあたりに聞えて行つた。

公卿、殿上人なども始めの中こそ信頼の威力に壓されて、誰蔭口を言ふものなどもなかつたが——むしろ滅多なことを振舞つたり言つたりしてひどい目に逢つてはならぬと小さくなつてゐたが、日を經るにつれて、信頼のだらしない光景を見るにつけて、次第にそれを侮るやうな形になつて行つた。『あんなことでは、とても長うは續かぬ。いかに源氏が強うても、大將があれでは何うにもならん。亡びるのも目の前だ……。あんなものに取合つて辛き目見るよりは、むしろ知らぬ顔をして、成行を見る方が好い。その方が賢い。』後には一緒に事をしやうとした人達すら、そんなことを言つて内裏に出て行かぬものが多くなつた。

その間にも、公卿の重立つた人達が參内して、少納言入道の子息十二人の死罪を宥めて、あちこちに遠流に處したりしたことなどもあつたが、さういふ中にも、信頼に對する反感は日增に高く高くなつて行つた。朝餉の間で、信頼が萬乘の君でもあるかのやうに振舞つてゐるのを見たも

のは、誰も淺間しい感じに打たれないものはなかつた。『異國にはさういふためしもあつたであらうが、わが國には未ださうしたことはきいたことがない。いかに世は末代になつたとは言へ、天照大神も、正八幡も上に照鑑あらせられたまふのに、この王法をいかに守らせたまひぬるぞ、主上の渡らせたまふところには、さうした謀反人の信頼が住み、君をば黒戸の御所に遷しまゐらせたとは！　何といふあさましいことであらう。』かう言つたのはあの傲岸な光頼ばかりではなかつた。中にはその亂れた内裏の光景を目にして、上の衣の袖を絞るばかりに泣いた公卿などもあつた。次第に六波羅の方へ心を寄せる人達が多くなつて行つた。

六波羅から今日こそ押し寄せて來ると言つて騒がれた二十六日の日も、何の事もなくいつものやうに暮れて、襲毎にいぶし銀のやうに光つて見えてゐた北山の雪もいつか夜の闇の中に包まれて行つたが、その夜の亥の刻近い頃、内裏の北の陣の方にあたつて、蠟燭の火がチラ〳〵と動いたり、松明があちこちと往來したり、暗い中を竊に何か運び出す氣勢がしたりしたのを、その近くにゐた鎌田の郎黨が見つけて、不思議にしてその一人二人が松明を持つたまゝそつちの方へ行つて見たところが、そこに溫明殿から梨壺の傍を通つて立輝門の方へと出て行かうとする路を五六人の雜色や下衆達が、大きな唐櫃に竿を通して急いでかついで行くのを眼にした。



『待て、待て。何ぢや、それは？』

郎黨の一人は松明を振り翳しながらかう訊ねた。

『何だか知らない。』

雜色や下衆は、それを傍に避けるやうにしてたぢたぢと立留まつた。

『誰れの指圖でそれを持出した？』

『伏見の源の中納言！』

雜色の一人は答へた。

『何處に持つて行くぢや。』

『北の陣まで持つてゆくことを吩咐つたぢや。何でも……師仲卿の家か何かに今夜めでたいことがあるといふぢや。』

『めでたいことゝは何ぢや。もう夜もおそいぢやないか？』

『お、中納言殿がおじやつた。あやしいと思はゞ、ぢかに中納言殿に聞いて見るが好い？』

かう雜色の一人が言つたが、果して向うから松明を下衆に持たせて、直垂に柏挾といふ扮裝で、急いで中納言師仲がやつて來た。

『何ぢや――』

かれは二人の郎黨が頻りに何か訊問するのを默つて聞いてはゐなかつた。かれは半ばその公卿の權威を用ゐて高壓的に出た。また半はそんなことをお前達にとがめられる譯はないと言つて辯解した。今夜は一の大殿の邸に御催しごとがあつて、これから上﨟女房達もお出かけになるので、その調度や何かゞこの大櫃の中に入つてゐるのだとかれは言つた。『いや、上﨟や女房達もこれから出やうとしてゐらるゝ……。現に牛車もそこに仕度が出來てゐる。それをかれ是咎め立てしてはいけない。一の大殿の邸には、何でも管絃の御遊があるのぢや。』かう師仲は巧に言ひぬけた。

『管絃の御遊？　この騷がしい節季に、殿上人はのんきぢやな。』一人の方の郎黨はこんなことを言つたが、他に別に咎め立てすることもないので、そのまゝ松明を振り翳しつゝ向うの方へと行つた。

師仲はわれながら仕すました……と思つた。かう言つて置けば、あとからひそかに逃れ出して來る主上のためにも非常に好都合に行くだらうと思つた。かれは内侍所からこの重要な、帝には常になくてはならない寶物を入れたこの大きな唐櫃をこつそり此處まで運び出して來た苦心を頭



に繰返した。兎に角に坊門の局の宿所まで持つて行つて、それから猶ほ都合がよかつたら、その身の東洞院の宿所に一時預かつて置くつもりであつた。内裏が戰場になつては、この大事な寶物も、とても無事には殘つてゐさうには誰にも思へなかつた。

『急げ！　急げ！』

師仲は促した。雜色と下衆とは再びその大きな唐櫃を擔いで、急いで向うの方へと行つた。

それからまた暫らく經つた。

何處かで竊に人の大勢囁やき合ふやうな氣勢がした。内裏も、東と南とは武士や雜兵の篝火で闇夜も晝のやうに明るく賑やかであつたけれども、北の陣から上西門の方にかけてはひつそりとして、唯門々を固めた武士の松明が、をり〳〵微かに見えるばかりであつた。

闇にもそれを透して見えるのは、一つの大きな牛車を取卷いて、直垂に兩刀を帶した公卿だの烏帽子に狩衣を着けた殿上人だのが、混雜と頻りに何事をかやつてゐる光景であつた。上﨟や女房達の美しく着飾つたさまも、それと微かに灯に映つて見えた。

何かしきりに小聲で囁やく氣勢もすれば、女房達の外出であることをあたりに知らせるために、わざと艶めかしいかをりをあたりに燻らせたりなどした。やがてその牛車は闇の中を靜かに

動いて行つた。

車の左右には、柏挾みをした別當の惟方と、新大納言の經宗とが供奉した。あとから腹卷をした雜色が二三人續いて歩いて行つた。

牛車は靜かに動いて行つた。空は夥たゞしく曇つて、何處にも星の影を見出すことが出來なかつた。夜更けの寒い空氣が鋭く肌を刺すやうにした。

貞觀殿の傍を通つて、そのまゝ玄輝門へとかゝつて行つたが、そこでは幸ひに何者にも出會さなかつた。松明をつけてをり〳〵巡邏してゐる武家の郎黨にも見咎められなかつた。しかしそれもほんのわづかの間で、それから朔平門の方へと行くと、其處を固めてゐた金子と平山とが、あやしいものを見出したと言はぬばかりに、急いで松明の火を澤山にそこに集めた。

『誰だ？　何者の車だ？』

一番先にその牛車に近寄つて行つた金子家忠はかう言つて詰つた。かれは腹卷に身をかため、胡籙を後に負ひ右の手に弓を持つてゐた。

『一の殿の宿所に、今夜御催しごとがあつて、中宮のお出ましになるところぢや。』

『中宮が？　この夜更けに――』



『無禮をするな……。中宮のおん乘物だぞ――』

金子の手の者が大勢その周圍に集まつて來たので、經宗は聲を荒らげて言つた。

金子のあとから平山が續いてやつて來た。二人は相談でもするやうにして顏を合せた。別當の惟方は、途中で靴の紐の緩んだのを直してゐたために、少し後れたが、此時其處にやつて來て言つた。

『こら、金子ぢやないか。家忠ぢやないか。この顏を見忘れはすまい。別當惟方だ。この惟方がついてゐる以上、何もあやしいものではない。』

『とは申しても――この夜深けに――』

『いや、大事ない。この身がついてゐる上は、何も咎め立てするには及ばぬ。一の殿の御催しで、中宮さまがお出ましになるばかりぢや――』

金子はそれでも猶怪しいと思はゞにはゐられなかつた。かれは勿體ないとも無禮とも思はぬではなかつたけれども、しかもその身の重い役目をもその念頭に置かずにはゐられなかつた。かれは手にした弓の弭で牛車の簾をかき上げた。つゞいて雜兵の一人がそのもつてゐる松明をすぐその近くにさし寄せるやうにした。

家忠は忽ちそこに二人の女性の花やかな御衣を召されて並んで乘つてゐらるゝのを眼にした。かれははつとした。その美しさに、その氣高さに、またはその藤たさに眼も心も忽ち奪はれて了つたやうな氣がした。その一人がかしこくも主上で、わざと女房の飾りを召して、御髮をつけてゐらせられるなどとはかれには何うしても思へなかつた。一人は中宮で、他の一人はそのおつきの宮女であるとしか思はれなかつた。かれは大丈夫だと思つた。

『よろしい！』

かう言つてかれは一歩二歩あとに下つた。牛車は靜かに動き出した。

『仔細はないか？』

『たしかぢや……。たしかに家忠が見とゞけた。中宮に上藤達だ。』

かう平山と金子とが言ひ交はしてゐるのが後にきこえた。

門を出て、右に曲つて、一方桂芳坊、一方職曹司の建物を大宿直の角まで行き、それをまた右にまがつて了ふまでは、車の中にゐらせらるゝ主從を始め、惟方も、經宗も、またその車の前後に從ふ侍や、雜色に至るまで、少しも安き心はなく、さびしい暗い夜の道、牛車の車輪が轆轤と廻つて行くだけで、誰も口を開くものもなかつた。『その車待て！』と後から追懸けて來る聲を



今にも耳にするやうな氣がした。

しかし幸にも、さうした追手のかゝらぬ中に、車は上東門へとかゝつて行つた。更に幸であつたのは、朔平門に引かへて、そこには何等の固めもなく、唯二三の下侍が松明を振り翳して、型ばかりの調べをしたにとゞまつたことであつた。『中宮が一の大殿へのお出まし！』と言つたゞけで、何の苦情もなくすら〳〵と通つて行けた。

門を出て一町ほど此方へ來たところで、惟方は始めてほつとしたといふやうにして言つた。

『もう安心だ！』

『やれ、やれ。』

經宗も合はせた。

主上にも中宮にも惟方はその旨を言上した。

『あゝ膽を冷した！　あの家忠が弓の弭で簾をかうかき上げた時には、これはもうとてもいけないと思つた！　あの時には、この身は覺悟した！』

惟方がつゞけて言つた。

『本當にさうだ。あの時は何とも言はれなかつた。それでもよくわからなかつたものぢやな。

矢張おつきのものと思つたのぢやな。』かう經宗も笑ひながら言つたが、『それにしても何うした！此處等に平家の侍が待つてゐる筈ではなかつたか？』

『さうぢやな。』

惟方もあたりを見廻した。

突然牛飼の裝束をしたものが、松明をもつて近寄つて來た。

『この身は館太郎貞康……。もしや上御一人では？』

『六波羅からか？』

『左樣で御座りまする……』

そこからも此處からも、雜色の姿をしたものが續いて出て來た、その中の一人は清盛の郎黨伊藤武者景綱と名告つた。雜色の姿はしてゐても、松明の光で見れば、小張りの下に立派に黑糸縅の腹卷をしてゐた。

館太郎は牛飼を指揮するために車の傍に立つた。皆なは勇み立つた。今は最早一刻も猶豫してゐる時ではなかつた。『兎に角土御門までは急げ！　あれから向うには、左衞門佐殿や三河守殿が待つて居らるゝ程に』かう言つて出來るだけ强く鞭を牛の脊に當てさせた。牛は一散に走り出した。惟方も經宗も徒歩ではそれについて行くことが出來ないほどそれほど早く走り出した。

平日ならば、かなりに距離があるのであつたが、今宵は遠いなどと誰も思はない中に、時の間に土御門が近くなつて、多い松明の灯と、煌々と闇に輝く物の具と、弓矢をもつた騎馬の武士と大勢の侍とが歡呼してその車を迎へた。その時チラ〳〵と降り出して來た雪片が松明の火にそれを透して見えた。

## 九

一本御書所に幽閉させられた上皇は、夜の御床にも安んじては入らせられず、ひとりさびしく起きてゐらせられたところへ、急に藏人右少辨の成賴が參上した。

聲をひそめて成賴は奏した。

『最早いつ合戰が始まりまするかわからない有樣で御座いまする。今の中におん姿をやつさせ奉られて、何處へなりと御逃れ遊ばされずば、どんな危難が玉體の上に起らないとも限りませぬ。信賴などはもはや御信用なされてはなりませぬ。公卿も殿上人も多くは六波羅の方へと參られました。帝ももう少し前、ひそかに朔平門を出でゝ上東門から六波羅の方へと行幸になられまして御座る！』

『六波羅へ？　帝が？』それを聞いた時には、上皇は顏の色を變へた。成賴は猶ほ奏した。

『帝が內裏を去られました上は、院にも一刻も早う何方へか御幸あそばさるゝが宜しくはないかと存じられまする……。もし、時おくれて、信賴等の手にお落ちになるやうなことが御座りますれば、それこそ保元の二の舞で御座りまする。讃岐の院と同じ御運命かともひそかにお案じ申上げまする。一刻も早く……』



『わかつた！』

上皇はかう言はれただけであつたが、暫らくする中に、今は一刻も猶豫しては居られぬといふ御心持が次第に強く盛んになつて行かれたやうに見えた。

『藏人！』

かう上皇は成賴を呼んだ。『藏人、馬の用意は？』

『御幸は何方へ？』

『止むを得ん。嵯峨へ行かうと思ふが……？』

『承はりました。上西門の外に、馬の用意を致させて置きまする……』

かう言つたまゝ急いで成賴は出て行つた。

上皇は北面の武士平左衞門尉泰賴をその寢所に留めて、それにある期間そこを守らせるやうに命じた他は、誰にも相談しやうとはなされなかつた。寵臣ではあるけれども、信賴にはとうに愛想をつかされて居たし、その他の文官武官達にもそれは言つて好いかわるいかわからなかつた。

平生から仲違ひで、帝に對してあまり面白く思つてゐらせられなかつたことが、かうした亂を醸す基になつたといふことを、此時ほど上皇ははつきり胸に浮べさせられたことはなかつた。上皇は姿を殿上人に變へて、一本御書所の裏の小蔀を上げて、急いで暗夜の中に忍び出られた。

上西門の外には、馬の用意はしてあつたけれども、藏人成頼はもとよりそこにはゐなかつた。馬の口取る男が、萬事心得たと言はぬばかりに、または上皇の御幸とはつゆ知らずに、唯、殿上人の外出とのみ思つてゐるやうに、無躾に、上皇を鞍の上にかき乘せて、そのまゝ叱、叱と手綱を取つた。

上皇は氣が氣でなかつた。讃岐の院のことがそのまゝその身に酬つて來たのではないかといふやうにすぐ思はれた。それと知つて、これは一大事だと言つて、否、信頼や義朝があとから追かけて來はしないか。そして無理やりにこの身をもその亂れの中に入れはしないか。かう思ふと上皇は殆んど生きた空はなかつた。

讃岐の院はそれでもまだ好かつた。敗軍ではあつたけれども、それでも家弘、光弘などゝいふ侍がついてゐた。まだ頼もしかつた。それに比べて、その身がひとり供奉するものなしに、追手のかゝるのを案じつゝ見も知らぬ男子に馬の轡をとらせながら、かうして夜更の闇の中をたど



つて行くことを考へた時には、上皇は何とも言ふことの出來ない心細さに襲はれた。上皇は馬上でかう思ひ續けた。

歎きには
いかなる花の
咲くやらん
みになりてこそ
思ひ知らるれ

實際自分でそれを經て見なければ、本當のことはわからないと上皇はつくゞ〳〵思はれた。讃岐の院のことが一層はつきりと御胸に浮んで來た。

もはや神より外にたよるものはないと思された。上皇は馬に搖られながら、男山八幡に、伊勢に、日吉に一心に御願を立てられた。此時、北山おろしはさつと音を立てゝおろして來た。雪さへチラ〳〵降つて來た。

『えらいことになつたな？　こりや雪ぢや！』馬の口を取つた男子は、上皇とは夢にも知らないので、話をしかける氣で、小笠を傾けながらこんなことを言つた。

上皇はしかし何とも答へられなかつた。男子は猶つゞけた。

『今夜は降るかな。ことに由ると、積るかも知れんな？　此間中から、一度來さうだ、來さうだと思つてゐたでな？　それにしても京は呪はれてゐるのぢやな。雪は降る。合戰は明日にも始まるも知れん？』馬上の人はさう言つても猶ほ答へぬので、男子は今度は振返つてそれを見上げるやうにして、『それにしても、嵯峨は何處ぢやな？』

『お室……』

『お寺かな？』

『さうぢや。』

『それでは此方に行く方が近路ぢや？』

男子はそれを半ばその身に言ふやうに言つて、ともすれば消えかゝらうとする松明を翳しながら、二つにわかれた路の細い方を右にとつた。

あたりは眞の闇であつた。臥待の月でも出れば、空は曇つてゐても、いくらか明るくなるといふこともあつたけれども、今宵はさういふあてもないので、唯、墨を流した闇の中に、一つの松明が、チラ〳〵した雪と烏帽子を着けた人の影とほ〳〵たどるやうにして進むで行く馬の姿と



を微かに見せてゐるばかりであつた。風の吹いて來る度に、男子はその小笠を左の手で押へた。

上皇は覺えもないほどの冷たさを御手に感じさせられつゝも、しかもそれを何うすることも出來なかつた。雪片は粉のやうに、御顏にも、御衣にも、御けしにも降りかゝつた。暫らくした後には、御胸のあたりも、烏帽子も、すべて雪で眞白になつてゐた。

やがて闇の中を限取つて、更にこんもりと影のやうにあらはれて來たのは、それは黑い森の中に、屹然として常にその半ばを見せてゐる五重塔であつた。『あ、あれが寺ぢやな？』かう思はず獨語のやうに言はれた上皇は、此時始めてほつと呼吸をつかれた。

そこには讃岐の院にも、上皇にも同母弟にあたらせられる第五の宮が、門主として坐らせられてゐるのであるが、その仁和寺近く來たにつけても、上皇は保元の時のことを考へずにはゐられなかつた。上皇は危うきところをやつと此處まで遁れて來たやうな氣がした。雪は猶降り頻つた。容易に止みさうにも思はれなかつた。草や木の葉の上にも既に白くたまつたのが夜目にもそれと著しく見えた。

# 一〇

その夜の雪は、しかしさう大して深くは積らなかつた。丑の刻あたりには、既に全く止んで、星が金属でもあるかのやうにキラ〳〵と美しくあたりに輝いて見えてゐた。夜は次第に曉になつて行つた。

やがて微かに明け離れて行つた空には、京の四面を取巻いた山巒が、丸で捺しでもしたかのやうに黒く低くあらはれて、その此方には、加茂川の水が凩でも吹くやうな音を立てゝ、錆鐵納戸の色を一筋長く雪の中に際立たせて流れて行つてゐるのが見えた。

義平は從者を連れて、加茂の社に朝參りにと出懸けて行つたが、あることを耳にして、途中から引返して、急いで父の義朝のゐる陣所へと行つた。

『父上！』

かれはかう大きく呼んだ。『父上、それはまことで御座るか？』

義朝も慌たゞしさうに、いつもと違つて、すでに早く起きて、腹卷に身を固めて、床几に凭つてゐたが、『徐かに、徐かに――』かう言つて手で制した。

『まことで御座るか。上は六波羅へ？　院は御室へ――？』激昂してゐるかれには、胸が躍つてあとは十分に言ふことが出來なかつた。

『徐かに――』

再び義朝は手で制した。そして言つた。

『わしも、もう少しさつきに聞いたばかりだ！』

『では、まことで御座るか？』惡源太は拳を握つてぶる〳〵と身を戰はせた。

『右衞門督からは、まださう言うては來ぬが、まことらしい。』

『おろかものゝ右衞門督奴が、何をしてをつたのぢや！』

義平はかう吸鳴つて、大事が去つたといふやうに口惜しさうに足摺りをした。否、右の手に持つた弓の弭でついたので、板は夥たゞしく鳴つた。

『徐かに――』

『父上、徐かにと仰せられても、これが徐かにしてをられませうか？　大事が去つたでは御座らぬか。せめて院だけでも留めて置けば、それでもまだ何うにかなるといふものであるのに、そ

れさへ御室へ落させ奉るとは何といふことぢや。父上、偏に御運の極み――』義平は大きく眼を見張つた。その眼からは涙がほろ〳〵と落ちた。

『さう言ふな？　これも止むを得んぢや。』

床几に腰をかけてゐた義朝は、流石に既に決心をしたといふやうに、『止むを得ん。これも皆なかうなつて來る成行ぢや。九日から今日までかうして躊躇つてゐたのも、その身が阿倍野へと言つたのを用ゐることの出來なかつたのも、皆なかうなる成行ぢやつたのだ。義平、今日こそは、もはや思ひ惑ふことはなくなつた。上のことも、院のことも頭に置かなくとも好うなつた。今は合戰ばかりぢや。運だめしぢや。』

『父上！』

義平はかう叫んだ。

『源氏は源氏のことだけをすれば宜しい。向うが勝つか、此方が負けるか、思ひ切つて戰つて見やう。これが武士たるもの一つとめぢや。清盛の首搔き切つて大路をわたすか、この身がさうなるか、二つに一つぢや。』

『父上！』



義平はまた叫んだ。

『今、鎌田にもさう言うて置いた。源氏の中でも、義朝に從はぬものは何うでも宜しい。從ふものだけを集めて置けと命じて置いた。その身も、さうして激昂してばかり居る時ではあるまい。急いで合戰の仕度をせねばならぬ！』義朝は屹としてかう續けた。

『父上、兵庫頭は？』

義平は意氣込んで訊いた。

『あんな二心ものは、あてにせずに置くが好い。いや、あれの他にも、心變りをしたものがあるが、さういふ武士は棄て置くが好い。』

『それは誰で御座るか？』

『誰でも好い……』

『この身も知りたう御座りまするゆゑ……。また存じて置く要も御座りまする。』

義朝は考へて、

『光保も、光基も、皆な心替りして平家に參つた――』

『光保すらも――』

義平もさも無念といふやうに足摺をした。

『それよりも早う行け！　手の者を集めて置け。今朝は平家が押寄せて來るに相違ない……』

『それでは、父上――』

かう言つて義平はそのまゝ向うへと出て行つた。

義朝は暫しひとりになつた。かれは深く〳〵溜息をついた。かれはいくらか低頭加減にして、じつと物を思ふといふ風であつたが、すぐ思ひ返したといふやうに顏を擧げた。皮肉な笑ひ――いくらか自暴自棄に近い笑ひがかれの口のあたりを掠めて通つた。

かれは今朝急に鎌田に起されたことを思ひ起した。『え――何といふ？』かう言つて驚いてむつくり立上つたことを思ひ起した。その時には、信頼は既に寢惚け顏をして、その事を知らせて來た成親と一緒に黑戸の御所や一本御書所へ行つて足摺してくやしがつたあとであつた。金子が弓の弭で上げた車の簾の中に主上がおはしましたこともやがてはつきりとわかつて來た。『何故上皇だけでもお留め申さなかつたか？　現に立派な侍もついてゐたのに……』かう言つて見たところで、何うすることも出來なかつたことを思ひ起した。つゞいてかれは六波羅が主上を迎へていかに力づいたか、またそれを聞いて、今まで此方についてゐた公卿や殿上人が、いかに多く其方に



走つて行つたかといふことを思ひ浮べた。主上を盜み出した惟方や經宗のことなどもはつきりと眼の前に見えた。

『思ひをれ――』

かう言つてかれは烈しく下唇を嚙んだ。

此合戰には是が非でも打克たなければならないとかれはつゞいて思つた。常磐のためにも誰それのためにも……。保元以來その身が豪つた惡い噂のためにも……。『思ひをれ！』かう再びかれは心の中に叫んだ。其處に烏帽子に腹卷をした、十三にしては身長も大きく、何處となくませてゐる左兵衛佐頼朝が入つて來た。

いきなり義朝は言つた。

『申して來たか？』

『申して參じました。仰の次第たしかに承はつたと申してをられました……』

『越後の中將が？』

『さやうで御座りまする……。この方は御案じなきやうと申されてをられました……』

『信頼卿は？』

『信頼卿はそこにはお出になつてはをられませぬやうで御座りました……』

『さうか……大儀ぢやつた！』

頼朝はすぐそこから出て行つた。義朝はそのためにも、その幼いものゝためにも、今日は十分に合戰しなければならないと思つた。發明な生れつきで源氏のあとは何うしても頼朝でなければ繼ぐものはないと思つてゐたゞけに、また祖父の八幡公の幼ない時にそのまゝであると聞いて、平生この上もなく可愛がつてゐたゞけに、一層この合戰に克たなければならないやうに思はれて——否むしろかうした不運な合戰に出會さねばならなかつたことが可哀相のやうに思はれて、義朝はじつとその少年武士の後姿の向うに見えなくなるのを見送つた。

その時ちよつと浮んで來たのはその頼朝の母親のことであつた。

それは頼朝の七つの時であつたから、もうかなりに長い年月を經てゐるのであるけれども、それでもまだその嫉妬に燃えた妻の由良御の顏は昨日のやうであつた。たうとうかの女は京に留きつてゐられずに、常磐に溺れてゐる夫を眼にするのに堪へられずに、幼い兒を二人伴れて、里の熱田の大宮司の許へと歸つて行つて了つたのであつた。

そこに鎌田は興奮した顏をして入つて來た。



『待賢門は大丈夫で御座るか？　越後の中將に任せておいて？』

『もう來たか？』

義朝は床几から立上つた。

『まだ、參つたといふでは御座らぬが、頻りに準備を致して居るといふことで御座ります。今朝はきつと押寄せて來るに相違御座いませぬ。』

『何も恐るゝには及ばぬ。源氏は源氏だけのことをするぢや。長い間の恨みを一擧に平家に報いるのは此の時ぢや……』

『それでは、宜しいで御座らうか？　待賢門は？』

鎌田は獄言つた。

『右衛門督は何うした？』

『清涼殿の前のところに出てをるにはをられたが、殿、あんな若輩は相手にはなりませぬぞ！』

『それはさうぢや——？』

『あんな若輩を、あのやうな臆病者を大將に戴いたといふことが、そも〳〵の過ちで御座つた。右衛門督に對する世の中の噂は、お話にも何にもなりはしませぬ。下侍ですら、かれを侮つて

をりまする……』

『しかし、今になつて、そのやうなことを申すな。』義朝は不愉快さうに言つたが、すぐ言葉をついで、『實際に待賢門が任せて置けないといふなら、義平をつかはしても好いが？』

『殿は、お任せになつて置いても好いと思召さるゝか？』

『さういふわけでもないが、折角その手で固めやうと思つてゐるものを、それを、此方で押し退けるといふわけにもまゐらぬ……？』

『それでは、あのまゝに致して置くことに致しませうか？』

『待て？』

義朝は考へて、『かうするがよろしい。わしが郁芳門に行かう。そして義平をあの待賢門近くに備へさせて置かう。そして様子を見やう？　その方面が保てぬとあつては困るから！』

『殿が郁芳門をかためて下されば、それほど心丈夫のことは御座らぬ。敵は大宮通りから二手になつて押寄せてまゐるらしい……。それでは一刻も早く、その旨源太どのへ傳へねばなりませぬ！』鎌田はまた急いで出て行つた。

それと入れ違ひに、直垂に指貫を穿いて腹卷に身を固めた金王丸が入つて來た。かれは今船岡



の常磐の宿からやつて來たのである。

『お、金王丸！』

義朝は喜ばしさうにして、『何うぢやつたや？』

『別にお變りは御座りませぬ……。好い御機嫌で入らせられました……』

『案じて居らうな？』

『いゝえ、御氣丈でいらせられますから、そのやうなことも御座りませぬ。一刻も早う合戰に お勝ち遊ばされて、喜ばしくおん目にかゝることをお待ち遊ばすといふことで御座りました。保元の時にも、御運强く、あの大敵に打勝たれたれば、今度も、御勝利のほど疑ひあるまいと申されてをられました。』しばし途切れて、『此間もさし上げましたが、これはことに深く御立願なされました日吉の御守札だといふことで御座います。これを御肌におつけになつて戰場にお出かけ遊ばすやうにとのことで御座いました。』かう言つて、金王丸は常磐から托されて懷に入れて來た小さな錦の包を出してそれをそのまゝ義朝に渡した。

『外には何も申さなかつたか？』

『別に、御言葉も御座りませぬでしたが、お暇申して此方に出て參りますと、あとから二三間追

うて入らせられて、吳々も御身大切になさるゝやう、また御勝利あらせらるゝやう神かけてお祈り申してをると仰せられました！』

『さうか――？』

かう言つたものゝ義朝は黯然とせずにはゐられなかつた。かれの頭は常磐の面影ばかりではなく、いろ〳〵なことで一杯になつた。今更そんなことを繰返して見たところで爲方がなかつたけれども、信頼の宿所を訪うた時からの成行が、惡夢のやうな成行が、はつきりと眼の前を掠めて通つた。今現に置かれてあるその身の位置を考へた時には、かれはその身が地上深く落ちて行くやうな暗い一種の衝動を強く感ぜずにはゐられなかつた。

不意に戸外が騷がしくなつた、馬の嘶く音、物の具の觸れ合ふ響、人のぞろ〳〵と慌たゞしく走つて行く音、何か向うの方で大勢の叫ぶ氣勢――さうしたものが一つになつて、恐ろしい怒濤でも凄じく此方へ此方へと押寄せて來るやうな氣がした。誰もわく〳〵せずにはゐられなかつた。そこにまた義平が入つて來た。頼朝が入つて來た。鎌田が入つて來た。

『殿、もはや打立てねばなりませぬ。敵は押寄せて參りました！　早う支度を、物の具を？』

かう言つて鎌田はすぐまた出て行つた。



皆なは立上つた。もはや一刻も猶豫してはゐられなかつた。かれ等の前には、生か死の運命の淵が大きくひろくひろげられた。義朝も義平も頼朝も金王丸も皆なその鎧櫃の置かれてある方へと行つた。鬨を擧げるやうな氣勢がまた大宮表の方で聞えた。

卯の下刻から辰の上刻にかけての大庭の光景は何とも言はれなかつた。櫻と橘とを左右にした紫宸殿を前にして、雪が白く玉を敷くやうに積つてゐる上にキラ〳〵と朝日が美しく照り輝いて、承明門の左側にある大きな椋の木からは、堆雪がバラ〳〵と礫のやうに落ちた。

物の具は皆な光つて、閃めいて、輝いて、到るところに繪のやうな光景を見せた。今日を晴れの合戰と思つてゐるので、重立つたものでなくとも、誰もすぐれた鎧兜を着けないものはなかつた。また誰も選りすぐつた太刀を帶しないものはなかつた。沃懸地の金覆輪の鞍や、怒物づくりの太刀や、黑羽の矢を入れた胡籙や、節卷の弓や、白蘆毛の馬や、鴛の裾金物打つたる蒔黃匂ひの鎧や、高角の兜や、鍬形打つたる白星の兜や、さういふものがそこからも此處からも出て來て、てんでに大庭に集つてはその持口の方へとついて行つた。

中には田舍から出て來たばかりの侍が、汚ない雜兵を伴れて、馬を引いて通つて行くものもないではなかつたけれども、それはほんの數へるほどで、多くは凜々しい、派手な、いかにも名を



惜んで命を惜まないといふ武士ばかりで、いかに平家が強くとも、またいかに多勢であつても、この東國の源氏の人達の勇ましさには敵すべくもないやうに見えた。

正面の紫宸殿の額の間には、右衛門督信頼が、赤地の錦の直垂に紫裾濃の鎧を着て、黃金作りの太刀を佩き、いかにも大將らしく床几に尻を置いてゐたが、をり〳〵心配になると見えて、さも落附かぬやうに、南に面した階段を半ば下り懸けて見たり、または元のところに入つて行つて見たり、時には全く大庭に下り立つて、そこにかれのために雜卒が引出して來てゐる太く逞しい八寸あまりの黑馬に、沃懸地の金覆輪の鞍置いたのを、左近の櫻の幹の下に東頭に引立てゝゐるあたりまで歩いて行つたりなどした。そこに、越後の中將成親が、紺地の錦の直垂に蒲黃匂ひの鎧を着て、長覆輪の太刀を佩き、龍頭の兜をつけて徐かにやつて來た。

いつもならば、何か言葉を交すのが常であつたが、成親は今朝は會釋したばかりで、何も言はずに、そのまゝ日華門の方へと行つた。信頼はまた南階を上へとのぼつた。

閧の聲がまた湧くやうに左に當つてきこえた。たしかに敵は大宮通りを待賢門の方まで既に押寄せて來たらしかつた。信頼は床几に尻を落して見たが、すぐまたそこから立上つた。

大庭の雪の中を侍や雜兵が日華門から、または月華門から、間斷なしに承明門の方へと出て行

つた。馬を引いて行くものあれば、馬に乘つて走らせて行くものもある。胡籙の白羽の矢の際立つて鮮やかに朝の空氣の中に見えてゐるものもあれば、逞しい馬が躍つて鏡鞍がキラ〳〵と日影に光つて見えてゐるものもある。旗を卷いたまゝそれを負つて行くものもあれば、十分にそれをひろげて、いかにも源氏の白旗らしく勇しく朝の風に飜らせて行くものもある。金子の手の者も、齋藤の手の者も、平山の手の者も、あとからあとから間斷なしに出て行つた。また鬨の聲がすさまじくあたりを動かした。



## 一二

日華門のところが少し混雜してゐたが、やがてそこから赤地錦の直垂に黑絲縅の鎧を着、鍬形打つたる五枚兜の緒をしめ、怒物づくりの太刀を佩き、黑羽の矢を負ひ、節卷の弓を持つて、黑桃花毛の馬に鞍を置かせた左馬頭義朝が、流石は源氏の大將だと誰にも思はせるやうな威風を保つて、堂々として此方へと出て來た。つゞいて、練色の魚綾の直垂に、八龍といふ、胸板に龍を八つ打ちつけた鎧を着け、高角の冑の緒を締め、石切といふ太刀を佩き、滋藤の弓持つて、鹿毛の馬を逸り切つたのに鏡鞍置かせた惡源太義平が出て來た。

朝長は兄に比べては、流石に若々しく、朽葉色の直垂に、澤瀉を縅した家重代の鎧に、白星の兜を着、薄絲といふ太刀を佩き、白箆に白鳥の羽でつくつた矢を負ひ、二所藤の弓持つて、葦毛の馬に白覆輪の鞍置いたのをつゞいて引立てた。頼朝は朝長と三つ違ひの年は十三、紺の直垂に源太が產衣といふ、源氏重代の物の具の中でもことに祕藏の重寶とされてゐる八幡殿以來の鎧を身につけ、白星の兜の緒をしめ、鬚切といふ、これも八幡殿が貞任宗任を攻められた時、生捕つ

たものゝ首を斬るに、十人が十人鬚まで切れたといふので其ためにその名を得たといふ太刀を佩き、十二差した染羽の矢を負ひ、滋藤の弓を持つて、栗毛の馬に柏梟摺つた鞍置いたのを引立てゝ出て來た。否、あとからあとへと侍や武士が續いて馬を引立てゝ出て來るので、物の具の金具がキラ〳〵と朝日と雪とに映つて、何とも言へない美しさをあたりに輝かした。

三方の門を鎖し固めて、東に面して陽明、待賢、郁芳の三門だけを合戰の庭とする軍略なので、梅壺、桐壺、梨壺、紫宸殿の前後、承香殿の傍の壺あたりから承明、建禮の門の方へと、侍や雜兵や馬を引立てた武士などが陸續として出て行つたが、その光景は何とも言はれない夥しい混雜をあたりに呈した。否、晴れた朝の空に飜つて靡いてゐた白旗の數も次第に多くなつて、今では二十旒以上を數へるやうになつた。否、建禮門を向うに出たところでは、大內の築土を隔てゝ、既にそこまで押し寄せて來てゐる平家の赤旗が何旒となく斜にまたは眞直に、動いて通つて行くのを見た。

やがて大內裏も轟きわたるほどの鬨の聲がすぐその前から起つた。愈々合戰が近づいて來たのであつた。信賴は此時まで紫宸殿の南階を下りたり上つたりしてゐたが、その凄じい聲に忽ちわなわなと震へて、いかに押へてもその戰慄を止めることが出來ず、顏の色は草の葉のやうに、人



並に乘らうとした馬は、はやり切つたる逸物ゆゑに容易に乘れず、侍士二人に押れて、辛うじて乘らうとして、しかも乘り得ずに、押された方へと伏しざまに堂と落ちた。否それですら見にくいのに、侍が起して見た時には、顏一面にひしと砂がついて、鼻血さへ見苦しく流れてゐるのを誰も眼にした。

その向うに並んでゐた義朝の一行にも、それははつきりと見えた。義朝は苦々しゆに下唇を嚙むやうにしてそれを見てゐたが、『臆したな！　おろかものが？』かうつぶやいたまゝ急いで馬へと跨つた。義平も朝長も賴朝も皆な鮮やかにそれに倣つた。かれ等は急いで郁芳門の方へと行つた。

大將の出陣！　といふので、今度は大庭に集まつてゐる此方の侍や雜兵達がすさまじく鬨の聲を擧げた。愈々合戰は始まつた。

## 一三

『殿、六波羅まで攻め寄せらるゝ御覺悟か？』

急いで追ふやうにやつて來た鎌田はかう後から聲を懸けた。

義朝は振返つた。

『申すまでない？』

『勝に驕つて、過誤がありは致しませぬか？』

『何故に？』

『六波羅は嚴重に固めて居りはしませぬか。逸以て勞を待つといふ形になつてはをりはしませぬか。それに、主上もそこに入らせられるでは御座らぬか？』

義朝はしかしそんなことを言つては居られなかつた。勝に乘つて一擧に六波羅を屠つて了ふより他に、かれに取つては今は何うすることも出來なかつた。とても呼吸をついたり何かしてゐるひまはなかつた。そんなことをしてゐては、折角勝に乘つたこの勢ひも何うなつて了うかわから



なかつた。

『いや――さういふ懸念はいらぬ。勝つたものゝ勝ぢや。この勢ひで押せばわけはない。六波羅も一押ぢや――』

鎌田は猶言はうとしたが、義朝はそれに耳を假さうとはしなかつた。かれは郁芳門から大宮通りを眞直に二條の方へと出て行つた。源氏の兵どもは鬨の聲を擧げつゝ進んだ。白い數旒の旗が勇ましく平家の赤い旗を追つた。

辰の刻からの合戰には、義朝に取つてすべて夥しく順よく運んだ。かう旨う行かうとはかれも豫期してゐなかつた。かれは平重盛が最初に五百餘騎を提げて、一擧に信賴と成親とを破つて、內裏の大庭の櫻や橘のあるあたりまで押寄せて來たのを見てゐた。流石にその時は氣が氣でなかつた。弱い公卿に任せて置いては何うなるものかわからないと思つた。かれは躍り上がつた。

義平！　あれを懸けて見よ！　かうかれは命じた。それにしても、あの義平の態度は何んなに勇ましく、また何んなに鮮やかであつたらう？　また源氏の武士達の合戰ぶりは、何んなにかれの目に賴もしく勇ましく映つたらう？　轡を並べた十七騎の奮戰は、忽ち五百餘騎をかけ散らして了つたではないか。敵が新手を取替へて、再び盛り返して寄せて來た時には、義平は重盛に組ま

んがために、弓を小脇にかい挾み、鎧をふん張り、仁王のやうに突立ち上つて、大庭の大椋の木の周圍を五六度まで追ひ廻したではないか。否、それればかりでない、それは義朝は自分が見たのではなかつたけれども、義平を頭にその勇ましい十七騎は、その平家の軍兵を二條の東まで追つて行つて、堀河あたりで、既のことその重盛を獲やうとしたといふではないか。射られた馬は屏風のやうに倒れて、それと共に重盛は材木の上に跳ね飛ばされ、兜も落ち、大童にもなつて命を惜まぬ二人の家來さへなかつたなら、忽ち首を搔かれるところであつたといふではないか。現にその家來の首を代りに鎌田が持つて來て、『平家にも忠義の家來はゐるものぢや。この武士さへ己に組まずば、重盛の首はこの正家のものであつたのに……』と、いかにも無念さうにその時のさまをかれに語つたではないか。否、かれの向つた郁芳門の方でも、さう手強いものはなかつた。そこでは、初めは朝長や、新宮や、平賀や、佐渡や、頼朝が出て戰つたが、後はに、『何うも若い者の軍は疎らに見ゆる。この身が懸けて見せやう。』かう言つて義朝が自身陣頭にその馬を進めた。

それでもこの方面では、三河守頼盛が流石によく戰つた。平家の赤標と赤旗とは、何遍となく源氏の白い大旗と腰小旗とを押し返した。また時には、何方も一歩も退かず、譲らず、兩方の旗と標とが互に亂れ合ひ雜り合つた。しかし重盛を遠く追つて行つた義平や鎌田達もやがて戻つて



來た。源氏は益々それに勢ひを得た。

鎌田の下人に、八町次郎といふ大力の剛の者があつた。かれは名だたる早走りであつた。また手利きでもあつた。保元の時にも、生中馬に乘るよりは徒歩の方が好いと言つて、腹卷に小具足といふ扮裝で、遙かに向うに馬で落ちて行く武者を八町が内に追ひつめて、そのまゝその首を取つたので、それで八町次郎と呼ばれたのであつたが、何うした好運か、かれは三河守頼盛の馬を走らせて落ちて行くのに出會して、一散にそのあとを追ひ懸けた。

『お？　八町次郎が追ひ懸けた？　八町次郎が？』

『あれは、敵の大將三河守では御座らぬか？』

『やあ！』

と言つて源氏の方では軍をやめて鬨をつくつた。眞直で、砥のやうに平らかで、見渡すかぎり午前の日影に明るく照らされてゐる大宮通りは、そこから、その義朝や鎌田や義平のゐるあたりから、それとはつきりと手に取るやうに見えた。否、追懸けられたと知つた頼盛が、名だたる早馳せの名馬に兩鐙を合せて、一目散に驅けて行くあとから、脛も空はに、今にも追附かんばかりに走つて行く八町次郎の姿が黑く小さくなつて見わたされた。

『や、追附いたー　追附いた！』

じつとそれを見送つてゐた鎌田は思はずかう叫んだ。

義朝にも微かながらそれが見えたやうに思つた。否、その時には八町次郎の手にしてゐた熊手が走つて行く頼盛の兜の頂邊に懸らうとしては外され、外されてはまた懸らうとしてゐたが——否、頼盛はそれを懸けられまいとして、兜を打傾け打傾けつゝあしらつて走つて行つてゐるさまがそれと見えたが、突然、鎌田は、

『やー　たうとう引かけた！』

と喜ばしさうに叫んだ。果して三河守は兜を傾けつゝ、もはや馬上にも堪へられないといふやうに半ばその身を傾けたが、さういふ中にも佩いてゐた大刀を拔いてしとゝ切つたらしく、その次ぎに見た時には、熊手の柄を手元に二尺ほど置いてつんと切つて落された八町次郎がそのまゝ仰向に、兩足を空に、見事に倒れて轉んだのを誰も眼にした。

『切つた——切つた——』

見てゐたものは、誰も皆かう叫ばないものはなかつた。

頼盛はしかしそんなことに頓着してはゐられなかつた。またその兜に熊手が切られたまゝ懸つ



てゐるなどゝも思つてはゐられなかつた。振返りもせず、またその熊手を取らうともせず、三條を東へ、高倉を下りに、五條を東へ、六波羅の方へと一目散に走つて行つた。

『わあー　わあー』

と源氏も平家も共に聲を擧げた。合戰はまた始まつた。馬と馬とが向ひ合ひ、懸け合ひ、また重なり合つた。矢がそこからもこゝからも空に音を立てゝ飛んで來た。其處でも此處でも組討が始まつた。組み伏せて首を搔き切つてゐるものもあれば、搔き切つた首をそのまゝ馬につけて、もつと働かうとするやうにあたりを見廻してゐるものもあつた。かと思ふと、その向うでは互ひに名乘り合つてキラ〳〵と太刀を合せた。

名を惜しむ武士は蹈み留つて戰つたけれども、大將が既に六波羅に向つて引いたので、平家は次第に疎らになつて、さつきまでそこらに一杯飜つてゐた赤い旗も、いつか三條、五條の方へと總引きに引いて行つた。

源氏は頻に進んだ。誰もかれもこれで合戰は勝利だと思つた。義平の手の者が一番先きに進んで、齋藤、平山がこれに續いた。あとのことなどを顧みるものはひとりもなかつた。

義朝が金王丸を呼んで、信頼達が何をしてゐるかを見せにやつたのは、もう少し前で、平家の

藤内太郎家繼が、鎧に幾筋かの矢を受けながら、ちつとも怯まず、唯ひとり取つて返して、散々に戰つてゐる頃であつたが、それもある兵と刺違ひて討死し、前には最早遮るものもなくなつたので、味方の軍兵は少しも躊躇せず前進して、義朝の周圍にも最早多くは殘つてゐるものはないくらゐになつた。しかも金王丸はまだそこにその姿を見せなかつた。義朝は何遍となく後を振返つた。

流石に義朝にも背後が氣になり出したのであつた。このまゝ內裏をあとにして出て來ても好いのかと疑ふやうな心の芽が漸く萌して來たのである。さつき鎌田にさう言はれた時には、そんなことをすこしも思はず、無論、このまゝ六波羅に押寄せて一擧に勝を決するつもりでゐたのであつたが、さう言はれたゝめか、それともまた平家の引き方が餘りに迅速で、かねてそれと用意をしてゐたかのやうに思はれたゝめ、そのためさういふ心持が起つて來たのか、兎に角さういふ心の芽がひよつくりそこに首を擡げて來たのは事實であつた。

かれはあたりを見廻した。かれの眼は鎌田をさがした。しかしもはやその姿はそこらには見當らなかつた。義平と一緒にずつと先の方へと進んで行つたらしかつた。

『金王丸はまだ見えぬか？』



かれはかれの傍にゐる侍に訊いた。

『まだ戻つて參じませぬ！』

その侍はかう二度までも同じことを答へた。否、そればかりではなかつた。さうかうしてゐる中に成親や信賴の手に附いてゐた侍や雜兵共は、今まで守つてゐた待賢、郁方、陽明の三門を空しくして、皆な陣續として此方へと出て來た。

もう何うにもならないことを義朝は強く感じた。今になつては最早何も彼も遲かつた。今は背後のことを考へてゐたりなどするよりは、墓地に六波羅に向つて突き進むことが第一の急務であつた。是が非でも、六波羅に押し寄せて、一擧にそれを屠つて了はなければ、かれの爲事は完成したとは言へなかつた。かれは信賴のやうな若輩な、臆病な、思慮に乏しい、いざとなつては、全く賴み甲斐のない男と事を俱にしたことをつくゝ悔いた。

かれは馬をすゝめやうとした。

そこに金王丸は急いで馬を走らせて歸つて來た。

『右衞門督どのは、河原の方へ出てをられました——』

『河原とな？』

義朝はその耳を疑ふやうにかう強く反問した。
金王丸は馬から下りたが、
『さやうで御座りまする……。河原の此方のところにゐられました……』
『それにしてもその身は今まで何をしてゐた……。遅かつたではないか？』
『右衛門督どのが何處にゐらせられるかと思うて、あちこちと探してをりました。大庭にもゐらせられず、待賢門にもゐらせられず、さうかと申して、まさか紫宸殿の中にもお出あるまいとは思ひましたけれども、もしやと存じて、室ごとに探して歩きました。そこにもゐられませんので猶ほあちこちと訊ねましたれど、誰も存じてをるものは御座りませぬ。……』
『おろかものが？』
義朝は目をむくやうにしてかう言つたが、しかしそれは金王丸を罵つたのか信頼を罵つたのかわからなかつた。
『それから此方へ出て参りましたら、ある侍が、あの大將は河原で落支度をしてゐる——と言つて顔で教へて呉れました……』
『おろかな奴が？』義朝はまたかう言つたが、『それで原河にゐたか？』



『五六人の侍達と何かこそ〳〵言つてをられました。たしかに落ちる支度をしてをられたやうで御座いました。わく〳〵戦えてお出でした？』
『ふむ、臆病者が？』
『落ちるのを引留めて参りませうか？』
『放つておけ！　そんな不覺人はあつても役には立たぬ。却て邪魔になる。』
『でも……』
『いや放つておけといふのに……。それで内裏は何うした？　もう誰も守つてゐるものはなかつたか？』
『散らばつたまゝで御座いました。院の侍ももうそこに殘つてゐるものは御座りませぬ。臆病者がてこらにまご〳〵してゐるばかりで御座いました？』
『よろしい——進め——』
かう義朝は言つた。それは悲痛な聲の調子であつた。もはやそれより他にかれの出て行く道はなかつた。六波羅に攻寄せて勝利を得るまでは、千騎が一騎になつても合戦を續けなければならなかつた。かれは始めて運命の絶壁に面して立つたやうな強い佗しい衝動を感じた。

しかしかれは元氣よく馬を進めた。一時空はわるく曇つて、都芳門から此方へと出て來た時には、生暖かい風に混つて一陣の雨がバラ〳〵と降り注いで來たほどであつたが、それもいつの間にか通りすぎて、昨日とは丸で違つた暖かな日影が大宮通りの長い路を明るく照した。義朝は先陣の人達のあとを追ふやうにして、馬の蹄を轟かしつゝ急いでその路を向うへと走らせて行つた。

その時分には、先陣の人達は、既に三條から五條の方へと下つて六波羅への入口になつてゐる五條橋のところまで犇々と押寄せて來てゐた。今では誰も源氏の勝利を念じないものはなかつた。河原に添つたところには、源氏の白旗が幾旒となく日に映じて翻つてゐるのが見られた。

平家は五條橋を破壞して、垣楯をその前に搔き、赤旗を靡かして敵の攻め寄せて來るのを今やおそしと待つてゐた。しかしかうして相對して見ては、何方が何方とも言へなかつた。源氏が鬨の聲を擧げた時には、六波羅も一たまりもなく落されて了ひさうに見え、更に平家がそれに應じて鬨の聲を擧げた時には、いくら强い源氏でも、かうして嚴重に防いでゐる六波羅は、容易に攻め落すことは出來まいと思はれた。

それに源氏に取つて不利益であつたのは、最初からその二心を疑はれてゐた兵庫頭頼政が、その時三百騎を率ゐて、その向うの六條河原に陣を取つてゐたことであつた。否、それも源氏の先



陣が逸り切つた義平でなかつたならば、それを味方にする軍略もさだないではなかつたであらうけれども、義朝がそこにやつて來た時には、その二心に怒つた武士達が、既にその兵庫頭の手の者と矢を交へてゐるのをかれは眼にした。

最早散々に戰つた、賴政の三百騎をも驅け散らした。六波羅に寄せて來てゐながら、平家の館に入ることの出來ないのは無念だと言つて、究竟の兵五十餘騎、鎧を傾けて一齊に門内に躍り込んでも行つた。惡源太義平の奮戰には、敵も味方も眼を睜らないものはなかつた。

時の間に夥しい死屍がそこ〻に横たはつた。仰向けに倒れてゐるものもあれば、鎧を血に染めて打伏になつてゐる者もある。首を掻かれたあとの胴が、腹卷を着たまゝ兩足を投げ出して蹲つてゐるものもあれば、馬を射られて眞逆さまに倒れて、逸早く首を取られて了つたものもある。中には急所を射られて馬から落ちて死にかけた味方の武士のために、近寄つて來る敵を打拂ひ進んで行くものもあれば、矢種も皆な射盡し、弓も引き折れ、太刀も打折れたので、その折れ太刀を提げて、誰か太刀を持つてゐる者はないか、太刀さへあれば、今一合戰しやうものを……と思つてあたりを見廻してゐるものもあつた。かと思ふと、一度死んだと思つたものが急に立上つて、傍に倒れてゐる敵の太刀を奪ひ取つて、再び戰場へと向つて行くものもあつた。矢は縱横



に行きちがつた。あるものは鎧に當つてはね返つた。またあるものは、馬を射てそれと共にそれに乘つてゐるものを倒した。其處でも此處でも太刀を合はせる氣勢がした。

鬨の聲がをり〳〵起つた。二度も、三度も、四度も……。

しかし何うすることも出來なかつた。多勢の平家は、新手を入れ代へ引代へて勞れた源氏をその中に包まうとした。流石の義平も遂には門から外に引き退かなければならなくなつた。河を渡つて河原を西に引かなければならなくなつた。

それを見た義朝は、有無を言はせず、馬を河原の方へと進めることを命じた。かれは兩方の鎧を鳴した。かれの顏色は變つてゐた。

『驅けろ！　驅けろ！　河より西に引くのは源氏の恥辱だ！　河より此方へ引くよりもむしろ潔よく討死しろ！』

かう叫んでかれは一散に向うへと出やうとした。

義朝は最早事の何事であるかを知つてゐた。最早何うすることも出來ないことを知つてゐた。何も彼もすべて行くところまで行つた。突詰めるところまで突き詰めた。平家が引いたのは、それは內裏を戰場にせぬために、わざと打負けたやうに見せかけたので、それと知らずに、こゝま

でかれ等の出て來たのは、全くその策略に乘つたものであるといふことも何も彼も今ははつきりわかつた。最早潔よく討死するより他に何もなかつた。

『驅けろ！　驅けろ！　河原より此方に引くは源氏の恥辱だ！』

かう義朝はまた叫んだ。しかし馬はその言ふことをきかなかつた。いくら鐙を鳴しても、馬は思ふやうに先へは進まなかつた。

ふと氣が附くと、そこに鎌田が來てゐた。かれは向うの方で戰つてゐたが、それと聞いて急いで此方へとやつて來たのであつた。『殿！』かう言つて鎌田は馬から下りて、進まうと思つてゐる義朝の馬の轡のところへと立つた。

『殿！』鎌田はかう繰返した。

『正家か？　よう來た？　もはや義朝の最期ぢや。』

『殿！』かう言つた鎌田の眼の底には熱い涙が見えた。かれは轡の左右についてゐる綱附の鉄を堅く執つて離さなかつた。





『雜人の手に懸り、遠矢に射られて討たれ給はむよりも、一時は恥辱にても、暫し何處へなりと身を隱し給へ。その方が何れほど武將らしいか知れませぬ。それは口惜しいのはこの身とて同じこと、討死してそれで好いといふならば、その方が何んなにわけはないか知れませぬ。しかし、それでは多勢の長として、武將としての本當の覺悟とは申されませぬ。侍達のためにも、もう一度奮ひ立たねばなりませぬ。恨み重なる平家をいかにしても亡ぼさねばなりませぬ。それであるのに、殿に討死させては、誰がそれを致しまする……。御曹司とて、殿に離れては、どのやうに落膽なさるゝか知れませぬ。』かう言つて、鎌田は無理にその馬の首を河原の上の方へと向けさせた。

それは容易な業ではなかつた。義朝は二三歩來ては振返り、五六歩歩ませては馬の手綱をあとに引戻させやうとした。顏には無念の表情が隱すところなくあらはれてゐた。吊し上つた眉、光つた眼。義朝はをり〳〵堪らなくなつたといふやうに、兩鐙を馬の腹に當てた。馬はその度毎

に跳り上つた。

『正家！　無念ぢや！』かうかれは叫けた。

『殿！』

その度毎に、鎌田は鎌田で、その馬の轡のところにある綱附の釘を押へた。正家にも義朝の苦悶ははつきりとわかつてゐる。幼い時から主人として家來として一緒に生立つて來てゐるので、否、年も同年で、主從とは言へ、その一面には肉身も啻ならぬ親しい友情があるので――否、義朝のこれまでの生活に關しては、何も彼も、熱田の由良御のことも、常磐のことも、青墓の延壽のことも、堀河六條の邸の内に置いてある姫の母親のことも、何も彼もよく知つてゐる間柄なので、一層その苦悶がわかつた。それだけかれは何うしてもこのまゝ落させなければならないと思つた。『殿！』かう叫んだ鎌田の顏には、たとへ鞭で打たれても、弓の弭で突かれても、何うしてもその馬の首をあとには引戻させまいとする決心が見えてゐた。

『正家がついてをりまする……。正家が！？　決して惡くは……。わるくは……。恥辱になるやうには――』かう鎌田は途切れ途切れに言つて馬を頻りに押へた。

そこにやつて來たのは、義朝のためには伯父に當る陸奥六郎義隆であつた。義隆もつひ今まで



追重なつて來る敵の一方を押へて戰つてゐたが、もはや何うにも彼うにもならなくなつたので、それでそのまゝ其處へ引返して來たのである。鎌田は急いでそれを此方に呼んだ。

義隆にも事の何であるかがすぐわかつた。かれも一生懸命に鎌田に手傳つた。無理にもその義朝の馬の首を北に向けるやうにした。

『鎌田――』かう叫んだ義朝の眼からは、涙がほろりと落ちた。もはや何うにも彼うにもならなくなつたといふことが、戰場に驅け入つてもう一度勇ましく決戰して潔よく討死するといふことすら出來なくなつたといふことが、かれにははつきりとわかつて來た。否、何うしても免れることが出來なかつた運命――そのためには、七年も八年も苦しんだばかりではなく、父をも、幼い無辜な同胞をも斬つたりした運命――その暗い慘澹とした運命の前に立たなければならない身になつた事を義朝は強く感じた。かれは最早強いて馬の首をあとに引戻さうとはしなかつた。

三條河原に來て振返つた時には、平家の軍兵はあとからあとへと潮のやうて押寄せて來てゐた。

義朝は三條から少し此方に落延びたところで、六條堀河の宿所にゐる江口腹の今年十四になる姫の處分をさせるために、または其處にある肝腎な物を持つて來させるために鎌田を走らせ、また舟岡の常磐の宿にも、悲しい報告を送るために金王丸を急き立てゝ出してやつたが、それの歸つて來るのをじつと待つてゐる事は出來なかつた。踏留まつて戰つてゐる平賀、佐々木、須藤、井澤などの防ぎ矢も次第に盡きて、あとからあとへと平家は際もなく追ひ寄せて來た。

三條から向うに出て行く東國への道へはとても入つて行けなかつたので、爲方なしに、かれ等は眞直に川に沿つた路を北へ北へと落ちた。今朝までゐた大內裏も、あの淸涼殿の朝餉の間も、宜陽殿の本陣も、勇ましく戰つた掠の大木のある大庭も、何も彼も敵の手に委して了はなければならないと思つた時には、流石に義朝も胸が痛くなつて來るやうな屈辱と悲憤とを感じた。たとへ何んなに鎌田が止めたにもせよ、かうしてをめ〳〵と敵に後を見せて落ちるといふことは、武士として、または源氏の大將として、殊に恥辱であるやうにかれには思はれた。かれは何遍となく



見捨てゝ來た方を振返つた。

六波羅に攻め寄せたのは、あれはまだ午の刻を少し過ぎたほどの頃であつたが、思の外に時が經つたと見えて、今は申の刻近い日影があたりを照して、向うの山の峰に並んでゐる松の姿が、その明るい光線の中にくつきりと黑く行儀好くあらはれて見えてゐた。かと思ふと、鳥の翼のやうな形をした雲が、日影に半ば染まりながら、ふは〳〵と大比叡の肩のところへと靡いて行つた。

加茂の下社の森もいつかあとになつて、雪解の泥濘に夥しくわるくなつた凸凹した路が、時には葉の空くなつた榛の林に添ひ、また時にはさら〳〵と谷を穿つて流れてゐる川に添ひ、また時には五六軒かたまつてゐる見すぼらしい百姓の茅葺屋根や、霜に燒けて半ば赤くなつた菜の畑や、縱に芽を出し始めたばかりの麥の畑を右に左に、段々狹く狹くなつて行つたが、最初の林——その下には萱や薄の枯れたのに夕日がさして、風がガサ〳〵とそゞろ寒けく動かしてゐるその最初の林の角に來た時には、氣になつて氣になつて爲方がないといふやうに、義朝は長い間そこに馬を留めて待つた。

かれの周圍には朝長もゐれば賴朝もゐた。伯父の義隆もゐれば、齋藤も後藤も佐渡も波多も岡部も猪俣もゐた。皆な一日の合戰に勞れ果てたといふやうに、馬から下りて、林の中の萱原に仰

向けになつたり、樹の幹に身を凭らせたり、兜や鎧を脱いで體を休めたりしてゐた。さうかと思ふと、弓を杖にして、午後の日影に彩られた京の方をじつと名殘惜しげに眺めてゐるものなどもあつた。

平家が急追して來た曉には、こんな風にして休んでゐてはとても防ぎ了せることは出來ないにきまつてゐる。忽ち擒になつて了うにきまつてゐる。しかも疲れ果てた身には、そんなことを顧慮してゐる暇はなかつた。これからも何處まで落ちて行くか知れない身には、少しでも休んで置かなければならないと誰も思つた。義朝も後には馬から下りて、雜兵が持つて行つた床几に腰をかけた。

義隆は自分の持つてゐる糒を賴朝や朝長にわけてやつた。しかも皆なは默つてゐた。誰も口を開くものはなかつた。合戰に敗れたものゝ慘めさが今しもひしとかれ等を襲つた。

そこに馬の蹄の音がきこえて來た。皆なは言ひ合せたやうにそつちを見た。

『あ！　鎌田だ。』

『兵衛が戻つて來た。』

『無事で歸つて來た。』



誰も皆な喜悅の聲を擧げた。義朝は床几から身を起した。

鎌田は馬の腹帶や鬣まで泥濘のハネを上げながら、空腔の雜卒を一人先きに立てゝ急いで走らせて來たが、そこに、林の角に、義朝達が待つてゐるのを見ると、いくらか心を安んじたといふやうに馬の手綱を緩めて、並足で此方へと近寄つて來た。

義朝の前に來て、鎌田はそのまゝ馬から下りた。

『御苦勞ぢやつた！　何うした？』

『いや――もう。』

鎌田はかう言つたきりで、いきなりハラ〳〵と涙を流した。

『何うした？』

鎌田は何う言つて好いかわからないやうな氣がした、持佛堂の一間の悲しい光景！　かれはいきなり雜卒に負はせて來た包を取つて、それを義朝の前へと置いた。

『……？』

『これが千波か。』

鎌田は點頭いて見せたが、急に『殿！　いくら武士でも、これが泣かずにゐられませうか？

殿！　この身の入つて參つた時には、最早家には戰に怖れて誰も殘つてゐるものは御座りませぬでした。六條堀河の宿所は、丸で空家同前で御座りました。私は姫の上を心配して、あちらこちらと搜しましたが、持佛堂の方で人のゐる氣勢がしましたので、もしやと思つて、そつちに行つて見ますと、姫は唯一人、平生侍いてゐるあの婆の姿も見えずに、佛の前で誦經してをられました。この身の姿を見て何んなにお喜びになつたことか。しかし、殿！　この身はそれをお救ひ申すことは出來ないので御座りました。この身は戰に負けたことを手短にお話し申し、止むを得ず殿は東國に落ちさせられるが、それにつけても姫の身の上を一番御案じなされてゐらせられるといふことをお話し申し上げました……？　さう致しますと――』かう言つて鎌田は言葉をとゞめた。

此時には、朝長も賴朝も齋藤も岡部も皆その周圍に集まつて來てゐた。鎌田はまた溢れて來る涙を双手で拭つた。

『それで何うした？』

義朝は促した。

『殿！　この見苦しさをお許し下さい……。さう申し上げますと、あの姫はかね〳〵氣象もすぐれて殿に似てゐらせられましたが、何うで御座りませう！　姫は一人殘されて敵に搜し出され、これは義朝の娘よなど〻恥辱を受けるには忍びないから、鎌田、そちの手にかけて呉れ！　賴みぢや、かけて呉れ！　とかう仰せられたでは御座りませぬか。いや、つゞいて申さる〻には、それにしても、女と生れた身ほど悲しいことは御座らぬ。兵衛佐どのは、この身より一つ年下の十三でありながら、男ゆゑに軍にも出、お供も出來るのに、女と生れたばかりに、この身はかうした憂目を見るとは？　兵衛、そちの手にかけて呉れ！　そして千波はかうなつたから御心安う思召せ！　と申して呉れと、かう仰せられたでは御座らぬか。いや、そればかりでは御座りませぬ。殿もさういふおつもりで、この兵衛をおんつかはしになつたと申上げますと、一層滿足だと申されて、靜かにお經を卷き納め、佛前に向つて手を合はせられました……。殿！　この身はつとそこに參つた。刀を拔かうと致した。しかし殿！　何といふ悲しいことで御座つたか？　御產屋の中から抱き取り奉つて、養君として今までおふし立てた姫君を手づから刃にかけるとは？　これも保元に六條判官を斬つた報いか？』

『鎌田、その身も今になつて、そのやうなことを申すか――』

かう言つた義朝の顏は見る〳〵凄じい表情になつて行つた。

誰も沈默した。

暗い、慘めな心持があたりを佗しくした。朝長も頼朝も見ないやうにして父の顏を見た。鎌田も低頭いたまゝ暫しは口を開かなかつた。

『こら！　此方に見せよ！』さう義朝が包を持つた雜卒に向つて言つたのは、猶それから暫らく經つた後のことであつたが、その時にはもはやその凄じい表情はその顏から消え失せてゐた。雜卒は恐る恐るその包をその前へ持つて行つて置いた。

『殿！』

と鎌田は言つた。かれは堪へ兼ねたやうにその前に躙り出て、その包の結目をその手で解いた。青褪めた姫の顏――半ば眼を明けて口を堅く結んだ、鼻筋のきりゝと透つた、何方かと言へば肉附きの好い丸い顏が、慘めな姿になつてそこにあらはれた。長い黑髮はその斬るのを惜まれでもしたかのやうにそのまゝぐる〳〵と卷かれてあつた。『こんな姿になつて了はれた！　こんな姿に……こんを姿にするために長い間おふし立てはしなかつたのに……。殿！　武士にも似ぬ女々しさを許して下され……』鎌田の涙はその姫の首の上にはら〳〵と落ちた。

『……』



義朝はじつとそれを見た。何が言はうとするやうに口を少しゆがめたが、しかもそこからはひとつの言葉も一つの音も出て來なかつた。娘の死を悲しむといふ以上に、合戰に負けたといふことが、多年恨を抱いてゐた平家に負けたといふことが、その腸を九廻させずには置かないやうに見えた。

暫く經つた。

『よし、向うに持つて行け！』

かう遂に義朝は言つた。かれはもつと他のことを言ひたかつたけれども――何かもつとやさしい父親らしいことを言ひたかつたけれども、さうした言葉は愚痴にならずには一言もその口から出て來なかつた。かれはさういふより他爲方がなかつた。

姫の首は朝長や頼朝のゐるところへと持つて行かれた。誰も彼も泣いた。かれ等は鎧の直垂の袖を當てたまゝ暫しは面を擧けやうとはしなかつた。そこにまた蹄の音がして、今度は井澤や須藤等と今まで防ぎ矢をしてゐた義平がやつて來た。

『父上！』

かうかれは叫んだ。

皆なは言ひ合せたやうに顔を擧げて其方を見た。

『父上はまだ此處にお出でになられたのか。もつともつと先へ落ちられたと思つてゐたのに……？　此處までは、此處までは最早平家も追つては參るまじけれど……一刻も早う……』かう言つたが、急にそこに何事かあつたのに氣が附いたらしく、馬から下りて『何と……？　千波の首？　これは？　兵衛が斬つて參つた？　ふむ？　さうか、さう申したか。敵の恥かしめを受けるよりは斬つて呉れと言つて手を合せたか……。無念だ！　これも皆な平家のためだ！』かう言つて義平は拳を握つた。かれは今わかれて來た京の方をじつと口惜しさうに眺めやつた。

『井澤は何うした？　須藤は？』

さうしたことに長く拘づらつてはゐられないといふやうな調子で、やがて義朝は源太に訊いた。

『須藤は敵三騎擊ち取つて、潔よく討死しました。井澤はこの身が落ちて參る時、まだ頻りに戰つてをりました。』

『源氏にはさういふ勇しい弓取ばかり多いのに、かうして合戰に打負くるとは、これも皆この身の不運ぢや……』義朝はかう言つてまた目をしばたゝいた。そこにまた蹄の音がきこえて來た。



金王丸が歸つて來たのであつた。

金王丸は馬から下りて、義朝の前に行つて、舟岡での話をした。しかし義朝はそれを落附いて聞いてはゐられないやうな氣がした。途切れ勝なその話の中にもかれは常磐の引被いで泣き沈んださまを、母親の泣くのを見て三人の子供達が父は何處におはすと言つて頻りに縋り附いたさまを、または一刻もさうしてはゐられないと言つて慌てゝ身を隱す支度に取懸つたさまをはつきりと眼の前に浮べることが出來た。かれは總身が熱くなつて來るのを感じた。

『それで何處に身を隱すと申してをつた？』

『大和の龍門にでも行かなければ、とても隱し了うすることは出來まいと申してをられました。』

『ふむ、大和の龍門――？』そこには常磐の父方の伯父が世を遁れて住んでゐるのを義朝はかねて聞いて知つてゐた。しかもそれは大和でもずつと奥で、女の身では三日も四日もかゝらなければならないところであるといふことをも知つてゐた。

『持つて行つたものはわたしたか？』

『たしかにおわたし申し上げました。それから、寶のあるところも、すつかりお話申し上げま

した……』

『それで、この身の言つたことを申しつたへたのか？』

『さう申し上げました……。何處へなりと暫し隱れてゐませ！　少しにても心安くなりなば、必ずおん迎へに參上いたすべければと申上げました……。今若どのが袖に縋つて、父君は？　と頻りにむづかつてをられましたが、それには、譜代の御家人達を憑まれて、父上は東の方へと行かれたと泣く泣く言ひなだめてゐられました……。』

『……』

何か言はうとしたが、しかも言はずに、義朝は暫し深い沈默に落ちた。いろ〳〵なものが忽ちにして溶けて流れて行つて了つたことを思はずにはゐられなかつた。

義朝は急にはつとしたやうにして身を起した。さういつまでもこんなところに躊躇してはゐられなかつた。『鎌田！　それでは好いか？』かう言つてかれは雜卒の馬を引いてゐるところへと歩み寄つた。かれは鎧に足をかけてひらりと乘つた。

皆なは急いで鎧を着けたり兜を被つたりした。朝長も賴朝も馬に乘つた。鎌田は姫の首を元のやうに包に結んで、一人の下侍を呼んで、かねて知つてゐる東山邊の寺へそれを持つて行つて、



ねんごろに弔つて埋めて貰うことを言付けた。

最早あとには思ひ殘すことはなかつた。それは一人々々の身になつて見ればいろ〳〵なことがあつたらう。妻子をあとに殘して來たものもあるだらう。馴染を重ねた女に一言のわかれも告げずに此方に來て了つたものもあるだらう。親や同胞を棄てゝ主に從つて來たものもあるだらう。否、朝長などは中でもさうしたつらい思ひに惱まされてゐるひとりであつたには相違ない。しかし今は何うすることも出來なかつた。行くべきところもまだそれとは定つてはゐないけれども、その定つてゐないところに向つてかれ等は何處までも何處までも落ちて行かなければならないのであつた。

弦の切れた弓や、矢の一二本しか殘つてゐない胡籙や、泥濘のハネの一面にあがつた馬の腹帶や、重さうに後に負はれた兜や、大童になつた髮や、ところどころ血に染つてゐる鎧や脛當や、馬と馬との間に脛もあらはに走つてついて來る雜卒や――さういふ一行が斜に夕日に彩られながら、ごた〳〵と一かたまりになつて谷に添つた路を次第に深く深く入つて行つた。谷は幾度となく屈曲した。水の鳴る音が遠く足下にきこえるやうになつた。

『何うした？』

かう言つて一行が立留つたのは、それから少し行つて、崖になつてもう一度曲つて行つたところであつた。深く穿たれた谷の向うには、大比叡が裾に一ところ赤く殘いだ絶壁を高く高く聳えさせてゐて、その少し先のところから、山越に叡山に登つて行く間道がわかれて行つたゐた。

『え？　何うしたと？　山法師が待かけてゐると？』

『え、何うした？』

かう誰も彼も言つた。それと知つた一行は何としたら好いかと思つた。平生なら百人が二百人でも山法師など蹴散らして通るのに手間も入らなかつたのであつたけれども、一日の戰ひにひたと疲れ切つて了つてゐる身には、とてもさうしたことは望まれさうにも思へなかつた。一行は喪心したやうになつて皆なそこに立盡した。

『だから、申さぬことではない。落ちたとて、果してそれが遂げられるか何うかわからないと



言うたのはこの事ぢや。鎌田が達つて諫めるので、此處までは落ちのびて來たが、さうした山法師の手にかゝつて果てやうとは思はなかつた！　これと知つたら、あの六波羅で敵を前にして潔く討死するのぢやつた！』後には義朝すらこんな弱音を立てた。

一行は思案に餘つた。智慧者と言はれた鎌田にすらこれと言つて好い考へは出て來なかつた。向うには、千束が崖の狹い路を扼して、西塔の山法師が六七十人、僧衣に腹卷といふ扮裝で、長刀を持つたり鎗を持つたりしてかたまつて待つてゐるのが此方から手に取るやうに見えた。崖の向うの百姓家の五六軒かたまつてゐるあたりにも、五六十人は集まつてゐるらしかつた。

皆なの困つてゐるのを見て、齋藤別當實盛は、やがて、そこに出て來て言つた。

『よろしい――こゝは此身が引受けた。いかにもして通して進ぜる！　此身について來られよ。そしてこの身が路をあけるほどに、それと見たら、一散に馬で蹴散らして通られよ。』

實盛は馬から下りて、兜を脱いで、それを手に提げたまゝ、亂れた髪を面に振りかけつゝ、さも自ら信ずるところがあるやうに、臆する色なく山法師等の集まつてゐる方へと近寄つて行つた。

あるところまで行つて、實盛は聲をあげて言つた。

『そこに集まつてをらるゝは、山のおん僧と見たが、あやまちをなしたまひぞ。こゝに來たも

のは、決して決して大將達では御座らぬ。今日の戰ひの大將は右衞門督殿も左馬頭殿もあるひは內裏、或は六波羅で皆な討死なされて了うた。それには決して疑ひは御座らぬ。疑はしいと思はば誰にでもきいて見られよ。こゝに來たものは、そんな立派な侍や大將では御座らぬ。諸國の假武者どもが耻をも忘れて妻子を見んために本國へと落ちて行くものばかりぢや。こんなものを打ち留められても罪作りにこそなれ——何の手柄にもなりはせぬ。それよりも具足を召さるゝとならば、物の具はいくらにても參らせんほどに、此處を通しては下さらぬか？』

山法師達は始めはじつとこれを見てゐたが、やがてその重だつたものが寄り集まつていろ〳〵と詮議を始めた。皆なは言つた。成ほどこれは大將ではなさゝうだ。大將なら、物の具でも、馬でも、もう少し立派できらびやかでなくてはならない。夫にしては、これはあまりに汚たい。大將でないものゝ首を擧げても、そんなものは邪魔にこそなれ、手柄にはならぬ。

『さういふものなら、通してやるほどに、物の具だけは置いて行け！』

山法師の一人は出しやばつて言つた。

『通して下されるか？　それは忝けない……。しかし具足を投げるにしても、おん僧たちは大勢だし、この身等は小勢だから、一人づゝ萬遍なく進ぜるにはとても足りない。草摺を切つても



足りない。だから一つづゝ投げるほどに、それを皆なして取り勝にして下され！』

かう實盛が言ふと、そこに出て來た若い一人の大衆が、

『よし、よし、それが好い……。さうする方が好い。銘々取り得にする方が好い。』

あとの方にゐた山徒等も、それと聞いて皆な此方へと出て來た。打物などは其處に置いたさゝにして。

『いゝか？　よろしいか？』

實盛は成べく山徒達の注意をそこに集めるやうに、手にした兜を高く捧げた。山徒は我勝にとその周圍に集まつて來た。それは丸で法成寺の本堂の建前の時に、投餅に集まつてひしめき來る童どもと少しも違つてはゐなかつた。

『いゝか？』

『早く投げろ！　投げろ！』

『いゝか？　よろしいか？』

それは一面あとにつゞいて來る人達に對する相圖の懸聲でもあつた。好い時を見計つて、實盛はその高く捧げた兜をかはと投げた。

唯その一瞬間であつた。兜を我先に得やうとして山徒等のひしめいてゐる間に、三十二騎の兵共は、今こそ時ぞと打物を拔きつれ、兜の鍬を傾けて、一散にその山徒の群の中を、蹴散し斬り散して通つた。これは！　と山徒等は思つたけれども、しかもその時にはもはや何うにもならなかつた。それに慌てふためいてゐたので、その敵の人數のどれだけあるかをも十分に知つてゐなかつた。あとでは、俄に長刀を取直して、それ遁すな！　と言つて追懸けて來たものもあつたけれども、實盛が大童になつて、大の中指取つてつがひ、大音あげて『敵も敵によるぞ！　山坊主の癖に邪魔ひろぐな。左馬頭義朝の郎黨に、武藏國の住人、長井の齋藤別當實盛とはわが事だ。さあ、留めやうと思ふなら寄つて來い。いくらでも寄つて來い。手柄のほどを見せてやる！』と言つて、引返して弓の弦を鳴したので、山徒等は大衆の中には弓取りはなし、これはとてもかなわぬ！　と思つたと見えて、遠くで吼える犬の群か何かのやうに、わい〳〵と騒ぐばかりで、あとから追つて來るものはなかつた。

實盛は殿をしつゝ靜かに一歩一歩退いて行つた。

一行に追附くと、

『うまくやつた！　おぬしは弓取の剛の者とばかり思うてゐたのに、智慧者ぢや。張子房ぢ



や……』

かう義朝は喜ばしさうな表情をして言つた。

『あいつらは、僧とは名ばかり、慾の深い强盜ばらゆゑ、慾にさへはめてやれば、欺くことはわけはありませぬ。旨く行つたのが面白かつた！』

『旨く行つて好かつた！　何うなることかと思うた。あそこに出てゐたのは七八十人だが、まだ此方の方に澤山をつた……。すべてで二三百人はをつた。長井の別當の才略がなうては、とてもかう易々と無事には通れなかつた……』鎌田すらかう言つて褒めたが、『それにしても早く、一刻も早く、この山を拔けねばならぬ。ぐず〳〵してはをられぬ！』かう言つて自分から先に立つて馬を走らせた。

一行は皆なそのあとに續いた。路は谷に添つたり崖に添つたり、または屈曲したりして、次第に山深く入つて行つた。夕日が山と山との間に深く長く線をなしてさし入つて來てゐるのを誰も眼にした。

八瀨の松原に來懸つた時、あとからだしぬけに『左馬頭！　左馬頭！』と呼ぶ聲がした。

その眼を疑つたのは振返つた義朝ばかりではなかつた。そこには侍を伴れた右衛門督信頼が、

弓を持つたまゝ馬から下り立つて此方を見てゐた。
義朝も鎌田も爲方なしに馬を留めた。
『左馬頭！　話があるによつて、先づ馬から下りては呉れぬか？』
氣味のわるい笑ひを面に湛へながらかう信頼は言つた。
義朝は腹立しくは思つたけれども、さう言はれて見れば、流石にそれを振切つてそのまゝ馬に鞭を當てゝ素通りして行くわけにも行かなかつた。かれも鎌田も馬から下りた。
『話は何んぢや？』
雜卒の持つて來た床几に腰を下してから義朝は不機嫌に訊いた。
『何といふ話でもない。左馬頭は軍に負けて東國に落ちる時には、この右衞門督をも一緒に伴れて行つて呉れるというたではないか！　今か來る、今か來ると思つて待つてゐたのぢや……』
『左馬頭はその言葉を忘れて了うた！』
義朝の面には皮肉な腹立しげな色が上つた。
『忘れた？』
『この身がもしさう言つたとすれば、それは今の右衞門督ではあるまい。元の右衞門督だら



う？　合戰の前の右衞門督だらう？　日本一の不覺人、かうした大事を思ひ立ちながら、一軍もせずに、ぶる〳〵怯えてゐるやうな、さういふ右衞門督に言つたことは忘れて了うた！』
『何といふ？』
『何といふも彼といふもない？　御身のやうな不覺人を相手にしたばかりに、そのやうな臆病者とは知らなかつたばかりに――』いろ〳〵なことが一時に思ひ出されて來て赫となつた義朝は思はず威丈高になつて、『そればつかりに、誰も彼も皆なこのやうな眼に逢うた！　東國へ伴れて落ちよとはよくも言へた！　これでも受けろ！』かう言つてかれは手にしてゐた鞭で信頼の右の頰をしたゝかに打つた。
信頼ははつとしたが、口の中で何かぶつ〳〵言つただけで、さうした屈辱に對しても、敢て反抗しやうともしなかつた。かれは臆した體でぶる〳〵身を戰はせながら、その打たれた頰を頻りに撫でさするやうにした。
しかし伴について來てゐた傅子式部大輔助吉は、流石にそれを默つて見てはゐられなかつた。かれは聲を勵ました。
『何者ぢや？　督殿をかく申すは？　これは督殿のみの罪ではない。其方にも責めがあるのを

忘れたか？　其方が剛の者ならば、軍に負けて東國に落ちるやうなことはよもあるまい。軍に負けたのは、源氏が弱いからぢや。それなのに怒りを人に移して督殿に鞭を加へるとは？　無禮も無禮、謝すればよし、さうでなければ、此方にも考へがあるぞ！』

『何を小癪な？』義朝は切齒して、『誰かある？　あの男の口に物を言はせな？』

後に控へてゐた侍が二三人バラ〳〵と立つて行かうとしたのを、そこにゐた鎌田が留めた。

『殿！　それどころでは御座らぬ。もはや一刻も早う參らねばなりませぬ。こんなことに拘泥つてゐて敵が續いて來たら、何となさる？　いざ、參りませう！』かう言つて鎌田は無理に義朝をそこから引離して馬に乘せた。



## 一八

ぼんやり見送つてゐる信賴等をあとにして、一行はまた一散に馬を走らせた。

半ば崖にくつ附いてゐるやうな半ば谷に俯してゐるやうなわびしい山村――低い板葺の屋根に石を載せたり、山から來る筧にちよろ〳〵と綺麗な水を落してゐたりする山村が、やがて歷落としてその前にあらはれて來た。向うの竹の藪の緣では、百姓の爺が頻りに大きな木の根に斧を振り上げてゐるのが長くさし込んで來てゐる夕日の影にそれと見えてゐたが、蹄の音高く一行が並んで通つて行くと、その爺はその氣勢に心を惹かれたといふやうに、その斧の手をやめて、急いで街道の方へと出て來た。あとからその孫らしい汚ない十二三の男の兒も出て來た。

『落武者ぢやな？』

『さうぢやな！　大勢落ちて來るな！』

『ほ、今度のは大將ぢやぞ。それ、あの眞中のがさうだ……』

その百姓の爺ばかりではなく、そこの路の角、かしこの家の前、または折れ曲つて行く街道の

向うの方などに、互にかう囁き合つて立つて見てゐるものが澤山にあつた。今日の合戰のことは誰いふとなく既にこの山の中にも知れわたつてゐるらしく、もしその人數が多勢でなく、自分の力で何うにかなるものなら、物の具なりとも剝ぎ取らうとして、七八人も隊を組んでそこらに出てゐるものも中にはあるらしく見えた。竹の尖を削つてそれを持つて立つてゐるものなどをもそこ〻に見かけた。

かと思ふと、そこに、家の入口にひとり出て、こんなに澤山に通つて行く馬や武者に眼を睜つたといふやうにしてじつと見てゐる七八歳の女の兒を、慌て〻出て來た女房が『お〻こわ！　おこわ！』と言つて、急いで奥につれて行つたりなどした。またあるところでは、痴呆としか見えない一人の男が、いやにや〳〵と笑ひながら、その一行の通つて行くすぐ近くに、その物の具に觸れはしないかと思はれるほど近くに、ぼんやり立つてじつとそれを見送つてゐるものなどもあつた。

兩側の山は次第に近く狹く迫つて來てゐた。もはや大比叡の裾もそれと區別することが出來なくなつてゐるばかりではなく、大原から鞍馬の方へかけての山の影が、夕暮近い空氣に包まれて落ちて行くもの〻心をさびしく塞ぐやうにした。かれ等の落ちて行く路は、それは何處まで行つ



たら盡きるといふあてもなく、又その向うにかれ等の艱難と困惑と疲勞とを慰めて呉れるものが待つてゐるといふでもなく、何處までもそれの續いて行つてゐるかぎり、かうして鞍や鎧に取附いて走つて行かなければならないといふことも考へた時には、誰でも深い深い物悲しさとつらさと佗しさとを感ぜずにはゐられなかつた。ことに、朝長は内裏の藤壺の中に置いて來た玉藻のことを考へてゐるので、ともすれば、涙があつく體中に漲つて來るやうな悲しさを感じた。

一度離れた谷川がまた近くに鳴つて、今度はその向うに大きな丸坊主のやうな雪の山が前を塞ぐやうにその半身をあらはして來てゐた。大比叡の横川の御堂のあるあたりと思はれる山の半面にも、微かに夕日がさし殘つてゐるのを誰も眼にした。路は山に圍まれてゐる小さな平地と、そのところどころに散點してゐる屋根の低い百姓家と牛を二頭も三頭もつゞけて引いてゐる牛飼の男とを下にして、次第に山脈の半腹をぐる〳〵廻るやうに向うへと出て行つてゐた。

## 一九

大きな坂に懸つた時には、一行は皆な手綱を緩めて並足になつた。先頭に立つたのが波多次郎義通で、高角の兜に五六本矢をさした胡籙が靜かに動き、その次ぎに猪俣小平太、三浦荒次郎義隆、大章のまゝに栗毛の馬に鞭を當てた齋藤別當實盛、鹿毛の馬に鞍置かせた熊谷次郎直實、それにつゞいて鎌田の葦毛の馬や、義朝の鍬形の五枚兜や、朝長の白星の兜や、頼朝の栗毛の馬や、その後に混雜と空脛の雜卒が五六人、一番あとには、鹿毛の馬に跨つた惡源太義平が、終日の戰ひに勞れ果てたといふやうに、こくり〳〵と馬睡りをしてゐるのが、長い繪卷でもひろげたやうに赤ちやけた絶壁に添つた路にくつきりとあらはれて見えて、丁度、江文峠の低いところに落ちやうとした夕日が、斜にその最後の光線をその長い列の上に漲らしてゐた。

左の方には、北國道――それを眞直に行けば葛川谷だの栃木谷だのを通つて若狹の國の方へと行かれる北國道が、矢張、山の半腹をうね〳〵と通つて、窮まりなく起伏してゐる山脈の向うにかくれて行つてゐるが、さつき大原の集落を通りすぎて、その二つに岐れる路のところに來た時

その軌れを取るべきかに就いて、一行の間にいろ〳〵と異儀が出て、暫しはそこで躊躇してゐたことを誰も思ひ出した。そして波多の北國行がたうとう鎌田の東國行に負けて、兎に角籠華を越して湖水の岸まで出て見やうといふことになつたのである。

『あそこまで行けば、舟がある。それにそこからなら、東江州にわたるのはわけはない。』

かう義朝もその時言つた。かれは、まだはつきりと口に出しては言はなかつたけれども、その心が美濃の方に偏つて行つてゐるのを鎌田は前からそれと推してゐた。それは北國に落ちて行けば、危險はないにきまつてゐたけれども——不破の關を通らなければならないといふやうな心配もなくて濟んだであらうけれども、しかし鎌田にしても、出來るならば、何うかして美濃から尾張の方へと落ちて行きたいと思つた。鎌田は自分の妻のゐる知多のことなどをも頭に浮べた。

長い坂が盡きて、いよ〳〵これから籠華にかゝらうとした時、先頭に立つた波多は、思はずはつとして馬を留めた。

『何うした〳〵』

『何か事か？』

『何と……？　また山法師がそこに出てゐると？』

さうした言葉がそれからそれへと傳はつて行つた。

折角虎口を遁れて來たと思つて喜んでゐたのに、またそこにさうした狼の顎が開かれてあらうとは！　一行はうんざりして了つた。皆なは一時そこに固つて顔を見合せた。

先に行つたものゝ報告では、そこには道に逆茂木が引いてあるばかりでなく、ところに由つては、垣楯すら搔かれてあるといふことであつた。横河から山越しに一直線にやつて來てゐる山徒の群の中には、弓取もかなりに多勢雜つてゐて、人數もさつきより決して少いとは言へないらしかつた。

『爲方がない？　蹴破つて通る他はない！』暫く經つたあとで、義朝はかう意氣込んで言つた。

『何あに、いざとなれば、山法師など……、』齒にも立たぬ。百や二百、蹴散らすに手間は入らぬ！』

かう熊谷次郎直實も合せた。

『それでは、一番先に、徒歩で行つて、逆茂木を取つて、すぐそのあとから馬で驅ける！　さうするが好い……。それより他に手段はない……。』これは平賀四郎義信だ。

皆な馬から下りて、その峠の方へと登つて行つた。



峠と言つても、そこはさう大して高くはなかつた。一町ほどで其逆茂木の縱横に置いてあるところへと達した。そこに取附くや否、かれ等は一生懸命になつて、その邪魔になる木や石や木の根を取除けた。熊谷と平賀と三浦とが先に立つて働いた。

垣楯を搔いて山徒の集まつてゐたところは、その道から右に少し入つて、小高くなつてゐるやうな位置にあつたが――そこから道を通つて行くものを俯して射るといふやうな位置になつてゐたが、邪魔になる逆茂木を取除いて、馬をそろへて一行が驅け下りやうとした時、そこから萬弩が發しでもしたかのやうに、凄じい弦の音と共に矢が急雨のやうに飛んで來た。

中でもそのすぐ前のところを打たせてゐた陸奥六郎義隆の周圍に強く引かれた矢が二三本飛んで來たと義朝は思つたが、あツ！　といふ叫び聲と共に、馬に跨つてゐたその義隆の體が中心を失つて、鎧兜も着けたまゝ、毬のやうに左に偏つてのけざまに落ちたのをかれは眼にした。そればかりではなかつた。義朝のすぐ傍にゐた中宮大夫進朝長の右の股にも、一本の矢がすさまじく音を立てゝ飛んで來て、ぐさとばかりに深く入つた。朝長は鐙を踏みかねて危ふく馬から落ちさうになつた。

『中つたな？』

ちらりとそれを見た義朝は、『だから、平生言はぬことではない。かういふ時には、いつでも鎧づきをして裏かゝすな！　と言つてゐるではないか？』

朝長はその射つけられた右の股の矢を、いきなりかなぐり捨てゝ『何あに、大したことは御座りませぬ。それよりも、陸奥の六郎殿こそ痛手を負はせられた！』

かう言つたまゝ、朝長は別にそれほどのことでもないといふやうに、急いで熊谷や三浦のあとを追つて走らせた。義朝もそれに續いた。一行はやがて崖のやうなところまで來て暫し留つた。

義隆の落ちた場所へは、四五騎がそこから取つてかへした。しかし、首の骨をひたと射つけられたかれは、夥たゞしい出血で、とても何うすることも出來なかつた。義隆は苦しい呼吸の下から一刻も早く首を取つて呉れることを頼んだ。

その首を見た時には、流石の義朝も興奮した。物のわかりがよく、親切で、世話好きであつた肉身の伯父だけに一層夥たゞしく興奮した。

『軍に負けて落ちるといふことは、武士の習だ……。これは何うも致方がない。それを坊主の身として、慈悲を施すのがそのつとめである坊主の身として、助けなくとも好いが、それを路に要して物の具を取るといふのは、憎んでも憎んでも憎み足りない奴原だ。これも後の世への見せ

しめだ！　一人も殘らず討取つて了へ！』

この大將の命令は、一行に新たに勇氣を振ひ起させた。三十餘騎の人達は、轡を並べて、その崖の下から躍り出した。

小高いところに垣楯を掻いて、機會を見て、突擊してゐた山徒達は、思ひも懸けない逆襲に逢つて、慌てゝ長刀や槍を取直した。

しかし山徒は、馬はなし、鎧兜はなし、さう不意に近くに寄せられては、何うすることも出來なかつた。折角掻いてそれに據つてゐた垣楯も時の間に滅茶々々に破られて了つた。一刀あびせかけられてのけざまに倒れて了ふものもあれば、馬の蹄に驅けられて一擧に向うの谷に蹴落されて了ふものもあつた。いくら疲れてゐたにしても、武士は武士だ。いざとなつては、僧衣に腹卷をして長刀を持つた山法師などの到底及ぶところではなかつた。

『憎い奴原！　慈悲を第一にすべき坊主が强盜の眞似をするとは何事だ！　思ひ知れ！』

始めの勢ひに似もやらず意氣地なく逃げ廻る山徒を、かう叫んでは割り附けて追廻し、追廻しては割附け、瞬く間に三十餘人を斬つて捨てた。中でも、岡部六彌太が相手にして斬つて捨てたのは、山徒の中でも大將分であつたと覺しく、それと知ると、皆なかういふ企畫をしたことを悔

いたものゝやうに、長刀や槍を捨てゝ、一散に向うの谷から谷の方へと逃れて行つた。あとには血に染みた山法師の死屍とバラ〳〵になつた垣楯とが散亂した。

『手答へのない奴原！』

實盛はかう言つて、そこに馬を立てたまゝ、あはゝと大きく笑つた。

それでもかなりに手間は取つたらしく、氣が附くと、あたりはいつか全く暮れて、もはや西の山の端の空に殘つてゐる夕日の餘照もなく、ついさつきまで薄暮の色の中に浮彫のやうに行儀よく並んでゐた山の松も、いつか暗い夜の空氣の中に深く深く沈んで行つて了つて、唯、近いところにある山の影の黑く夜空を劃つてゐるのが、それと微かに指さゝれるばかりであつた。『熊谷殿か？』『岡部殿か？』あるところまで逃げる山徒を追つて引返して來た武士達は、互にこんな風に聲をかけ合はなければならなかつた。

『馬鹿な奴等だ！　碌々合戰の業もわきまへずに、物の具を奪はうとは？　飛んで火に入る夏の蟲とはあゝいふ奴原のことだ！』

『それにしても、陸奥の六郎殿を射させたのは無念ぢやつた。あんなに勇ましい、落附いた、老功な武士はなかつたのに……』



『本當ぢやな。惜しいことをしたな……』

『それにしても、腹が減りをつた！　何か食ふものは御座らぬかな？』これは熊谷だ。

『もはや糒も何も持つて居らぬのか？』

『すつかり無うなつた？　村に行つたら、何かありさうなものだが……』

こんなことを言ひながら、かれ等は轡を並べてもとのところへと戻つて來た。

『何うした？』義朝ば訊いた。

『意氣地のない奴原で御座つた！　三十人ぐらゐ打取つたか？　後には皆な恐れて逃げた！　岡部殿が大將らしいものを討つた……。』

『それは手柄ぢやつた……。陸奥殿の仇が打てたといふものぢや。皆なの手柄を喜んで御座るだらう？』義朝は悲しさうな調子で言つた。

一本の松明の火の前には、細い暗い路がまた續いた。幸にそこらの案内を知つてゐるものが雜卒の中にあつたので、それをたよりに、時には絶壁に添つたところを、時には丘のやうになつてゐるところを、また時には百姓家の低い屋根の夕闇の中に黑く見えてゐるやうなところを次第に下へ下へと下りて行つた。が、やがて、白く茫とした湖水がその向うにひろ〳〵と展げられて來た。星がキラ〳〵と光つた。

湖の縁に出た時には、比良おろしが強く吹いて、絶えず岸を洗ふ波がたぶ〳〵と音を立てた。

街道には、灯がチラ〳〵と遠く連らなつて見えてゐたが、しかもそこらには休むところも物を食ふ家も何も見當らなかつた。一行は堅田まで行かなければならなかつた。

誰も皆な夥しく勞れてゐた。それも疲勞だけならば、まだ何うにかなつたであらうけれども、飢が——一日碌に物を食はなかつた飢が、堪へ難くかれ等を襲つて、馬を走らせるにすら十分に手綱を取ることは出來ないくらゐだつた。馬も夥しく勞れてゐた。

それでも酉の刻を少し過ぎた頃には、何うやら彼うやらかれ等はその堅田の人家の灯を、黑く闇を隈取つて連つてゐるさびしい宿驛を、左に暗くひろ〳〵とひろがつてゐる湖水を、雜卒の一人の案内によつて兎も角も一休みして行く家を發見した。

それは湖水とは反對の側の大きな家屋だつた。何でもその雜卒の一人が知つてゐる家だといふ

ことで、始めは大きな犬が幾頭となく出て來て嚙みつくやうにすさまじく吠え懸つたが、段々話がわかつたと見えて――後にはその門を開いて、皆なをその家の庭の中へと入れた。

幸に、そこらには今日のことはまだ本當に知られてはゐなかつた。それといふのも、この街道はほんの北國道の支路で、一日に通る旅客の數も少く、いろ〳〵な事を言ひ觸らして行くものはあつても、誰もその眞相を傳へて行くものはないからであつた。そこの家の主の爺にしても、申の刻の頃に、源平の合戰が京にあつたといふことをちらりと耳に挾んだばかりであつた。しんとした湖畔の宿驛は俄かに馬や物の具や雜卒や松明などで賑やかになつた。

義朝は落附くにつれて、伯父の義隆の死を深く深く悲まずにはゐられなかつた。かれはその首をそこに持つて來させて合掌した。

『八幡殿の御子の名殘は、もはやこの伯父ばかりであつたのに……。またこの伯父は何んなにこの身の力になつて呉れたか知れなかつたのに……』

誰に言ふともなく、感慨無量といふやうにして義朝は言つた。

『本當に――惜しいことを致しましたな……』

傍にゐた鎌田もかう言つて、じつと深く考へに沈んだ。鎌田にしても、この義隆のことはかな

りよく知つてゐた。保元の時にも、義朝のためにその片腕になつて働いたし、今度の合戰にも、何方かと言へば反對であつたにも拘らず、義朝のために十二分に力になつて働いて呉れた。それに、この伯父と甥の間にはそれ以上に切つても切れない深い肉身の親しさが深く〳〵結ばれてあつたのである！　それを知つてゐるだけに、鎌田には一層義朝の悲哀がわかるやうな氣がした。

『かういふところで伯父を亡くさうと思はなかつた！　この伯父は多い同胞の中でも、一番八幡殿に似て居られて、鼻つきや眉の具合などは本當にそつくりだと言はれてゐた！　陸奥六郎を見ると、義家がまだ生きてゐるやうな氣がすると先きの法皇も仰せられた！　その伯父をかういふところで山坊主の手にかゝつて討たせうとは？　これも皆なこの身の至らぬためぢや！』かう言つて義朝は涙を鎧直垂の袖で拭いた。

義隆の首の前には、義平も頼朝も三浦も平山も皆な來て合掌した。誰も皆な深い悲しみに沈んだ。

『それはさうと朝長は何うした？』

急に思ひついたといふやうにして義朝は訊いた。

皆なは振返つた。何處にもその姿は見えなかつた。

『あれも何處か射られたやうだつたが、何うかしたのではないか。さがりはしはせぬか？』



『いや、そこらにをられました。たしかに此處まではお出でになつた！』三浦はかう言つてそれを捜すために向うの方へと行つた。暫らくして朝長は三浦に伴れられてやつて來た。

『何うした？　さつき何處か射られたではないか？』

『案じ御座りませぬ。大したことは御座りませぬ……』

『何處ぢや、射られたのは？』

『こゝです……』かう言つて朝長は右の股のところを示した。指貫が赤く血に染みてゐるのが夜目にも著くそれとわかつた。

『痛むか？』

『少しは痛みますれど、大したことは御座りませぬ。』

『どれ？　お見せなされ？』傍にゐた鎌田は寄つて來た。

かれは朝長に指貫を脱がせて、傍にあつた緣臺を引寄せて、それに腰を掛けさせたが、雜卒の手から松明を取つてそれを仔細に檢した。

『ふむ、かなり深い。これでは痛いに相違ない？　馬は少し無理だな……。』

『何に……。』

朝長は元氣よく言つた。

『本當だと馬に乘らん方が好いのだが……しかし何うも止むを得ん。さうしてゐらつしやれ、手當をして上げる！』鎌田は腰に下げてゐる小さな袋から、美濃紙のやうな紙を出して、膏藥を塗つて、そのまゝそれを傷のところへと持つて行つて張つた。

『かうして置けば、ちつとは好い……』

朝長は元のやうに指貫を穿いたが、そのまゝ義隆の首のところに行つて合掌した。別に平生と變つたところはなかつた。

『憎い山法師だ！』今更にいろ〳〵取集めて考へられるといふやうにして義朝は言つた。

『それでも、うんといぢめてやりましたから、氣持が好う御座るな……。』

向うにゐた熊谷が言つた。

そこに舟を捜しに行つた雜卒達が戻つて來た。

かれ等は鎌田のところに來て何か頻りに囁いた。『ふむ、そいつは困つたな、』と鎌田は言つた。

『何うした？』

義朝は訊いた。

『殿！　舟が御座りませぬ！』

『舟が――な――い？』義朝も見る〳〵顏を曇らせて、『そんなことはないだらう？　舟がなくては困る。何處かにあるぢやらう？　搜しやうがわるいのぢやないか？』

『舟はあつても、この風では、とてもよう漕げぬと申すので御座います。何にいたせ、こゝから長命寺へわたるのは、北風の時が一番わるいと申しますから……』鎌田はかう答へたが、更に雜卒の方を向いて、『でも、誰ぞ行つて吳れるものはないか……？　船賃はいくらでも出すがな。もう少し搜して見て吳れぬか？』

『……？』

雜卒は默つてそれを聞いてゐたが、それではもう少し搜して見やうといふ風で、そのまゝ向うに出て行つた。『本當に舟が出ぬとなるとそれは困る！』義朝はかう繰返した。

かれこれする內に、雜吸が出來たり、粥が出來たりした。そこにも此處にも篝火が燒かれ、松明が點されて、あたりは一時晝のやうに明るくなつた。大きな釜からは、湯氣が白く颺つて、そこに往つたり來たりする雜卒や武士の顏が浮彫のやうに見えた。

この晩食は、尠くとも一行に取つて半は命であつたと言つて好かつた。其處でも此處でも雜吸

を啜る音が旨さうにきこえて、手に持つた箸や匙が梭のやうに早く早く動いた。かれ等は堅田まで行つたら何か食ふものがあるだらうとは思つてやつて來たけれども、しかもかうして落附いて——否、全然落附いたといふことは出來なかつたかも知れぬけれども、何處からか敵がまたあらはれて來はしないかといふ心配は誰の胸にも絶えず往來してゐたにはゐたけれども、しかも兎に角暫しは落附いて、かうして揃つて食事らしい食事の出來るのは豫想外であつた。かれ等は始めて生き返つたやうな心持になつた。

雑談すら其處此處で始まつた。今日の合戰のことや、京に置いて來た人達のことや、主上や上皇を逃がしたのが今日の失敗の基であつたことや、何うして上皇だけでも取留めなかつたかといふことや、いろ〳〵なことがそれからそれへとかれ等の口に上つた。これで湖水をわたる舟さへあれば——かう誰もかれも思つた。

しかし舟を出さうといふものは何處にもなかつた。船賃をいくら多く貰つても、この北風に長命寺行きの舟を出すといふやうな命知らずは先づあるまいといふことであつた。後には雑卒にばかり任せては置けないので、鎌田が三浦と一緒に出懸けて行つた。

しかしそれも徒勞であつた。かれ等は手を空しうして戻つて來た。



『困つた！』

かう義朝も言つた。

鎌田は言つた。『止むを得ませぬ。西江州を鹽津の方まで參りませうか。鹽津まで行けば、あれから淺井郡の方に出るのはわけはありませぬ。』

しかし、それとて容易なことではなかつた。不知案内であるばかりでなく、里數としても何里あるかわからず、路としても馬の通れる路があるか何うかわからなかつた。義朝は手を組んで深く考へに沈んだ。

『夜半まで待つたら、風は止みはせぬか？』

『さあ！』

鎌田も考へた。

落武者の身では、さうしたのんきなことは考へてゐられなかつた。いつ何處から敵がやつて來るかわからなかつた。龍華を越して落ちたといふことも、最早京には知れわたつてゐるに相違なかつた。

爲方がない。こゝで皆なと一時わかれることにしやう。銘々に本國に歸るものは歸つて貰はう。

そして時節を待つて貰はう。復仇の合戰を始める時には、屹度それと申し遣はすほどに、その時には再び參會して貰はう。義朝は遂にかう言ひ出した。

齋藤も、波多も、三浦も、岡部も、熊谷も、平山も、足立も、折角こゝまでお供して來たのだから、何處までも——たとへ敵に捕へられるまでも同じ道に落ちたいと口を揃へて言つた。しかし、こゝから引返して勢多の方へ落ちて行くには、とてもさう大勢馬の轡を並べて行くことは出來なかつた。義朝は重立つた人達を近く呼んで、詳しくその話をしてきかせた。皆なはそれでも とも言ふわけには行かなかつた。誰も彼もこのさびしい湖畔の一驛で急に別れを告げなければならなくなつたことを悲んだ。

## 二

義朝は三人の子息の他に、鎌田と金王丸と佐渡式部大輔重成と平賀四郎義信とを伴れて、八騎だけで勢多に向つて落ちて行くことにした。

『それでは御無事で……』

『今度逢ふ時には、必ず平家を亡ぼして見せるほどに、達者で居りやれ！』

『何處へ行つてゐても、ゐるところは必ず知らせる程に……』

それは義朝と家臣達との別ればかりではなかつた。武士達の別離の言葉もそこで悲しげに心細げに取交された。かれ等の落ちて行く路も區々であつた。北國道をずつと向うまで行かうといふものもあれば、今夜は行けるところまで行つて、風の止むのを待つて、明日は湖水を渡つて行かうといふものもあつた。大津から京に引返して二三日何食はぬ顏をして、それからゆつくり東國へ落ちて行かうといふものもあつた。熊谷や齋藤や平山は、一緒に落ちて行くことは出來なくとも、せめて義朝達の取つて行く路をあとから慕つて行つて、もしもの事のあつた曉には、何その

役に立たうなどと云つて相談した。

皆なは起ち上つた。鎧をも着けた。兜をも着た。馬にも十分ふすまを食はせた。これならば今夜一夜走らせても大事あるまいといふだけの支度をした。いよ〳〵出發すべき時は來た。

『源太！』

かう事ありげに義朝は呼んだ。

義平は急いでそつちの方へと行つた。

『それを持つて來い！』

そこに置いてあつた義隆の首を指しつゝ言つた。義朝は既に鞍に跨つてゐた。

『何うなさいますか？』

鎌田は振返つて聞いた。

『いや、この身が手づから葬るによつて、源太と二人で、それを持つて、この身について來よ！』

『は——』

事の何であるかゞ二人にはすぐわかつた。源太と鎌田とは、命ぜられたまゝ、それを捧げるやう



に持つて、そのまゝ其方へと行つた。義朝は靜かに馬を歩ませて街道へと出た。松明が一つその あとに續いた。齋藤や熊谷や平山や三浦もそれと知つて急いで其方へと行つた。既に馬に跨つた朝長も頼朝もその後を追つた。

街道を少し行つたところから、幅の廣い路が左にだら〳〵と湖水の岸へと下りて行つてゐたが、松明を前に立てた義朝の馬は、そのまゝぐん〳〵其方の方へと下りて行つた。湖水はやがてその前にひろ〳〵とあらはれ出して來て、北風に凄まじく湧き立つてゐる波がたぶたぶと岸を打つた。

そこはこの浦の船着で、時に由つては荷を積んだ舟が五隻も六隻も繋がれてあるやうなところであつたが、現に、闇にもその名高い浮御堂の湖上に浮いてゐるのも微かに指されて見えてゐたが、義朝はその首を源太の手から受取るや否、用捨なく馬を湖水の中に打入れて、殆どその太腹の浸るあたりまで手綱を引いた。

岸には松明の火が高くかゝげられて、そこには一場の悲しい光景を照し出した。義朝はその膝あたりまで水がやつて來るのをも厭はなかつた。恩にもなり力にもした伯父のために、かれは出來るだけ深く深く入つて行かうとした。かれは浮御堂の少し手前のところまで行つて、そこで始めて底深く義隆の首を沈めた。義朝は佛の名を唱へて合掌した。

深い闇の中でも、星の光が微かに地上に及んでゐると見えて、空を劃つた山の黒い影も、長く前に續いてゐる街道も、その街道の上にをり〳〵あらはれて來る藁葺の屋根も、たまさかに低い星かと疑はれる灯の影の搖らめきも、ほんやりと微白く展げられてゐる湖水のひろがりも、ところ〴〵疎らに灯の點綴されてある町らしい集落も、村に添つて黒くつゞいてゐる林も、否、先に驅けて行つてゐる馬の鎧の動くのも、鞍の上の人の鎧や兜の動くのも、後に負つた胡籙の矢の羽の白いのも、何も彼も、はつきりとは行かないまでにも、それと夜目に指されて見えた。平賀を先頭に、義朝を中に挾んで、八頭の馬はつとめて蹄の音を高くしないやうにして急いだ。

比良おろしは肌を刺すやうに寒く、湖の畔を行く時には、岸に波の打ち寄せるのが絶えすたぶたぶと聞えて來てゐたが、しかも負ひ風であるといふ事がどれだけかれ等に幸であつたか知れなかつた。かれ等はその風の寒さを、もし反對に向ひ風であつたならば顏も手足も凍つて了うであらうと思はれるその風の寒さを免れ得たばかりではなく、そのため、却て馬の足を早めることが



出來た。

それにしても何處からさうした事を考へ出したのか、またいつからさうした暗い幻影がその頭に映り出して來たのか、或はあの義隆の首を源太の手から受け取つた時の心持がそのまゝさうした暗い影を誘ひ出して來たのか、義朝の頭には、父親の事が、鎌田に斬らせた六條判官爲義の首の事が、拂つても拂つてもつきまつて來て、容易にそこから離れて行くことが出來なかつた。かれは義隆の首の中に爲義の首を見た。爲義と義隆とは、同胞でありながら非常に仲がわるかつたといふことをかれは繰返した。また、かれと父親とは仲がわるいといふほどではなかつたが、常磐のことで、互ひに不快に感ずるやうになつたことを繰返した。否、そればかりではなかつた。かれ等二人は、源氏の兵共を帥ゐる上に於いて衝突した。義朝は鳥羽法皇に寵せられてゐたが、その反對に、爲義は崇德院が位を下りられたゝめにその勢力の半以上を失つて了つたやうな立場にゐた。(何うしてあの時、あゝいふ心になつたらう？　父が此世から亡くなつて了ふといふことについて、何うして悲しく思はなかつたらう？　父がゐなくなれば、源氏の勢力はすべて自分のものになる。何故そんなことを思つたらう？)かう繰返す度にかれは何遍となく頭を振つた。

鎌田が首桶に入れて持つて來た首……爲義の首……あの無念さうに齒を喰ひしばつた首……あ

の白髪の……あの眞中のところの兀げた、あの眼がぐるりと大きく物凄く明いてゐた……それは美濃にゐる時分から恐ろしいと思つてゐた眼……（あの時、父の方につけば好かつたのだ。さうすれば、今とは反對に、平家は亡びたのだ……。しかし、そのため、この身は何うなつたらう？この身も勢力を失つて了つたらう……？）かう自分で自分をつぶやくやうに言つたが、今度はそれと違つて、舟岡の山の下で斬られた同胞達のことがはつきりと浮んで來た。乙若の言つた言葉……幼い龜若の言つた言葉……無慚な斬首……あの小さな眼をぱつちり明いた三つの首……。急に義朝は堪らなくなつた。その身がかうした悲慘な敗北に逢ふのもその爲だといふやうな暗い暗い心に虐まれた。しかもそんなことには少しも關しないといふやうに馬は頻りに走つた。暗い闇の中には長い長い路が何處までも何處までも續いて行つた。



## 二三

馬は頻りに走つた。

日吉の社の傍をも通れば、灯の影の多い阪本の町をも通り拔けた。一度見えなくなつた湖水がまた左に見え出して、唐崎の松の地上を這ふやうに靡いてゐるのもそれと微かに指さされた。

別にあやしまれるといふこともなくて、次第に大津の町近くなつて行つたが、深い森に包まれてゐる園城寺の境内には、灯が高く低く見えて、やがて亥の刻を報ずる鐘の音が、吹荒る〻北風に散らされでもするやうに斷續してきこえ出して來た。

八騎は大抵最初の列を保つてやつて來てゐたが、朝長と賴朝の馬は、ともすれば遲れ勝ちで、時には列の中から離れて五六間あとに取殘されるやうなことがないではもかつた。さういふ時には金王丸と佐渡式部大輔重成とが馬をとゞめてそれを待つてゐたり、それでもまだやつて來ない時には、あとに戻つてその世話をしてやつたりなどした。

あるところでは、鎌田はわざ〻もどつて來て、心配さうに朝長に尋ねた。

『傷痍は痛みはしませぬか？』

『いや……大しことはない。』朝長はかう元氣に答へた。

頼朝はまた頼朝で、『何でもない！』と言つて、勇氣を見せでもするかのやうに、義朝の走らせてゐるあたりまで先に出て行つたりした。

しかし、大津の町に入るといふことは、かれ等を緊張させずには置かなかつた。それは逢坂の關といふものがあつて、そこで嚴重に固めてゐるので、大津の町には、さうした侍や武士達の守つてゐるやうなことはあるまいとは思はれてゐたけれども、またそつちの街道から逆に今日の合戰の落武者が落ちて來やうとは思つてゐないに相違ないので、もし守つてゐていざといふときにも、それは突破するのにさう大して骨は折れないと思つてはゐたけれども、しかも出來ることならば、さうした障碍なしに勢多まで一氣に驅けて了ひたいとかれ等は思つた。かれ等は町に入る少し手前で、ちよつと立留つて、そこを通り抜けるについての打合せをした。

『では宜しいか？』鎌田が言つた。

『では、皆な大丈夫か？』

義朝は更に頼朝や朝長の方を見て言つた。



『父上、心配はありませぬ！』

かう頼朝は冴えた調子で言つた。幸にさう心配したほどのことはなかつた。北風が吹荒れて、岸にすさまじく湖水の波の打寄せる夜は、町でも皆な戸を閉ぢ蔀を下して、奥深く灯のもとに集まつてゐるものばかりで、誰もものずきに闇の夜を外に出て歩いてゐるものはなかつた。唯一度、町の通りを曲らうとするところで、そこにゐた乞食か夜盗の群らしいものが、『えらく馬が驅けて行くぢやねえか？　今日の合戰の落武者ぢやねえか？』かう言つて立つてじつと見送つてゐるものがあつたゞけであつた。しかしそんなことは何でもなかつた。町はやがて通過して了つた。次第に湖水の上を渡つて吹いて來る北風が、亂杭齒のやうになつた家と家との間から寒く強くかれ等の左の鎧の袖を吹いた。星がキラ〳〵と吹散らされでもするやうに光つた。

逢阪の關からずつと此方に下りて來た路は、もう少し行つたところで、ひたりとそれとひとつになつた。そこにもかれ等は何の障碍をも發見しなかつた。もはや大丈夫だと言はぬばかりにかれ等は頻りに馬に鞭を當てた。

粟津の原の闇をかれ等は瞬く間に通過した。やがて勢多に來た。蹄の音は古い長い橋の板にとゞろに響いた。

篠原堤に來た時、義朝は氣が附いたやうにして言つた。

『若いものは皆なゐるか？　さがりはしないか？』

『大丈夫です……』

かう源太が答へた。朝長や賴朝は兎角遲れ勝ちではあつたけれども、あとから續いてやつて來てゐるものとばかり彼は思つた。否、朝長のやつて來てゐる馬の蹄の音は深夜の闇の中にも聞えてゐた。

一行は暫し立留つた。

『大夫進か？』

『さう……』

あとから來たその一つの黑い影は答へた。

『兵衛佐は？』



續いて義朝は訊いた。

『あとから參ります。』

かう朝長は答へた。で一時皆なは安心した。あとからすぐやつて來るだらうと思つた。靜かに並足で歩ませてゐればすぐあとから追附いて來るだらうと思つた。かれ等は勢多を越して初めてほつと安心したのであつたが、出來るだけ急がうと思つて、馬に鞭を當てやつて來た。しかもその間にも義朝は絕えずその暗い心に虐まれ通しであつた。

『大丈夫か？　兵衛佐は來たか？』

義朝は度々振返つて訊いた。

しかし賴朝は容易にその姿をそこにあらはさなかつた。『大夫進？　お前行つて見ろ？』かう言はれて、朝長は五六間引返して、闇をすかして向うの方を見た。始めて彼は胸を轟かした。ついさつきまでは――尠くとも勢多から田圃道を通つて小さな宿驛らしい集落に來るまでは、確にそのあとに、十間乃至二十間を隔てゝ、兵衛佐のつゞいてやつて來るのを見もし感じもして來てゐたのであつたが、何うしたのか、今はさうした氣勢も何もなかつた。

『兵衛佐！』

朝長は聲を擧げて呼んで見た。答へがなかつた。
そこに鎌田がやつて來た。
『何うしました？　來ませぬか？』
『つい、さつきまで、そこにゐたのだけれど……この身のあとからつゞいて來てゐたのだけれど……何うしたのかな？』かう朝長は言つて、
『兵衞佐！』
また呼んで見た。
矢張答へはなかつた。あたりはしんとしてゐた。眞の闇で、何處を見廻しても灯一つ見えなかつた。
やがて義朝も心配してやつて來た。
『見えぬか？　困つたな？　だから、さつきから言つてゐたのだが——』義朝は考へて、『何うかしたのではないか？　後れたのなら、すぐ來さうなものだが、さつきの宿で敵に生捕られたのではないか？』
『そんなことはないと思ひますけれど……』朝長は言つた。



『田！　ちよつと行つて見て來て呉れぬか？』
鎌田はそのまゝ馬を戻して行つた。尠くとも、かれは篠原堤の長い土手を三分の二以上向うに行つた。『佐殿！　佐殿！』かう二度も三度も呼んで見た。しかし何の答へもなかつた。唯、遠くで——さつき通つて來た小さな宿驛の方で頻に犬の吠える聲がした。
止むを得ずかれは引返した。
『をらぬか？』
『餘程向うまでもどつて見ましたけれども、何うもさうした姿はお見えになりませぬ……。後れたものなら、いくら後れたと申しても……』
『さうぢやな……。さては敵に生捕られたかな？』多い息子達の中でも一番可愛がつてゐたので、義朝は深い溜息をつかずにはゐられなかつた。『佐殿？』また鎌田は聲高く呼んで見た。矢張何の答へもなかつた。
しかし、何う考へて見ても、義朝は賴朝をあとに置いて、敵に捕はれたかも知れないのをそのまゝにして、旅を續ける氣にはなれなかつた。
かれは鎌田に言つた。

『氣の毒だが、御身、見て來て呉れぬか？　敵に生捕にされたものなら、何うも止むを得ぬが、ことに由ると、後れたのかも知れぬから……？』

『かしこまりました――。』

かう言つて鎌田は再び馬をあとへ戻した。

賴朝は勢多の橋を渡つて、野路といふ小さな集落あたりまで來る間は、一行に後れもせずに、朝長の馬のあとについてやつて來てゐたが、勢多を無事に通り越したといふ安心から、一日の疲勞が出て來たと見えて、頻りに眠氣が催して來て、何とも言はれない好い心持になつて――半ば走り半ば歩むやうな馬の調子にも催されて、眠つてはいけないと幼い心にも思ひながら、ついウトウトと手綱を引きながら夢心地になつた。馬の足が街道の石に躓いたと言つては覺め、泥濘の路に片足を入れたと言つては覺め、小さな橋らしいところに來たと思つては覺めして、碌に眠るといふほどではなかつたけれども、しかもその夢には十一歳の時にわかれた熱田の母親の顏や、六條堀河の宿所に置いて來た乳母の顏や、幼い頃一緒に竹馬に乘つたり雀小弓をしたりして遊んだ女の童の顏などがはつきりと浮んで見えた。かと思ふと、ほつかり覺めて、夜の暗さが、あたりのさびしさが、またその向うに朝長を始め一行の馬の並んで走つて行くのが、微かに幻影のやう



になつて見えてゐるやうな氣がしたが、そんなに急がなくとも好いだらうに、此處まで來れば、もうゆつくり行つても好いだらうになどと思つたりなどしたが、しかもまたいつかウトウトとして、今度は路傍に小さな一軒家があるのも、今までとは違つて湖水が茫と反對の方に見え出して來てゐるのも、夜の梟が路傍の一本の大樹の中に物凄く啼いてゐるのも、星が一つぽんやりと夜の山の上に光つてゐるのも、形の好い三上山が夜目にもそれと著くその向うにあらはれて來てゐるのも、何も彼も知らずに、唯をり〳〵本能的に手綱を緩めたり引いたりして、馬の歩いて行くまゝに任せて來たが、ふと氣がついた時には、最早かれはその前に朝長の馬をも何をも見出さなかつた。賴朝ははつとした。眼も何もすつかり覺めて了つた。かれは跡を追ふつもりで、頻りに鞭を馬に當てた。

二十七日の夜更のことゝて、月もまだのぼらず、あたりは眞の闇で、唯眼の前に路のつゞいて行つてゐるのが微かにそれと指されるばかりであつた。それほど長く眠つたとは思はぬのに、ちよつとウト〳〵したぐらゐと思つてゐるのに、行つても行つても、一行らしい姿は見えず、たうとうその身は置いて行かれたかと思ふにつけても、何とも言はれず心細く、さうかと言つて、あとを追はずにゐては、猶更その間が遠くなるばかりなので、賴朝は半ば泣きたいやうな心持で、

頻に馬に鞭を當てゝ走らせて行つた。

やがて氣が附くと、路は田圃らしいところからいつか宿驛らしい集落へと入つてゐて、次第に三角形をしたぐしの高い屋根の兩側に連なつてゐるのが見え出して來た。否、ところ〴〵に灯が小さく點し殘されて、或る家の内では、頻に人聲のしてゐるのをかれは耳にした。かと思ふと、人のゐる氣勢はせずに、灯の影だけがぱつと障子にさしてゐる家などもあつた。ある家では、それは酒を賣る店らしく、何か濁聲で男が女をこづき廻してゐるやうな氣勢もした。比良おろしはさつきに比べていくらか靜かにはなつたけれども、それでも家の角や庇や鬼瓦などに寒い寒い音を立てた。

宿の中ほどまで來た時、思ひも懸けず黑い人の影の七八人もぞろ〴〵と其處此處から出て來てゐるのを賴朝は見た。

しかし、かれはそれが落武者を生捕るためとは知らなかつた。否、宿では、さつき義朝の一行の通つたのに目覺めて、『今夜はいやに馬の蹄の音がするではないか。たしかに落人だ……。今日の合戰に敗けて逃げて行く落人だ……。運が好いと大將ぐらゐ生捕れるかも知れない。』こんなことを言つて宿の沙汰人達が數多く出て來てゐるとは少しも氣が附かなかつた。かれは急いでそこ



を通り拔けやうとした。

と、その黑い人の影の團の中から、突然跳り出てかれの前に立ちはだかつたものがあつた。それは他ではなかつた。宿の沙汰人の中でも重立つたもの〻一人である源内兵衛眞弘であつた。かれは腹卷をして、長刀を持つて、さつきからそこに出て來てゐた。

いきなりかれは賴朝の馬の口に取附いた。

『留り召され！　六波羅からの御沙汰で御座るぞ！』

かう言つたまゝ眞弘は臂を伸した。既にその小さな體を馬から抱き下さうとした。その時賴朝は拔く手も見せずに源氏重代の髭切を拔いて、拔き打ちに眞弘をしとと斬つた。眞向を二つに割られた眞弘は、あツ！　と言つたまゝのけざまに倒れて了つた。

續いて出て來た男は、それを見て、

『こいつ！　痴者！　よくも斬つたな？』

かう言つて、再び馬の口に取附いてそれを留めやうとした。

賴朝はまた斬り下した。今度は小手の覆ひからかけて、右の腕が半ば切落されてぶらりとさがつた。その男もあつ！　と言つて蹲踞んで了つた。

唯それだけであつた。そこにはまだ他に五六人も沙汰人が出てゐたけれども、見かけによらず二人まで打たれたのを目にしては、誰も進んでそれを遮らうとするものはなかつた。頼朝は刀を鞘に收めると同時に馬に鞭を當てた。

馬は一散に走り出した。

宿を出て了ふまで、最早誰もあとを追つて來るものはなかつた。

頼朝はほつとした。まあ好かつたと思つた。危うく生捕られるところを旨く斬つてやつたな！とも思つた。しかし安心しては居られなかつた。これから先にもどんな障礙が待構へてゐるか判らなかつた。それにしても父上や鎌田は何うしたらう？　矢張、あの宿を通つたに相違ないが、あゝいふ目には逢はなかつたのか？　それとも路が違つたのか？　いや、そんな筈はない。これより他には、右にも左にもわかれる路はなかつた筈だ……。さう思ふにつけても、一刻も早く一行に追ひつかなければならないとかれは思つた。かれは頻りに馬に鞭を當てた。氣が附くと、かれの心臓は頻りに高く動悸を打つてゐた。

急に、今までとは違つて、あたりが濶々として來た。大きい小さい石のごろ〳〵轉がつてゐるのが見え出して來た。否、向うに闇を隈取つて、高い山と山との連つてゐるのも夜目にそれと著



るく見え出して來た。そしてところどころに小さな橋のやうなものがかゝつてゐて、そこにさらさらと水の流れてゐる氣勢がした。ところに由つては、淀んで淵を成してゐる水の上に星がキラキラとその影を落してゐるのが見えた。

『大きな川原だな？』

頼朝はかう獨りでつぶやきながら、その間の路を縫うやうにして歩ませて行つた。ところどころ篠の深く生茂つたところがあつて、それがガサ〳〵とさびしく夜風に戦いだ。頼朝は一層心細くなつた。こんな路を歩ませて行つて好いのか？　何處かで路を取違へたのではないか？　丸で別な方に父や鎌田は行つて了つてゐるのではないか？。

ふと氣が附いた時には、かれは馬の蹄の音の此方の方へと響いて來るのを耳にした。

また何か來たのかと思つたのもほんの瞬間であつた。頼朝は忽ちその前に鎌田を見た。

『お！　佐殿！』

『鎌田――』

頼朝の聲は喜悦に震へた。

『まあ、好かつた。何うなすつたかと思つた。殿も心配して御座つた……』

『……』

何か言はうとしたけれども、頼朝は餘りの嬉しさに急には口がきけなかつた。

『何うなすつた？　別に何にも御座りませぬでしたか。』

『えらい眼に逢うた。』

頼朝は言つた。そして簡單にその話をした。

鎌田はきいてゐたが、『ふむ――それは何處で？』

『すぐそこの宿で――』

『ふむ、それは危なう御座つた。私共の通る時には、なんのことも御座らなかつた……ふむ、一人は眞向に一人は右の小手を――それはえらう御座つたな？。』

並んで馬を歩ませながら、

『ようそれを斬拔けて來られた。殿も虫が知らせたと見えて、そんなことはありはせぬか、生捕られてゐるやうなことはありはせぬかと言うて、それを心配して御座られた！』

『餘程、先まで行つたのか？』

頼朝は訊いた。



『いや、そんなに先までゞは御座らぬが――何うしたのかと思うて、案じてをりました――あの宿まで行つたら、樣子がわからうといふので、それで此處までやつて參りました――』

『さうか――？　それはわるかつた……』

濶い川原を向うに越して、土手になつたあたりから、かれ等は馬に鞭を當てた。そこらは一面に篠笹の茂つたところで、その藪のガサ〳〵と夜風に戰ぐ音が馬の轡や蹄の音と雜り合つた。やがてかれ等は次第に一行の待つてゐるところへ近寄つて行つた。

そこには松明の火が一つぽつと闇の中に浮ぶやうに搖いで點されてゐるのが遠く見えた。

『佐殿ゐたか？』

『佐殿――』

かういふ聲が其處からきこえた。一つの松明の火をめぐつて、馬やら兜やら胡籙やらが混雜とかたまつてゐるのが見えた。

金王丸と佐渡式部大輔とがそれを迎へるためにずつと此方まで馬を走らせて來た。鎌田と一緒に頼朝がやつて來たのを見た時には、誰も喜悅の聲を擧げないものはなかつた。義朝も胸を撫で下すやうにした。

『矢張、さがつたのか？　それにしても何處で逢うた？　ふむ、河原の向うのところで、うむ？何うしたと？　沙汰人に生捕られやうとしたのを、一人は眞向に――ふむ、一人は右の小手を……？　ふむ、それで斬りぬけて來た？　ふむ？　それはようやりをつた……』義朝はその守山の宿での一伍十什をきゝながらさも喜ばしげに言つた。

『ふむ、佐殿が？　ひとりで二人を？　それはえらいな……』

平賀も佐渡も言つた。

『大人でもそれまでぢや……天晴ぢや。』

かう義朝も褒めて、

『ふむ、さうぢやらう？　馬睡りが出て、ついさがつたのぢやらう？　まさかにおめ〳〵と生捕られはすまいと思うた。よかつた、よかつた。ふむ、眞向に――？　さうか、鬚切がよう切れたか？』かう言つたが、急に鎌田の方を向いて、『それにしても、京から沙汰が來てゐると見えるな？　油斷はならぬな？　夜ですらさうだとすると、晝は一層心を用ゐねばならぬな？　不破の關はとても通れぬな？』

『不破の關は通れませぬな！』



かう鎌田も言つた。

暫くしてから、『金王丸、松明を消せ！』かう義朝は言つた。やがて皆なの鞍に跨る氣勢がした。

一行はまた盲目の運命でもあるかのやうな眞暗な夜の闇を衝いて出發した。